

二九 十一個年の匪政

無議院十
個年惡
政の

查斯一世の無議院十一個年は、最も匪政、違政、惡政の期間と云はざる可らず。一方に於ては、故らに清教徒を抑壓し、其の彼等が嚴守する安息日の靜肅を侮辱せんが爲めに、日曜日の遊戯を獎勵し、宛も彼等の感情を害せんが爲かの如く、故らに羅馬舊教擬ひの儀式を恢復し、甚だしきは聖母馬利亞をさへ禮拜せしめ、更らに大陸より舊教徒の迫害を避け來る、信徒の禮拜堂を襲ひて、之を禁止し、清教徒の出版物を押收し、停止し、他方に於ては、專賣の濫許を行ひ、或は久廢の過料を命じ、或は無法の御用金を課し、或は星^{スター}、廳^{ホール}、や、高等委員廳^{ハイコムミッショ}等舊時の制度を再興、惡用して、以て專制政治の機關となせり。されば王朝方の史家クラレンドン^{クラレンドン}さへも、斯く云へり、曰く、各種各般の不正なる計企、或は冷笑す可き、或は醜惡す可き、而して悉く皆な疾苦す可き事は、相接して著歩せられたりと、然も實際は、人民は之が爲めに、左迄の不幸を被らざりし也。

全く人民
の公益を
無視せる
に非ざる

蓋し當時の政府は、全く人民の公益を、無視したるにあらざりし也。或は郵便制度を改良し、或は衛生の方法を進歩せしめ、或は沼澤排水の策を講じ、國民をして其慶に頼らしめたることも、亦た少小ならざりし也。而も其の徵稅の如きも、議院の協贊を経ざる、違法の沙汰には相違なきも、必ずしも苛斂、誅求と云ふ可らず。其の賦課の程度に於ては、議院の協贊を経たるものより薄かりしやも、未だ知る可らざりし也。

國民に取
りては堪
へ難き疾
苦

然も人間は感情の動物にして、活ける打算機にあらざる也。國民は其の當面に於て、信仰の自由と、參政の權利とを蹂躪せられ、其の良心と財囊とを、他の仁惠に一任するを以て、最も堪へ難き疾苦と做せり。而して查斯王の兩翼たるコロド^{コロド}と、ウエントウオースとは、遠慮會釋なく王をして、之を強制、厲行せしめたり。されば其實は、暴政にあらず、逆政にあらざるも、國民はそれ以上の疾苦を以て、之を邀へたり。是豈に自ら求めて、國民の爆發を招きたる所以にあらずや。英國に於ける反抗の第一聲は、ハムデンの船稅拒否に於て揚られたり。是れ實

反抗の第
一聲

民黨側
に於ける
一人の
完人

蘇格人民
の激甚な
反動

に一六三七年一月の事也。ハムデンは、既に一六二七年の御用金を拒否して、其の不羈強硬の氣概を露はしたる好男兒也。彼は名家の出にして、實に哥倫の從兄弟也。彼は民黨の領袖エリオットの親友にして、彼自らも亦た其の一人也。彼は時事の日に非なるを見、北米に移住せんが爲めに、既に其の土地を購へり。彼は其の氣度高邁にして、聰明多識也。其の手腕や非凡にして、特に人を誘導するに於て、異常の能力を有せり。然も亦た其の品性や、清醇にして、愛好す可く、眞に民黨側に於ける、一個の完人たるに庶幾かりし也。而して今や謹厚なる彼は、違憲政治の挑戦者として、法廷に出で來れり。彼は固より法廷に於ては、失敗せり。然も輿論の法廷に於ては、成功せり。天下に於ける民黨の氣勢は、實に彼の一唱の力にて興起せり。國王の鼎の輕重は、實に之が爲めに問はれし也。然も事端は、却て意外の邊より破綻を來たせり。查斯王が蘇格に向て、監督教會用の祈禱書を厲行し、其の宗規書を強用せしめんとしたる政策は、乍ち激甚なる反動を惹起せり。蘇格人民は期せずして、其の連判狀に署名せり。貴族豪士は

馬に跨りて、連判狀を携帶し、其の参加を募集せり。民衆は感激涕泣して、之に應じたり。而して血書したる者も少からざりし也。

蘇格人民
の意見と
覺悟

形勢此の如し。されば查斯王の名代として、調停の爲に來りしハミルトン侯は、蘇格人より高等委員廳の廢止、祈禱書及び宗規書の撤回、自由議院、自由一般會議の開設等の要求を突き附られたり。查斯王は之に見て、ハミルトン侯に書を與へて曰く、朕は死すとも、此の如き無禮にして、極道じみたる強要に應ずる能はざるなりと、然も蘇格人の意見は、空言にあらず、彼等は兵力に訴へても、之を貫徹せんとするの覺悟ありし也。

蘇格の謀
反

王は其の談判を延期し、其間に於て、或は兵と金とを西班牙、及び佛蘭西に借らんとして成らず。而して更に艦隊を特派し、以て蘇格人を威嚇せんと企てたり。されど蘇格人は、寧ろ此企の先を越して動けり。嘗て三十年戦争の實験を経たる老兵等は、何れも競うて、皆な大陸より歸來せり。而して瑞典王ガステウスの麾下に訓練せられたる將軍レスリーは、瑞典より還り來りて、其の指揮官とな

れり。蘇格の謀反は實に容易ならぬ形勢とはなりぬ。

蘇格の謀反は實に容易ならぬ形勢とはなりぬ。蘇格人は、蘇格人の要求を聽容せり。されど恒心なき彼は、直ちに復た之を取消せり。然も蘇格人は、毫も其の命を奉せず、依然として其の自由行動を逞うせり。然も王は之を征討するの軍資と、軍兵とを有せず、更らに餘儀なく蘇格人の要求を認許せざる可らざる破目に陥れり。家貧にして良妻を懐ひ、國艱にして良相を懐ふ。彼が眼を轉じて、愛蘭よりウエントウォリスを招致したるも、亦た已むを得ざる也。ウエントウォリスは、愛蘭に於て、其の理想的専制主義を發揮しつゝありき。彼がハムデンの反抗を聞くや、慨然として曰く、予は速かにハムデン及び其の雷同者に、鞭筆を加へて、其の正心に立ち返らしめんことを望むと、彼が蘇格人に對する、亦た此の筆法たりし也。即ち彼は鞭筆主義を以て、查斯王に勸説し、一六三九年二月、自から二萬圓を軍資に献納せんと申し出でたり。而して同年九月、彼が愛蘭より英國に還る

三〇 監督戦争

餘儀なく
要求の認
許

ウエント
ウォリス
を招致

鞭筆主義

查斯王は、勢の不可なるを見て、蘇格人の要求を聽容せり。されど恒心なき彼は、直ちに復た之を取消せり。然も蘇格人は、毫も其の命を奉せず、依然として其の自由行動を逞うせり。然も王は之を征討するの軍資と、軍兵とを有せず、更らに餘儀なく蘇格人の要求を認許せざる可らざる破目に陥れり。家貧にして良妻を懐ひ、國艱にして良相を懐ふ。彼が眼を轉じて、愛蘭よりウエントウォリスを招致したるも、亦た已むを得ざる也。ウエントウォリスは、愛蘭に於て、其の理想的専制主義を發揮しつゝありき。彼がハムデンの反抗を聞くや、慨然として曰く、予は速かにハムデン及び其の雷同者に、鞭筆を加へて、其の正心に立ち返らしめんことを望むと、彼が蘇格人に對する、亦た此の筆法たりし也。即ち彼は鞭筆主義を以て、查斯王に勸説し、一六三九年二月、自から二萬圓を軍資に献納せんと申し出でたり。而して同年九月、彼が愛蘭より英國に還る

や、彼は反抗の氣運が、如何に英國に充滿しつゝあるかを解せず。蘇格征討軍を再發する爲めに、速かに議院を召集するの得策なるを語り、而して若し議院が軍資を拒まば、樞密顧問官をして、其の軍資を貸與せしむ可く、乃ち自個も二十萬圓を出資す可しと献策せり。

查斯王は豫てウエントウオースが、自ら威名を帯ばざれば、愛蘭士民を懐柔するに不便なるの理由を具して、頻に其の進爵を望みたるに耳を假さざりしが、一六四〇年一月、遂に彼をストラファード伯に進めたり。彼は其の三月に愛蘭に赴き、僅々二週間にして、兵と金とを得、彼が存分の目的を果せり。而して其の四月、英國に還るや、所謂る短期議院は、既に召集せられ居たり。

然も英國の議院には、ピムの如き好敵手のあるあり、愛蘭の議院の如く、彼が握裡中の物にあらざる也。彼等は事實に於て、蘇格人と利害を一にするを知れり。蘇格人の反抗は、其實英人自由の爲めの戦争にして、蘇格人を退治するは、自個の自由を撲滅する所以なるを知れり。露骨に云へば、議院の領袖は、蘇格の叛徒

愛蘭に於て目的を果せり

議院の領袖と蘇格の叛徒

戦ふを欲せず

時事の非徒と蘇格の叛

蘇兵優勢

と、内外相策應したりし也。されば彼等は、軍資支出の先決問題として、其の從來の疾苦を除却せんことを發議せり。乃ち王は船税の廢止を以て、其の決議を聽へさんとしたるも、彼等は頑として應せざる也。彼等は蘇格人と和するを欲して、戦ふを欲せざる也。是に於てか此の議院は、開會三週間にして、遂に何等の要領を得ず、解散せられたり。王は何等の成案ありしにあらざ、但だ一時の怒氣に乗じて、急遽之を斷行し、悔ゆとも及ばざりしのみ。

時事愈々非也。王黨側の諸人皆な色を失へり。獨りウエントウオースは、毫も屈託せざる也。彼曰く、議院既に正當の支出を與へず、是れ彼等自から協賛の權を抛却する也。此れよりして國王は、其の必需と認むるの資金を、其の適當と認むる方法に於て、徵集す可きのみと、彼は議院の不賛成を以て、却て國王の大權行使の便宜と見做せり。彼は蘇格の叛徒を膺懲するを以て、政府の威信を恢復する所以と信じ、之を王に勸説し、自から兵を率ゐて北に向へり。

然も蘇格の老兵は、英國生兵の比にあらざ、彼等は先づ國境を踰え、却て進攻の

敵は背後にもあり

查斯王の
期議院と長

勢を取れり。彼等はニューキャッスルを占領し、此處よりして、講和の條項を王に送れり。王若し之を聴かずんば、彼等は更らに南下して、ヨークを襲はんずるの氣勢を示せり。而してウエントウオースの兵士は、所謂一種の暴民にして、威嚇するも、其効なく、慰諭するも、其効なし。流石のウエントウオースも、此の如き兵士を率ゐては、何事も成す能はざる也。

然も敵は前面にあるのみならず、却て其の背後にある也。英國民は、概ね蘇格の反軍に同情したり。民黨の領袖は内通したり。英王は今や板挾の地に立てり。彼は進んで蘇格の叛徒を制する能はず、退いて自國民の同情に頼る能はず。然も倫敦には暴民の蜂起して、ロードに僇辱を加ふるあり、高等委員會場に闖入するあり、新兵は其の士官を殺すあり。而して世間一般、此の戦争を「監督の戦争」と稱して、宛もロード一輩の私闘の如く言做せり。

查斯王は、今や十一年間無議院の年貢を納む可き時節に到着したりし也。彼は佛國より、西班牙より、否なゼノアの商人より、甚だしきは羅馬法王にさへ叩頭

して、借金を試みたり。然も誰しも其の需に應せざりし也。彼は貨幣の性を悪化せんと試みたり。されど誰しも銀貨の代りに、銅貨を受取る者はあざりし也。彼は百計議院を召集するを避け、貴族の大評定會をヨークに開催し、以て之に代へんと試みたり。然も是亦た其の目的に副ふ能はざりし也。彼は此に於て已むを得ず、再び一六四〇年十一月、議院を召集せり。是れ實に英國史上に不朽の名ある、長期議院也。

三一 民黨の大立者

叙して此に到れば、吾人は民黨運動の中樞人物たる、ビム其人に就て、一顧せざらんとするも能はざる也。若し英國史上に於て、劈頭の議院政治家を挙げば、彼は實に其人也。英國の議院政治は、必ずしも彼の手に因りて創製せられず、されど所謂議院政治の大精神、大旨義、大主張を、根本的に理會し、之を可行的境界に指導したる先驅者は、彼に非ずして誰ぞ。

彼は實にアルマダの役に先だつ四年、即ち一五八四年に生る。彼も亦資産裕かなる豪族の子にして、牛津大學に學ぶ。如何に彼が教養ある紳士たりしかば、牛津の詞客が彼を讃して、アポロの寵兒と云ひしを以て、知る可き也。彼は惹斯一世の時代に於て、既に議院の錚々たる領袖の一人たりし也。彼は實に惹斯王が『十二の椅子を並列せよ、今や茲に十二の帝王は來れり』と、半は憤怒を以て、半は嘲弄を以て絶叫せる、民黨議員總代の十二人中の一員たりし也。

劈頭の議院政治家

民黨議員總代十二人中の一員

所謂「惡靈」の魁首

パツキンが重なる提出者

彼や議院の權能は、國王の恩賜にあらず、英國人の本來の權利なりと抗議したる、所謂「惡靈」の魁首の先列にあり、而して之が爲めに、無法にも投獄せられたる一人也。彼は言へり、沈黙の爲めに、眞理を毀害せられんよりは、眞理を告白して、寧ろ自個の禍害を招かんと、是れ彼の空言にあらざりし也。

彼の勢力は、查理王の代に迫んで、愈々増大し來れり。彼や實にパツキンが重なる提出者たりし也。而して之が爲めに重ねて幽囚の厄に遭へり。パツキンが、其の贖職の爲めに己を利したりとの攻撃に答へ、否、予は自から富まざるのみならず、現に百萬圓の負債ありと詫ぶるや、彼はすかさず反駁して曰く、若し此言をして眞ならしめば、吾人は如何にして、彼が浪費を満足せしむるを得可き乎。若し此言にして虚偽なりとせば、吾人は如何にして、彼が貪慾を満足せしめ得可き乎と、彼は權利請願の問題に際しても、實に其の主動者の一人たりし也。

彼の辯舌は、其の熱火と、其の大膽と、奇拔とに於て、エリオット、若しくはウェン

ヒム論
統率
其的
辯技

トウオリスに譲れり、然も議場の多頭を支配する演説としては、殆んど無敵と云ふ可かりし也。彼の演説も、固より十七世紀的臭味なしと云ふ可らず。或は説教の如く、聖書の語を援き、或は講義の如く、哲學的談論に渉るあり。されど概して言へば、彼は巧みに事實を排列し、整然たる論理に訴へ、之を先例に徴し、之を常識に照らし、而して近く議場の呼吸を飲み込み、細に議事の掛引に配意し、恒に其の大勢を掌握し、之を利導するに於て、抜目なかりし也。されば彼は徒らに辯論家としてにあらざり、議院の統率者として、殆んど無比の位置を占めたり。彼の晩節に於て、帝王ビムビムの名は、敵黨の下したる綽號ならんも、事實は之に庶幾かりしが如し。

眼識を
行する
腕手
練との
手

然も彼の強所を以て、専ら此に存すと云ふは、未だ彼を盡さざるもの也。彼は糾紛錯綜なる走馬燈の時局に於て、其の根本問題を摸捉するの眼識を有したり。而して併せて此の眼識を實行するの手腕と、手腕とを有したり。彼は出身の當初より、否舊教派として著名なりき。蓋し彼が舊教に反對するは、舊教が國家の

議院の特
權尊重者

統一と抵觸するを知れば也。即ち舊教徒が、法王の命令や、西班牙、佛蘭西等舊教國の干渉を誘致し、國家の威信を毀傷するを知れば也。彼は當初より議院の特權尊重者なりき。彼惟らく英國の憲法に於ては、國王よりも議院を重しとし、議院に於ては、上院よりも庶民院を重しとすと、而して彼は實に當初より、主權の争に於ける議院と國王との窮極の衝突を豫期し、毅然として民黨側の代表者たりし也。

天分に於
て革命家
たらす

彼は其の天分に於て、決して所謂革命家にあらざりし也。彼は寧ろ保守黨也。保守にして止むを得ば、彼は保守にて満足せり。彼は決して共和論者にあらず。又た否國政黨にあらず。彼は王政も、國教も、其儘に保存せんとを希へり。但だ王政をして議院政治たらしめ、國教をして類似舊教たらしめず、又た清教徒征伐の機關たらしめざらんとを欲したるのみ。されば彼を稱して清教徒と云ふも可也。但だ最も寛大なる意味に於て、然か云ふを得可き也。蓋し寛宏、圓融なる彼に於ては、決して一種の清教徒の臭味たる、舊約書的の褊狹、頑硬、敵愾心強く、執

念深く、上帝を以て嫉妬の神と爲し、敵黨折伏の神と爲すが如きものを見出す能はざりし也。

三二 帝王ビム

彼は騎士黨の如く、放縱者にあらざるも、亦た清教徒的の嚴肅派にあらざり。彼は結婚後六個年にして、其妻を喪ひ、再婚せず。史家は、彼は爾來國家と結婚せりと云へり。何れにしても反對黨は、彼を稱して歡樂の追求者と非難せり。是れ彼が交際社會に出入し、世間悠々の事に、興味を有したれば也。彼は一方には、宰相彈劾の大演説を爲すの側、他方には、交際社會の花と驩笑するの、閑日月を有したりし也。人或は彼を目して、英國大謀反時代に於ける、佛國革命のミラボーなりと云ふ。其の材能に於ては、相匹し、其の勢力に於ては、相敵す。而して其の性情の若干、亦た互に相酷似せるものなしとせず。然も政治家たる徳操と、紳士たる品性に於ては、決して同日の論にあらざる也。

彼は壯年にして、職を大藏省に奉じたる事あり。されば財政の知識は、他の民黨の領袖に比して、彼が獨り専らにしたる所たりしが如し。彼は如何なる場合も、

國家と結婚

ミラボー以上の徳操と品性

脚實地を離れざる政治家

諸家の
に對す
る批評

脚實地を離れざる政治家たりし也。彼曰く、所謂る最善なる方式の政府とは、公共の利益の爲に、國家の各部各員をして戮協せしめ、活動せしむるものを云ふと。而して彼は此の各部各員の戮協活動を、自動的に行ひ得せしむるを以て、憲政の妙用と認めたるものに似たり。而して彼が其の動力の中心點を、庶民院に措きたるや、既に吾人が特筆したる所の如しと爲す。

英國大謀反時代の史家として、隨一の權威たるガアヂナアは曰く、彼は夙に統率者たるに最も適當なる、兩個性質の抱合を表明せり。そは時代の精神に對する、徹底せる、而して正直なる同情と、之を應用するに、穩健手段を以てせること、是れなり。而して彼は、エリオットよりも、其の節度ある勢力を藏せり。黨魁として彼の勢力は、何人も未だ曾て疑點を挿みたるものなかりし也と。モルレー卿曰く、彼は民衆會合の領袖中に於て、最も罕に見出す所の、二重の能力を有せり。そは實行的にして、且つ崇高的なる事是也。掛引及び組織的施設の名人にして、此れと同時に堅實にして、高尚なる主義の鼓吹者たるは是れ也と。グリーン曰

非凡なる
凡人

二時間の
大演説

く、彼は一方に於ては、外交の最も巧緻なる折衝者にして、他方に於ては、煽動家の最も偉大なる者也。彼は國王の狡猾なる陰謀を追跡するにも、熱火を以て、民衆の感情を激昂せしむるにも、向ふ所、何れも可ならざるはなしと。ゴールドウイン・スミスは、彼を評して清教徒的ミラボーと云へり、是れ實に簡にして要を得たり。

彼は宮廷の女官より、牛と綽名せらるゝ程なれば、其の風采の如何は、之を想像するに難からず。彼の前額の隆起は、評判物にてありき。彼は當代の紳士に、相應しき服装を爲し、而して又た其の唇下には、尖りたる鬚を蓄へたり。彼は非凡の英雄にあらずして、平凡なる非凡人也。

彼が查斯王の十一年、無議院の期間に何事を做せしやは、今之を詳かにせざるも、其の短期議院の召集に際してや、彼や當時に於て記録破りと稱せられたる、二時間の演説を爲せり。彼は實に諄々として、匪政の顛末を歴舉し、國民の疾苦を陳述せり。更らに彼は爛眼にも、蘇格との講和を提議し、之を以て經費支

ハムデン
と與に民
柱黨の大極

出の條件たらしむ可く企てたり。而して查斯王の突發の解散は、實に之が爲めに出で來れり。
彼は解散後に於て、ハムデンと與に、民黨の大極柱となりて、其の黨勢の擴張に努力せり。倫敦なる彼の家は、其の本部たりし也。彼はハムデンと與に、馬を地方に驅りて、民衆を鼓吹せり。其の黨與をして、議院召集の請願書を提出せしめたり。而して查斯王が一六四〇年十一月に、長期議院を召集するや、ビムはクラレンドンが評して、『彼は最も衆望を博したる一人にして、如何なる世に於ても、彼程に害悪を行ひ得る者、未だ之れ有らざる可し。』との言に、相應するの位置を占めたり。帝王ビムの名、此に於て空しからざる也。政界は此れよりして、愈々ビムとウエントウオースとの決闘期に入れり。

三三三 孰か機先を制す

長期議院
の召集と
民黨

新局面展
開の期待

議院の中
樞人物は
ビム

長期議院の召集は、是れ查斯王が、民黨に對する最初の叩頭也。彼は敗軍の將として、絶體絶命の窮地に陥り、茲に最後の手段に出でたり。されば民黨は、此の召集によりて、未だ戦はざるに既に凱歌を奏したるものに庶幾かりし也。
從來本國の現状を悲觀して、北米の野に移住しつゝ、ありし清教徒の波動も、此報によりて、乍ち見合せとなれり。天下何れも新光の發射、新局面の展開を、此一舉に期待せざるものなかりし也。然り彼等議員は、經費協賛の爲めに出で來らずして、革命の爲めに出で來れり。專制政治に大打撃を加へんが爲めに出で來れり。議院萬能の政體を樹立せんが爲めに出で來れり。
モルレー卿は、此の議院を評して、英國當時の郷紳、及び教養ある士人の精華によりて成立し、當代に於て著名の士にして、此の中に列せざる者、唯だ彌耳敦と、ホップスの二人あるのみと云へり。而して此の議院の中樞人物は、問ふ迄もな

く、ビム其人たりし也。彼は前回の所謂る逐條手段を須みず、一掃的に、拔本的に、其の政弊を除きせんと決心せり。而して是れ實に議院多數の意向を代表したる也。

ウエント
ウォリス
の招致

當時ウエントウォリスは、兵を督してヨークに駐在せり。議院が愛蘭事件の審査委員會を組織するや、彼の友人は、其の目的が、彼に對する打撃たることを報道したり、彼の友人は、何れも、彼が倫敦に赴くならんとを諫止せり。然も查斯王は、ウエントウォリスを招致せり。彼は友人の警告迄もなく、危険の其身に迫るを知れり。何となれば彼は、實にロードよりも、查斯王よりも、將た何人よりも、民怨の焦點たりしとを、自覺したれば也。然も王は、彼の髪の毛の一丝にだも、觸れしめざるを誓言し、強ひて彼を招致せり。

民黨に
一髪を
危に
取

多年の惡戰苦闘にて、彼の心身は困疲せり。彼は病の爲に、苦惱せり。されど彼は寧ろ此際に於て、進攻的の態度を取りて、民黨に逆振を喫せしめんと目論見たり。彼は民黨の領袖等が、蘇格の叛徒に内通したる證跡を握り、彼等を一網に羅

ビムに
先を
制せ
らる

織し去らんと企てたり。方には是れ民黨に取りては、危機一髪と云ふ可き也。彼は查斯王に謁見し、其の翌朝即ち一六四〇年十一月十一日を以て、衆員敬仰の間に、上院に出席せり。彼は不幸にも、其時に於て、民黨彈劾の文案を所持せざりし也。而して豈に料らんや、其の午後に於ては、却てビムの爲めに、機先を制せられ、彈劾の標的とならんとは。

大逆罪の
犯人とし
て弾劾

ビムの炯眼なる、危機の脚下に迫るを看取せり。彼は自から起立して、一大事の審議に附す可きありと發言し、傍聽人を退去せしめ、議場の圍を閉鎖し、茲に秘密會を開き、雄辯滔々底止する所を知らず、同日の午後四時より、五時頃に及び。彼はウエントウォリスの弊政を悉く皆な條舉し去りて、三百餘人の議員を率ゐ、上院に赴き、下院の名によりて、大逆罪の犯人として、彼を彈劾したり。攻守の勢は、此の如くして轉環、反覆せられたりし也。

退去尋で
入獄の申

當時ウエントウォリスは、白廳ホワイトホールにありて、王と國務を商議中なりしが、此報を聞くや、彼の周圍にある友人は、皆な青天霹靂の感をなしたるに拘らず、彼は神色

自若として曰く、予は行かひ、親しく自から彈劾者と對決せむと、斯くて彼は急しく上院に赴き、手荒らく門衛を呼び、曇鬱、傲横の面影を以て、上席に就かんとせり。然も彼は退去を命せられたり。彼が再び招き入れられたる際は、唯だ跪いて入獄の申渡を聞く爲めなりし也。彼は自から辯明せんとを請へり、されど無言にして此場を引き下る可く命せられたり。

驚く可き
變身の轉

彼は帶劔を脱せしめられたり。彼の群集を排して、馬車に乗らんとするや、誰しも脱帽するものあらざりし也。而して其の午前に於ては、英國中の如何なる高貴の人も、露頭にて彼の側に立つを、甘受せざるものあらざりし也。午前には二大王国——英國、愛蘭——の間に、其の威權を赫灼たらしめ、午後には、二壁の間に其の一身を蟠屈せしむ。人間の榮枯盛衰、亦た驚く可きかな。

時勢に逆
の行したる

彼は獄中より、其の夫人に書を與へて曰く、如何なる奸計惡謀が、此身を危くせんとして、峻厲に薄まり來るも、吾が中心は極めて平靜也。惟ふに天は、必ず吾を此の厄難より救濟せむ。希くは卿の心を安んじて、子女家庭を護持せよと。彼の

心事亦た悲む可き也。彼は一個の暴吏にあらず、愛國者也、忠臣也。若し彼に罪ありとせば、彼は唯だ時勢と逆行して、其の一徹なる主張を立て透さんと欲したるに在るのみ。

三四 丈夫兒の死

原被兩造
の奮闘と
天下の壯

兩造の機
鋒相接す

ウエントウオースの彈劾事件は、約五個月に亘れり。而して其の裁判開廷は、一六四一年三月二日にして、十五日間繼續したり。查斯王は、其の誓言にも拘らず、手を拱して、議院の爲す儘に放任せり。法廷は、ノルマン時代よりの由緒あるウエストミニスタア廳に開かれたり。惹斯第一世の末期、查斯一世の初期には、政友として肩を並べて馳驅したる、ビムとウエントウオースとは、原被兩造となり、議院政治と、獨裁政治との代表者として、各々全力を擧げて、生死存亡の鎬を削れり。若し此をしも壯觀と云ふ能はずんば、天下何事か壯觀たる可き。

ウエントウオースは、實に勇ましく奮闘せり、巧みに辯疏せり。彼が其の自己の施設を回護して、其の赤心を披瀝するや、聴衆をして、殆んど感涙を催さしめたり。蓋し如何に彼に失政ありたるにせよ、彼を罰するに大逆罪を以てするには、其の罪案不完全と云はざるを得ず。彼とビムとは、機鋒相對せり。彼は曰く、愛蘭

問題は首
にあり

國家に對
する大逆

は征伏せられたる國民也、其の施政も自から他と異らざるを得ずと。ビム曰く、果して然らば、威士も征伏せられたる國民也。英國も亦た同じ。天下征伏せられたる國土、何ぞ限りあらむ。是れ悉く除外例を用ふ可き乎と。彼曰く、時局艱險非常手段に訴へざるを得ずと。然もビム曰く、所謂る艱險は、汝の匪政之を致したるものに非ずやと。

然も問題は、律例の問題にあらず、汝の首を取る乎、吾が首を渡さん乎の問題也。民黨の一人セントジョン曰く、兎や鹿には獵法を適用す可し。然も狼や狐は、見當り次第敲き殺す可しと。彼等はウエントウオースを以て、狼と爲せり。當時の史家は云へり、英蘇愛の三王國は、悉く彼の原告者也。彼等は其の疾苦の辨償として、唯だ彼の一死を求めて已まざりし也と。若し此言を至當と云ふ能はずんば、少くとも當時の實情を道破したる也。

さればビムは、國王に對して謀反する者、必ずしも單り大逆の罪人と云ふ可らず。國民の權利を蹂躪し、專制政體を樹立するもの、是れ國家に對する大逆罪に

急激派の
非常處分
法案提出

議院の横
暴極まる

値ひするもの也との論法を用ひたり而して彈劾者は、彼が愛蘭兵を催はして、蘇格の叛徒を征伐す可しとの言を、英國征伐と故らに附會し之を以て其罪案を構成せんと試みたり而も窮極の動機は、若し彼に最後の打撃を加へ置かずんば、民黨は翻つて彼の爲に、打撃を被る可きを虞れたるに是れ由るのみ。然も法廷は、十四回も開催したるも、彈劾は容易に成立すべき見込あらざりし也。此を以て下院の急激派は、非常處分法案を提出し、一氣呵成に、彼を處罰せんと企てたり。ピム、ハムデン等の徒は、最初は之を不可としたるも、其の大勢を支ふ可くもあらざりし也。而して其案の上院に於て商議中に、查斯王は民黨の領袖と妥協を謀り、ピムも屢々王と會見せり。而して他方に於ては、王は皇后と相謀り、兵士をしてウエントウオースを獄中より奪ひ去らしめんと企てたり。下院は之が爲に激昂したり、妥協の望も盡き果てたり。上院の依違の情態も、今や一變し來れり。而して下院は、曩きに三年に一回は、必ず召集せらる可き案を、可決したるを以て、足れりとせず。下院の協賛を経ずし

查斯一世
弱點の暴
露

自ら一死
を分とす

て、決して解散するを得ずとの案を議決し、遂に上院をして、非常處分法案と共に、之を通過せしめたり。是れ議院は、王が經費の支出を得るや、必ず議院を解散す可きを豫期し、王をして其の計を施すの餘地なからしめたる也。然も此に到りて、議院の横暴も、其極に達したりと云ふ可し。王にしてウエントウオースの生命を保障せんと欲せば、其の手段なきにあらざりし也。何となれば、如何に上下兩院の議決を経たりとするも、王の裁可あらざる限りは、決して法律たるの効力なければ也。然も王は此の極所に於て、持前の弱點を暴露したり。彼は、私わたくしの良心と公この良心とに區別を定め、私心にては無罪と知りつゝ、公心にては已むを得ずとして、二日間懊惱苦悶の後、遂に如上の案に裁可したり。然も焉ぞ知らむ、ウエントウオースの死に鈐璽したるは、自個の死に鈐璽したる所以なることを。ウエントウオースは、大勢の已む可らざるを見るや、一週間以前、獄中より書を查斯王に與へて、速かに此案を通過せしむ可きを懇通して曰く、予が承諾は、陛

下をして、安んじて神の前に立たしむるに、最も有効なる可し。予既に自から一死を分とす、今將た誰を怨み、誰を咎めむ。予は我が心靈の俗界より離脱するを以て、中心の満足となし、平靜と、溫和とを以て、一切の世間を容赦す可しと。人の死せんとするや、其の言や善し。王は實に此の偉大なる忠臣に孤負したり。彼の刑に就かんとするや、曰く、予は上帝に感謝す。予は死を怖れざるなり。予は死に際しても、平生臥床に入る時の如く、欣然として胴衣を脱し去るなりと。彼の友たる大監督ロッド曰く、彼の不幸は、貴族等の嫉妬の下に呻吟し、仁柔溫弱にして、自ら偉大なる天稟を有せず、且つ偉大なる所以を解せざる君主に、奉仕したるにある也と。彼は實にクラレンドンの評したる如く、偉大なる人物也。彼の偉大なるは、猶ほビムの偉大なるが如かりし也。而して彼等は、與に當代の志士たり、愛國者たりし也。但だ一は議院に重を措き、他は國王に重を措きし也。而して大勢は前者に與みして、後者に反せしのみ。

偉大なる人物

三五 民黨の大抗論書

總ての民黨は、ウエントウオースの彈劾に於て、同一の歩調を取れり。政治的疾苦の蕩掃に於て、一致協力せり。されど不幸にして、宗教問題に就ては、硬軟の兩派に分れたり。硬派は哥倫や、ウエンの徒にして、之を根蒂枝葉派と稱す。即ち監督教會を、全然廢止せんとする論者也。軟派は其の弊害は、矯正するに吝かならざるも、角を矯めて牛を殺すなからんと欲する徒にして、フォクランド、及び他日のクラレンドン卿、即ち當時のハイド等、皆な此に屬す。乃ち民黨の中樞人物ビム、ハムデンの如きは、少くとも監督の俗權に干預するに反對する者にして、寧ろ硬派に近きものと云ふ可し。而して兩者意見の相違は、やがて民黨の分裂を來して、茲に王黨を生ずるに到りし也。蓋しハイド、フォクランドの輩、固より中心より查斯王に信頼するにあらず。されど彼等は、害惡中の兩者を擇まざる可らざる極所に立ち、已むを得ず、革命を取らずして查斯王を取りしのみ。

宗教問題に對する硬軟の兩派

民黨の分裂

教權以外に、重大なる問題は、兵權也。英國の北方に、英兵と蘇格兵とが相對峙する現狀を維持するに於ては、今後如何なる活劇を演出す可き乎、知る可らざるものあり、特に民黨の危險を感じたるは、英兵が戈を逆にして、議院を襲ふこと是れ也。されば議院は、蘇格兵には、相應の金額を支給して、自國に引上げしめ、英兵は其儘解散せしめんことを、王に献言し、併せて王の蘇格行を延期せんことを請へり。

王は前者を聽容したるも、其の蘇格行の延期を拒絕し、一六四一年八月を以て、其途に就けり。願ふに王は何の必要ありて、蘇格に赴きたる乎。議院は固より王の底意を疑へり、さればハムデンを特派委員として、蘇格に送り、暗に王の行動を監視せしめたり。而して王の志の蘇格人に結び、其力を藉りて、英國に於ける民黨を蹂躪するにありしや、其の形跡に就て、之を推察するに難からざりし也。民黨の憂慮は、決して邪推たらざりし也。下院の民黨は、觀念せり。苟も王が教權を握り、諸監督が、王の隨使を奉じて、上院に列席する間は、到底改革の効を擧ぐ

可らずと。此に於て彼等は再び十月を以て、監督除外案を提出せり。王は此の報を聽くや、蘇格より廻文を上院議員に與へて曰く、朕は死すとも、先代の遺業たる教會制度を變更する能はずと。上院は王の此言を顧慮して、此案を握り潰せり。而して王は却て、下院が彈劾したる二人の監督を擢用して、其の激昂を來たさしめたり。

民黨の形勢は、實に危機一髪たりし也。内にしては溫和黨の分裂あり、外にしては宗教的的反動あり、而して兵權は、依然王の手中にありて、動もすれば此に威嚇せらるゝの虞ある也。是れと同時に、愛蘭に於ける舊教徒の蜂起、新教徒の大虐殺の警報は傳はれり。ビムの身邊に對する刺客の風説や、危險物封入の書翰や、陸續相接せり。民黨は今や、噴火山頂に立ちつゝある也。

此に於てか炯眼なるビムは、寧ろ暗中飛躍、國民に訴ふるの機宜に適するを看破し、茲に大抗論書を作り、之を二百六要項に分ち、查斯王の即位以來、政教一切の國務に於ける匪政を枚擧し、更らに現在及び將來に於ける、保障の方法をも

記載し、國民に與ふる大概文の體裁を以て、之を提出したり。是れ實に十一月八日にして、其の討論は同月二十二日の午前より、其の翌朝に互り、僅かに百四十八に對する百五十九の多數にて、可決したりと云へば、其の勝敗の際疾かりしや、知る可きのみ。

議場形勢
の不穩

如何に議場の形勢が不穩なりしかは、少數者の一人が、抗議を試みるや、議場は乍ち大混戰の情態を現し、或者は帽を打振り、或者は拔劍して、柄頭を攫みつゝ、拔身を廊下に挿み、若し冷靜なるハムデン微りせば、互ひに之を他の腹中に刺まらずして、止む可らざりしと云ふの一事を以て、之を察するに難からざる也。哥倫曰く、若し此の提議否決とならん乎、予は一切の財産を賣却して、北米に移住す可かりし也と、而して此の大討議は、實に民黨の溫和派をして、餘儀なくも王黨たらしめ、其の硬派をして、革命黨たらしめたるものにして、宛も其の分水嶺と云ふも不可なき也。乃ち宗教問題にて、割目を生じたる兩派は、愈々之が爲めに公然分裂したり。革命は大勢也、大勢は中止する能はざる也。此れよりしての

兩派公然
分裂

問題は、誰か能く此の大勢に乗じて、之を利導するかの一事ののみ。

三六 自業自得

意志薄弱
の實物標

國王も亦た人也、百の過失缺點は、容恕す可し。但だ意志の薄弱にして、恒心なきは、斷じて不可也。吾人は查斯一世に於て、特に其の實物標本を見る也。彼は十一月廿五日に、蘇格より還れり。彼は倫敦市に於て、豪富の階級より、大驛迎を受けたり。彼は議院の護衛兵を撤去せり、而して彼は議院の請願によりて、之を恢復したれども、之が爲めに議院をして、頗る疑懼せしめ、遂に最後に於ては、民兵法案を議決せしめたり。是れ國王の手中より、一切の兵權を奪ひ去る法案也。

感情の衝突
の突と貫

此の如き危機に於て、最も恐ろしき働を爲すは、浮説流言より大なるはなき也。而して更らに恐ろしき働を爲すは、感情の衝突是れ也。查斯王は曾てビムを大藏大臣たらしむ可く内談したり。されど王の信賴するに足らざるは、ビムの飽迄知る所也。彼はハイド、フォクランド等溫和黨の名士を閣員に列したり。然も國家の大事に就ては、却て淺率、輕易なる皇后と相諮りて、彼等に知らしめざる

民黨の五
名士を彈

王自から
下院に關

也。彼は司獄長官を更迭せしめて、是れ民黨虐迫の下地を作るに非ざるなき乎と思はしめたり。彼の行動は、其の一貫を缺くのみならず、其の手續さへも缺けり。切言すれば、其日々の出來心にて、一事と雖も、物になりて居らぬ也。

彼は民黨の領袖等が其の皇后を彈劾せんとする風説に周章し、檢事總長をして、ビム、ハムデン以下、民黨五名士を彈劾せしめたり。罪案の要項は、第一兵士を煽動して離反せしめ、第二蘇格人を教唆し、英國を襲はしめ、第三内亂を企て、王に敵せんとすと云ふにあり。是れ一六四二年一月三日の事也。

上院は委員を選定し、此の彈劾の適法なるや否やを審査せんとするを俟たず。王は人をして五名士を、下院より逮捕せしめんとしたり。此に於て流石の溫和なる上院も、王の其の職權を蹂躪するを瞋りつゝ、下院と共に、王に向て、相當なる守護兵を與へんことを請へり。然も彼は其の前日、下院に向て、綸言一出、決して違法の事を爲さずと約しながら、其の翌、即ち一月四日には、如何なる天魔の魅入りし乎、自から下院の議場に闖入し來れり。王は皇后より臆病者よと罵ら

れ、五名の悪黨を縛し得ざれば、再び妾の顔を見る勿れと窘められ、意氣昂然として出掛けたり。ビムは宮廷の親友よりして、蚤くも此報に接し、彼等が議場を去りて、テイムス河より舟に上らんとしたる頃と、王の議院に入りたる時とは、間僅かに一刹那たりし也。

王は劔や短銃を携へたる、數百名の騎士黨の彌次馬に擁せられ、ウエストミニスタア廳に赴き、單り其の皇姪バラチン選帝侯を従へ、被帽の儘、神聖なる議場の閭を踰え、議長席に進み、ビムの空席を見渡し、叫んで曰く、ビムは焉くにある。滿場寂として聲なし、乃ち議長を顧みて之を問ふ、議長跪て答へて曰く、臣は議院の命令を執行する以外には、見る可き目も無く、語る可き舌も有せずと、王は憤然として曰く、何に構ふものか、朕も人並の眼力を有すと、斯くて彼は議場を見廻はすと良久うして曰く、總ての鳥は逃げた哩と、彼は來時よりも更らに一層不快、瞋恚の態度を以て、退去せり、而して其の翌日、彼は五名士が、倫敦市に這れたるを探知し、自から市廳の年寄に向て、其の引渡を要めたるも、街頭の市民

王曰くビムは焉くにある

總ての鳥は逃げた哩

再來の日
は最期の時

は、特權、特權と大呼して、之に應ずる者あらず、今や百事齟齬す、彼は窮天極地、唯だ官軍を召集して、乾坤一擲の勝負を試みるの一事を剩すのみ。彼は一月十日に、白廳を退去せり、其の再來の日は、彼が最期の時たりし也、民黨の領袖も、既に其の危機の迫れるを知れり、されば最後の問題は、愈々兵權に集注せり、曰く國家の兵權は、誰に屬す可き乎、王に屬す可き乎、將た議院に屬す可き乎と、彼は五名士の彈劾を撤回せり、王は監督を上院より除外する案を裁可せり、王は多くの點に於て讓步せり、されど民黨が、當分にも兵權の讓與を迫るや、王は慨然として曰く、否、な一時間にては、手離す可きにあらず、卿等が朕に要する所は、苟も國王たる者に向て、決して要む可らざる事也、朕は皇后にも、皇子にも、兵權を委任するを欲せずと、此の如くして、史家の稱する所謂第十七世紀英國の大謀叛なる内亂は、破裂したりし也、此に就ては、民黨にも責任なしと云ふ可らず、されど查斯王より見れば、遺憾ながら自業自得と云ふの他なき也。

内亂の破
裂

三七 戰鬪開始

王と議院との交渉

查斯王が白廳を去りたるは、一六四二年一月十日にして、其のノッチンガムに、大旆を翻したるは、同年の八月二十二日也。此間に於て、王と議院とは、種々の交渉を重ねたり、彼等は何れも、最後の手段に訴ふるの已む可らざるを知悉しつゝ、其の大義名分を私せんが爲めに、互に其の工夫を凝らせし也。

相當の理由動かさず

英人は極めて功利的にして、且つ實際的なると同時に、相當の道理を見出さずしては、自ら動く能はざる特質を有す。彼等が大危急に際して、尙ほ悠々緩々の態度あるは、或は其の大度あるが爲めと讃す可く、或は其の鈍重なるが爲めと貶す可く、而して寧ろ此れよりも、其の自個の良心を満足せしめ、世間の手前を取り繕ふ可き、口實を發見するが爲と云ふを以て、適當とす可きが如し。

百計盡きて王軍の大旆

查斯王は、議院より最後の通牒として、齎らし來れる、一切の行政權、別言すれば、殆んど君主の大權全部を、讓與す可き要求を拒絶し、自からハールの武庫を占

王軍と議院

めんと欲して成らず。百計茲に窮して、八月二十二日、大風雨の晩景、ノッチンガムの城岡の絶頂に、王軍の大旆を翻せり。太鼓は鳴れり、喇叭は吹かれたり。而して僅少なる朝臣及び群集は、吾王萬歲、圓顛黨撲滅を絶叫せり。然も周圍の光景、何となく消沈せり。查斯王の意氣は、平日に倍して消沈せり。而して更らに不祥事の一は、此の王旗が幾もなく、疾風の爲めに吹き落されたるは是れ也。

概して觀察すれば、王軍には貴族及び上流の地主等、之に屬し、議院軍には、中流の郷紳及び其の以下の徒多かりし也。然も細かに觀察すれば、一家の内にて、父は子と分れ、弟は兄と離るゝあり。昨年、の基督降誕祭には、暖爐を擁して、團樂、歡笑したる親族が、本年の降誕祭には、互に敵味方として、戰場に相見ざる可らざるに到れるもの、少からざりし也。

予は王の食を食み、勤仕する三十年、豈に今はの際に於て、王を見捨つる如き、賤丈夫たるを得んや。予は寧ろ自個の良心に反する事物を、擁護せんが爲めに、一死を辭せざる也。予は眞率に卿に語り、今回葛藤の素因たる、監督に就ては、予は

勤王の爲に犠牲

何等の敬意を表するものにあらずと是れ王軍の旗手たるサー・エドマント・バ
アチーの告白也。彼は主義主張の如何を無視し、唯だ勤王の爲めに、其の一身を
犠牲としたる也。

中心の哀
痛と満腔
の嫌惡

サー・ウィルリアム・ウォラアは、其の友人にして王軍の將たるホプトンに、書
を與へて曰く、吾人の對戦が、自他の友誼を毀る能はざるが如く、予が卿に對す
る親愛は、依然として渝らざる也。然も予は自個の信ずる主張に向て、忠誠なら
ざる可らず。然も皇天上帝は、如何か予が中心の哀痛と、滿腔の嫌惡とを以て、此
役に從ふを諒とせむ。今や吾人は、此の悲劇に於て、各自持前の役に就けり。希く
は相互に怨讎の念なく、男兒らしく、之を遂げしめよと、是れ實に兩軍の花たる
人々の心事のみ。

去就進退
の煩悶者

更らに中間には、幾多の寛弘、高雅の紳士あり。自由主義を好むも、民黨の如く編
狭ならず、王と教會とに同情あるも、騎士黨の如く放縱ならず。云はゞ、彼等の眼
には、前者は學者、及びパリサイ人の如く映じ、後者は税吏と罪人の如く映じ、何

戰爭動機
の一半は
宗教

れに與みするも面白からず。ざりとて袖手傍觀するを許さざるの一時に際し、
其の去就、進退に煩悶したる者ありしや、少からざりしが如し。
然も此の戰爭は、單に王權と民權との消長を、決せんが爲めにはあらざりし也。
少くとも其の動機の一半は、宗教にありと云はざるを得ず。而して其の明證は、
一たび民軍の勝利の後、乍ち民黨中に於て、宗論上の分裂を來たしたるを見
て知る可し。吾人は政治上の意義に、重きを措くが爲めに、其の反面の意義を、閑
却す可らざる也。

三八 兩軍交綏

吾人は本來、英國第十七世紀大謀反史を編せず、況や王軍、議院軍の戦闘史をや、吾人は唯だ彌耳敦を語らんと欲し、其の背景たる當時の大勢を、略叙するに過ぎざるのみ。但だ查斯王の刑死は、彌耳敦の政治上に於ける活動と、大關係あるを以て、少くとも此の叙述をして、其の期間迄延長せしむるの必要ある也。

扱も當時の戦争には、大砲の用は未だ普からず、小銃は所謂火繩銃のみ、而して重なる武器は、劍と槍とにして、特に槍は十六呎乃至十七呎の木製直柄の先に、鋼鐵の身を据ゑ、之を以て縦横刺衝したり、其の銃劍を用ふるに到りたるは、十七世紀の末期也。

されば當時に於ては、勝敗の決は砲兵にあらずして、騎兵にありし也。而して查斯王は、當時に於て無比の騎將たる、ルベルト親王を得たり、彼は二十三歳の壯

背景たる當時の大勢の略叙

當時の戦争と武器

王軍の首力

年にして、惹斯一世の女、ボヘミア皇后の第三子也、即ち查斯王とは叔姪の間柄也。彼は、大膽勇敢にして、突撃に妙を得たり、彼や開戦三年間は、實に王軍の首力たり、生氣たりし也。

議院軍は、エッセックス伯を推して、其の總司令官とせり、されど彼は實力よりも、寧ろ門地を以て、此の位置を占めたりし也。而して最初の衝突は、實に一六四二年十月二十三日、エッジヒルの一戦に於て行はれたり。王軍一萬四千、議院軍一萬、互ひに入り亂れて相撃てり、彼等は何れが敵なる乎、何れが味方なる乎を辨せず、寧ろ同志打にて、相殺傷したるもの過多なりし也。敵も、味方も、何れも其の勝敗如何を詳にせざりし也。要するに此の戦争や、混亂を以て始終し、終ひに相引となれり。而して此際に於て、獨り隊伍を亂さず、最後まで奮闘したるは、エッセックスに屬する騎兵の一隊のみ。而して此中に、哥倫ありしや、固より言ふ迄もなき也。

議院軍の總司令官と最初の衝突

混亂を以て始終す

開戦以來二年有半は、双方に取りて、何等の果敢くしき大効果を收め得ざり

ブルック
卿とフォク
ランドの
戦死

杜市と彌耳敦

一七〇

し也。而して最初より監督教會に對する挑戰者にして、議院軍側中心人物の一たるブルック卿は、敵兵の爲めに狙撃せられて逝けり。王黨側に於ては、醇厚、崇貴なるフォ克蘭ド卿は、其の理想たる平和、交讓の眞境より、日に遠かり行きつゝある現状を悲觀し、自から陣頭に立つて斃れたり。當時彼は、大藏大臣にして、固より戰陣に臨む可き責任あらざりし也。然も彼は一六四三年九月、第一回ニューバリの戰に際し、自から兩軍接戰の際に馬を乗り入れ、討死せり。彼が其の朝出陣せんとするや、故らに新たなる襪衣を取り出さしめて、之を著けたり。人其の故を問ふ。彼曰く、戰場に横ふ屍體をして、垢衣を纏はしめざらんが爲めのみと。而して此の花の如き好男兒は、僅かに三十四歳にてありし也。後人彼を稱して曰く、彼は博士也、文學者也、政治家也、政弊の改革者也、而して又た王冠と教會の擁護者也。彼や此の困難、悲痛の時世に處して、凡そ人間として調停爲し得可き丈の撞著、扞格せる各般の職責を、能く調停し得たり。而して恐怖なく、非難なく、其の往生を遂げたりと。亦た以て彼に對する定論たるに庶幾し。

出陣に新
衣らしき觀

ハムデン
の戦死

然も民黨側に於ては、其の威權ビムに次ぎ、其の德望は、却て其上に出でたるハムデンは、同年六月十八日、ルベルト親王との小競合に、二個の騎銃丸を、其の肩に受け、纒かに馬首を擁して、戰場を退き、其の國家と、其の國王の爲めに、最後の祈りを捧げつゝ、同月二十日に逝けり。而して更に特筆す可きは、民黨の主腦たるビムが、同年十二月八日に死したる事、是れ也。

ビムも亦
逝く

蓋しビムは、民黨政府の總務長官とも云ふ可く、其の募兵、徵費、一切の交渉、應酬、悉く彼の一身に擔當せざるはなかりし也。彼は敵黨に對する施設のみならず、自黨内に於ける軋轢を調停し、分裂を豫防し、或は自からエッセッキスの本營に赴き、其の狐疑、猶豫したる主將を慰撫し、獎勵して、民軍の爲めに活動せしめ、或は民黨内に醜醉する講和論を排して、徹底の目的を達せしめんと勗めたり。彼は内は財政を整理して、軍資を充實せしめ、外は蘇格に結びて、其の援軍を招致せり。而して彼が其の國務に執掌する、午前三時より、午後に到り、午後より更に半夜に到れり。而して彼が心身を、國家の爲めに消磨し盡くし、方さに逝か

んとするや、其の友人等が周圍にありて、涕泣するを顧みて曰く、予は死を視る
歸するが如きのみと。彼は方さに收穫の時期に際して、逝けり。議院は彼の負債
を消却す可く、十萬圓の支出を議決せり。果然彼は身を國務に委して、一毫と雖
も自から利せざりし也。

三九 哥倫 (一)

民黨は既に其の左右の眼たるハムデンと、ピムとを喪へり。論客、辯士、勇將、健士、
雲の如しと雖も、固より此の兩人に代り得可きものなし。果して然らば、民黨は
全く盲目となりたる乎、否々、決して然らず。一代の難局には、必ずや之を處理す
べき人材を生ず。今や吾人は茲に眞個の統率者を見出だせり。そは云ふ迄もな
く、ゴロウ、エド哥倫也。

凡そ史上の人物として、彼が如く極端より極端に、審判せられたるものあらざ
る也。或は彼を目して、一大偽善者と云ひ、神の名によりて私利私慾を逞しうし
たる奸雄と云ひ、國王を弑したる大逆無道の罪人と云ひ、或は國難を内に濟ひ、
國威を外に張り、善謀善斷、一身を挺して、國家を危急より超脱せしめたる、蓋世
の英雄、未曾有の大經世家と云ふ。吾人は今猝かに孰れに與みす可しと斷言せ
ざるも、彼が一世の大人物たるに於ては、到底異議を容るゝの餘地なきを信せ

予は生れ
なから
紳士の

ずんばあらず。

予は生れながらの紳士也、必ずしも貴爵の家にあらざるも、亦た決して匹夫の家にあらざる也とは、彼が自白したる所也。彼の父は、其の三人の叔父と與に、リサベス晩年の議院に出席せり。彼は一五九九年四月に生る。彼は劍橋大學に學びしも、學未だ成らざるに際し、其父を喪ひたるが爲めに、家に還れり。彼は若干なるラ典語の智識を、有したりと稱する者あるも、然も彼の學問は、只だ一卷の聖書にありと云ふを適當とす。彼が曾て其の長子の教育に對して云へることは、恐らくは自個の實驗より得來りしものならむ。曰く予は汝が事務に注意し、事務を諒會せんことを望む。多少の歴史を讀み、數學と宇宙誌とを習へ、以て上帝の命に獎勵し、國家の用に供するを得む。蓋し人間は、奉公の爲めに生れ出でたるものなれば也と。一六二〇年八月、彼は二十一歳にして結婚せり。此の結婚は、彼の一生に多大の幸福を齎せり。蓋し彼女は眞摯、節儉、溫柔、貞靜なる家庭的夫人として、申分なかりしを以て也。

彼の學問
は一卷の
聖書

人間は奉
公の爲め
に生る

彼の宗教
的性情

無議院十
一年の生
活

當時彼の
風采

彼が少年時代に、放蕩無賴の行爲ありしと云ふは、半は是れ敵黨の捏造説ならむ。但だ彼が性質幽鬱にして、煩悶、悔恨、之に次ぐに號泣、籲天を以てしたる一事は、却て彼の徹底せる宗教的性情を、舉證する所以として、之を識認せずんばあらず。彼は二十九歳の時、即ち一六二八年に、議院に選舉せられたり。彼は查斯王の無議院十一年を、如何にして暮らせし乎。或は地方人士を糺合して、反抗運動を爲し、或は信神者を、其家に集め、熱淚祈禱の會合を催はし、或は一家經營の爲めに、牧畜の業に従ひ、或は冥想に耽りて、革命の黒雲の前頭に渦捲き出でんとしつゝあるを、眺めたるならむ。

斯くて彼は又た、一六四〇年十一月の短期議院に出で來れり。彼が當時に於ける風采は、彼の仲間ならざる朝臣、サー・フイリッポ・ウォルウィックの言之を盡せり。曰く或る朝、予は議場に於て、未知の一紳士の發言を聽く。彼の身嗜は、如何にも尋常也。彼の衣服は質素にして、田舎仕立屋の裁縫したる如く見ゆ。彼の襪衣は質素のみならず、更らに垢附けり。而して其の幅狭き帯には、血痕一二點附

彼の首聲
と雄辯

長期議院
に於ける
彼の地位

し居れり。彼の帽子には、其の鉢捲あらざりき。彼は可なり大柄の漢子也。彼は劔を其側に近く横へたり。彼の顔面は脹れて且赤色を帯べり。彼の音聲は鋭くして且破調に、而して彼の雄辯は、實に熱心充溢せり。予は此議場に對して、少からざる敬意を毀損せり、何となれば、此の如き紳士の發言を、議場が謹聽したるを、目暗したれば也。亦た以て當時に於ける、哥倫其人を、髣髴するに足る也。彼が長期議院に於て、如何なる持前を働らきたる乎は、今茲に繰り返へすの要なし。彼及び其の從兄弟たるハムデンとの間には、此の議院に十七人の親族縁者あり。而して一六四七年に於ては、更らに二十三人に上れり。查斯王の死刑宣告書の署名者五十九人中にて、其の八人は彼の親族也。其の審判官たりし百四十人中の十六人は、何れも多少彼に由縁ある者也。彼にして尋常の人たるも、彼の長期議院に於ける位置の尋常ならざるや明けし。況や此の天成の擎天掀地的偉男兒に於てをや。

四〇 哥倫 (二)

哥倫は不
可解の
人物

他を説服
するに長
ず

哥倫は怪物也、謎題也、不可解の人物也。彼は或る場合には、一種の熱狂者の如く、或る場合には、一種の疎暴漢の如く、而して或る場合には、一種の陰謀家の如かりし也。彼と同時の人士にして、彼を評する者曰く、彼は軀幹尋常なるも、體格は魁偉にして、強健也。其の頭腦は、彼が自然の材能の儲藏所にして、且つ肆鋪なるが如く見受けらる。彼の性情は烈火の如きも、其の炎焰は、彼が道義の力を以て、之を鎮静したり。天は彼をして剛腸男兒たらしめ、總てを皇天に一任し、何等畏怖する所なからしめたるに拘らず、罹災者、薄命者に對しては、寧ろ柔弱に過ぎる程、憫憐の優情を表せりと。他の一人は曰く、彼が其の胸中を議場に吐露するや、剛健にして男らしく、他より説服せらるゝよりも、寧ろ他を説服するに長せり。彼の語法は大膽にして、其の意見は確乎たり。其の主張は嚴肅熱烈にして、之に重きを加へ、且つ民衆の好

委員會に於ける彼の態度

情を迎ふる爲めに、恒に聖書の文句を引用せり。彼は自から熱情に驅られて、發言したるが如きも、能く此の熱情を調節し、其の意の欲する如く、議場を支配せり。乃ち彼の言論に於て、異常を覺えざるものも、其の効果の偉大なるに驚かざるを得ざりし也。而して彼が、クラレンドン^{クラレンドン}を委員長としたる委員會に於て、暴慢、無禮の言を逞うし、爲めに委員長をして、若し斯る發言を持続せば、委員會を閉ぢ、明朝議場に向て、彼の言行を申告す可しと戒飭せしめたりとは、クラレンドンの自から記する所也。

上帝と直接に接觸

哥倫^{ゴレン}は眞に不可解也。されど彼は上帝と直接に接觸し、自から神勅を受けたる一人たるかの如く信せり。而して彼は大手を振りて、世間の眞中を濶歩せり。彼は當時のピム、ハムデン及び彌耳致等に比すれば、全く無學者と云ふを得可し。而して彼は國家施政の上に、何等經驗なく、乃ち軍國の大事の如きは、本來沒交渉と云ふも可也。然も天は意外なる邊に、意外の人物を生せり。彼は細心にして大膽也。彼は忍耐にして機敏也。彼は溫柔にして犂猛也。彼は沈重にして、而も如

意外の邊に意外の人物

自問自答の力を處する事

何なる險艱をも冒せり。彼の頭腦は冷靜にして、其の心腸には情火燃えたり。彼の外貌は疎豪武骨にして、動もすれば野人禮節に嫻はざるの風を帯びたるも、彼は事物の焦點に、其の堅確、透徹せる視線を注ぐの天稟を有せり。天は彼に自問自答にて、大事を處するの力を與へたり。爲めに人或は彼を以て、權變測る可らざる奸魁と爲せり。彼は其の目的に手段を調合す可き、炯眼を有せり。爲めに人或は之を以て、彼の巧詐と爲せり。而して彼は其の一たび定めたる目標に、是非共到達せずんば休まざる、高調したる志趣を有せり。而して邪推好きの者は、或は之を以て、彼が罪障多き野心と見做せり。彼の渾身是れ精力也。是れ氣魄也。是れ果決也。彼は實に危局を濟ふの天職を以て、出で來れり。而して其の中途に到る迄、彼自から之を覺らざりし也。

四一 鐵 騎

四十二歳
頭に立つ陣

彼が劔を提げて陣頭に立ちたるは、四十二歳の中老にてありき。彼はそれ迄は、遂に一片の砲火にも浴せざりし也。一回の演習をも經ざりし也。人生活動期の三分二を經過し、而して後軍人となり、乍ち世界的武勳を奏したる彼が如きは、實に歴史上無比と云ふ可きに似たり。

騎兵隊長
となりて
荒人と荒
馬人とを
練すとを
調

一六四二年議院軍の出で来るや、彼は率先して、鎧を著け、其の長子を伴ひ、平和なる家庭を立ち出でたり。彼は和蘭の士官に請うて、其の操練を習へり。彼は同年九月騎兵隊長となれり、其の郷黨を驅り催はして、騎兵を召募したり。彼の炯眼なる、當時の戦争に於ては、實に騎兵を以て、其の主力と爲す可きを看破したりし也。荒人と荒馬とを訓練して、操縦意の如くならしむるもの、是れ豈に容易の業ならんや。彼の募兵は、やがて千人となれり。彼は其の多からざる家資を割て、其の軍用に供せり。而して彼が部下の如何に優秀なりしかは、兩軍最初の交

士氣の有
無と兵員
の素質

闘たるエッジヒルの一戦にて、證明せられたり。

彼は勝敗の數は、兵力の多寡よりも、寧ろ士氣の有無に存することを看破せり。而して其の士氣の有無は、兵員の素質如何に存することを看破せり。彼は其の從兄ハムデンに語りて曰く、卿の率ゐる兵は、朽癯せる下郎、若くは酒館の給仕、市井の販夫にあらざれば、皆な其類也。而して敵は紳士の子にあらざれば、身分ある人也。卿は此の如き下賤、鄙劣なる徒が、名譽を重んじ、勇敢にして、決心ある紳士の群と、戦ひ得可しと思ふ乎と。ハムデンは、其言の至理あるに首肯せり。されど彼は、哥倫の言を以て、言ふ可くして、行ふ可らずと認めたり。然も彼は自ら之を試む可く言張れり、而して彼が所謂鐵騎は、此の一決心よりして、打出せられたる也。

實行と與
潤に眼界の

彼は實行と與に、其眼界を潤大ならしめたり。彼は苟も其の節度に服し、其の軍令を奉ずる者に於ては、何等の取捨する所あらざりし也。彼の目的は、敵に克つにあり、敵に克つには、精兵を作るにあり、此に於てか彼は、其訓練に間斷なかり

事は爲さ
ざる可ら

し也。彼は固より門地ある士人を欲せざりしにあらず、されど議院軍に來り投ずる者は、概ね中流以下の輩にして、餘りに撰擇に拘泥する能はざりし也。彼其の同僚に書を與へて曰く、予は卿が騎兵隊長を撰擇するに注意せんことを望む。少數の正直漢は、烏合の衆に優れり、卿若し神を畏れ、人に忠なる者を騎兵隊長とせん乎、總ての正直漢皆な彼の跡に従ひ來らむ。或は平人を騎兵隊長に拔擢したるが爲めに、感情を害する者も生ぜむ。若し名譽あり、門地ある人來り投せば、之に加ふる仕合せはなき也。然も其の來らざるを奈何、事は爲さざる可らず、苟も爲さんと欲せば、平人より拔擢するも、猶無きに勝らずや。況や其人にして困苦に耐へ、其の職掌に忠實、親切なるに於てをや。予は寧ろ徒らに紳士の名を稱して、何事をも做し得ざる者よりも、何を以て戰ふ可きを知り、而して其の知る所を愛する、質素なる手織の衣服を著けたる、平人の隊長を取らんと欲す。然も予は中心紳士を好む也。と亦た以て彼の意の存する所を知る可し。彼は王軍の武勇に敵するには、唯だ宗教的熱心を以て當るの、他なきを知れり。

宗教的熱
心以て
王軍に當

彼は其の宗派の小區別に就ては、何等の頓著なかりし也。彼は善良なる兵士は、善良なる人間たらざる可らず、善良なる人間は、善良なる信徒たらざる可らずと云ふの標準に於て、其の部下を訓練せり、されば彼の部下は、敵を見れば、聖歌を奏し、皆な踴躍して突撃せり。彼等は哥倫の部下として、戰陣に臨むを以て、一の恩寵と看做せり。而して彼は恒に先頭に進めり、如何に彼が勇敢なりしかは、彼の馬敵彈に斃るゝや、彼は落馬し、其の起立せんとするや、彼亦た倒さる。然も漸くにして再び兵士の馬を取りて、之に跨り、遂に敵兵を追ひ散らしたりと云ふの、一事を以て知る可し。されど彼に取る可きは、其の勇將たるにあらずして、其の死生一變の際に、冷靜にして、毎に危を變じて安となし、敗を轉じて勝と爲すにある也。

死生一變
時の冷靜

四二 マアストン・ムーアの激戦

議院軍と
王軍との
査斯王の

兩軍決戦
の時刻
來の對

議院軍の情氣は、滿々となれり。而して民權、王權の衝突に關する、一切の解決は、議院軍全勝の後にあらざれば、期す可らざることを、熟知したる者は、唯だ、哥倫あるのみ。乃ち王軍に於ても、亦た然り。或日は評定のみにて、結論に達せず、或日は即決して、評定せず。然も最も面白からざるは、彼等が決議做し放ちにて、毫も之を實行せざるにある也。而して王軍中に於て、一切の解決は、王軍全勝の後にあらざれば、期す可らざることを、熟知したるは、唯だ査斯王あるのみ。

今や端なく、兩軍勝敗の大勢を定む可き時節は、到來せり。そはマアストン平野の一戦是れ也。吾人は聊か傍徑に立ち寄るの嫌あるも、少しく此の戦争に就て、物語る可き必要を感ず。何となれば此の一戦は、實に哥倫の戦士としての天才を遺憾なく發揮したれば也。而して彼が軍隊に於ける、一轉機なれば也。

當時ヨーク州は、兩軍の争地たり。而して兩軍はマアストンに於て、互ひに相對

議院軍の
陣容

王軍の陣
容

陣せり。王軍一萬八千、議院軍は、蘇格の援軍を合して、二萬七千と稱す。蓋し英國に於ては、白赤薔薇の戦争以來、此の如き大軍。今日より見れば小軍なれども、一の接戦を見たること、未だ曾て之れ有らざりし也。

時は是れ一六四四年。我が正保元年。七月二日、兩軍并行的に、其の南端には、小樹密生したる藩籬を帯びたる廣濶なる塹壕を隔て、相對す。騎兵兩翼に在り、歩兵中央にあり。議院軍は平野に向うて、傾斜の高地に據り、陣地を布く。蘇格の歩兵、中央にあり。フェアファックス父子右翼を率ひ、マンチェスター其の左翼を率ひ、右翼に於ける、勇敢なる子フェアファックスは約四千の騎兵に將たり。而して其の三分一は蘇格兵也。左翼に於ける哥倫は、マンチェスターの部將として、二千五百の騎兵を率ひ、而して豫備隊として、疲馬に跨れる、約八百の蘇格騎兵は、其の宿將レスリー司令の下に、其後に控へたり。戦線は約一哩半に涉り、王軍の戦線は、聊か此れに長を加へたり。王軍に於ては、ルベルト親王自から哥倫に當り、東北部に於ける、王軍の大探題ニョーキャッスルは、其の自から召募し

對陣五時

たる白衣隊^{ホワイティ}を提げ、中央の蘇格兵に當り、ゴアリングは、フェアファックス父子に當れり。哥倫の斥候隊長曰く、敵兵の脚は、吾軍の鼻に接すと。其の兩軍接觸の狀以て想ふ可き也。

兩軍の接

兩軍旗旗を翻へし、火繩を燃き、相睨み合ふと、約五時間、驟雨勝の下午、議院軍は小麥畑の中に立ちつゝ、其の炎濕と、空腹とを、僅かに聖歌の高吟にて凌ぎつゝあり。斯くて午後五時となりぬ。議院軍寂として聲を絶つ。ルベルト親王、ニューキヤッスルに語りて曰く、最早今日は戦争なかる可しと。此に於てニューキヤッスルは、心を安んじ、其の附近に備へ置ける大四輪車に赴き、偃息して、喫烟しつゝある間もなく、大事は起れり。午後七時には兩軍の唸合^{ノイズ}は、叫喚、呼號の掛聲と變じ、銃火天に轟き、鐵蹄地に響く。議院軍の歩兵、騎兵は、恰も重さなる雲の如く、岡を下り來りぬ。

兩軍騎將の雄の接

兩軍騎將の雄、哥倫とルベルト親王とは、此の一戦にて始めて親しく接觸せり。乃ち鐵騎の名は、此際に於て、ルベルトより哥倫に與へたる綽號也。然も流石の

ルベルト親王を破る

議院軍中央と右翼との敗戦

哥倫の騎兵も、ルベルトの猛襲の如き馳突には、辟易せり。然も蘇格豫備隊の老将レスリーは、其機を逸せず、ルベルトの右翼を掩撃し、爲めに哥倫をして、自から其頸に傷きつゝも、其の却退しつゝある騎兵の鼻先を、向け直すことを得せしめたり。

哥倫は、レスリーの援兵と與に、ルベルト親王を破り、而してレスリーをして、其の追撃を逞しうせしめ、ルベルトの其の敗兵を、收拾する能はざるに乗じ、哥倫は自から馬首を轉じて、他の方面に向へり。蓋し哥倫勝利の管鍵は、其の勝利に際して、追撃の爲めに、其兵を分散せしめず、恒に隊伍肅然として、全を保ち、何れの敵にも、如何なる方面にも、之を轉用するの便宜を、失はざりしに在り。此の如く哥倫の率ゐたる左翼は、全勝を博したるも、議院軍の中央、及び右翼は、殆んど全敗に歸せんとせり。子フェアファックスは、ゴアリングと戦ひ、力戰して、其の一方を突破し、其の背進兵を追躡し、自から深手を負うて落馬し、辛くも敵兵の爲めに、獲られんと欲して、遁れ、返り來れば、豈に料らんや、右翼の騎兵は、ゴ

類勢の支
持者

哥倫の進

出

更に敵の
中軍に向

レスリ
將軍の感
嘆

アリングの爲めに壓迫せられ、却て味方の中央歩兵の方に崩れ掛り、爲めに其の蘇格歩兵をして、混亂に陥らしめつゝありし也。而して此の類勢を支持したるは、中軍に踏み止まりし、蘇格歩兵の中の、老功なる勇士と、特に哥倫の神機妙算と、彼の旗下の堅忍不拔とに、據らずんばあらざる也。

彼は左翼に於て、ルベルトを退治し去り、更にゴアリングが先きに屯したる、王軍の左翼の後に、出でたり。ゴアリングの兵は、此の新來の敵を見て、追撃、分捕を止め、一時間前、フェアファックスが爲せる所を繰返し岡を下りて逃れたり。

此に於て哥倫は、更に鋒を轉じ、敵の中軍に向へり。時に兩軍の歩兵は、互ひに火花を散らして奮闘し、而してゴアリング騎兵の殘餘は、所謂る白衣隊ホワイトコートと稱する、ニューキヤッスルの歩兵を扶けて、相戦へり。然も遂に午後十時には、敵の全軍を潰走せしめたり。

レスリ將軍は、吾軍の敵軍より勝利を珍らし奪ひたる手際を見て、歐洲未だ曾て、此の如き好兵士を見ずと感嘆せりとは、是れ議院軍の或者が、蘇格の老兵

何れも所
信に殉す

嗚呼果し
て彼なり

レスリの語を藉り來りて、其の目覺ましき勝利を傳へたるの語、未だ必ずしも、自畫自賛と云ふ可らざる也。

此の如くして夏夜の月は、此の血戰場に、血塗ヒメカレになりて横はれる、死屍の上を照らせり。其の三千は王軍にして、他の一千は議院軍なりき。而して王黨は、神と王の爲めと絶叫し、議院軍は否な神は我が味方なりと應酬し、何れも其の所信の爲めに、討死を遂げたる也。

其の翌朝、議院軍の將校が、死屍を片附けつゝあるに際し、一個の婦人愁容自ら禁せず、戰場を低徊するあり。主將其故を問ふ。彼女曰く、夫婦の亡骸を尋ねんが爲めのみと。此に於て主將は、轉た同情を表し、懇ろに彼女を諭して、此場を去らんことを求め、護衛の兵士を附し、馬に上らしめて之を放還せり。彼女兵士に其の主將の名を問ふ。曰く、將軍哥倫也ゴロンウェヤと。嗚呼果して彼なりし乎。

四三 新 模 範

議院軍の諸將と哥倫

マアストンの大勝は、遂にヨークを議院軍の手に入れたり。若し此の餘威に乗じて、活潑機敏に進攻せば、王軍を塵にすること、掌を反すが如きのみ。然も議院軍の諸將は、何れも有耶無耶の心を以て、戦争に従事しつゝある也。彼等は敗軍を恐れ、更らに大なる勝軍を恐れつゝある也。彼等は全敗せず、全勝せざる程度に於て、王軍と持合を爲さんと欲しつゝある也。而して是れ實に、徹底的なる哥倫の堪ふる所にあらざる也。

軍紀に違背せず、上官に反抗せず

哥倫は、決して當初より謀反心を懷きたる、奸雄にあらず。彼は唯だ時局の真相を察し、其の必然の大勢を豫知し、之に順應すべき政策を主張したるのみ。されば彼は上官として、決して軍紀に違背せざりし也。彼は下位の將校として、決して上官に反抗したることあらざりし也。ウォルラア曰く、將校としての彼は、恭順にてありき。彼は予の命令を争はず、又た決して抗論したることなかりし也。

主將は戦に不熱心

と彼が異日フェアファックスに與へたる書翰を讀めば、如何に次將たる彼が、主將其人に對して、眞摯なる忠誠を抽んでたるかを知るに足らむ。彼は決して尋常一様の野心家にあらざりし也。然も議院軍の幹部に於ける姑息、苟安、其の終極の目的に逆行する氣風傾向は、遂に彼をして傍觀、坐視する能はざらしめたり。

彼は自個の屬する東部協會の主將マンチエスタアの戦争に不熱心なる心事を疑へり。彼は主將が戦勝を以て、戦争の終局とせず、講和を以て、終局とせんとする意思ありと、推定す可き理由を認めたり。彼は嘗て此の問題に就て、主將と意見を闘はしたることありし也。主戰黨は曰く、若し此際一撃を王軍に加へん乎、王黨は萬事休する也。然も生々殺にせん乎、必らず其の氣勢を恢復し來らむと。然もマンチエスタアは曰く、否々、吾人が九十九回、王に勝つも、王は依然たる王にして、其の子孫も亦た王也。而して吾人は其の臣民也。然も王一たび吾軍に勝たん乎、吾人は乍ち誡られ、吾人の子孫は遺類なけむと。此に於て哥倫は昂

緩急兩派の衝突

然として曰く、果して然らば、何故に當初より干戈を取りて起ちたりし乎、何ぞ速かに王軍に降らざる乎と。而して此の緩急兩派の衝突は、軍隊中のみならず、議院中に於ても、今や公然の事實となれり、而して其の緩急派は、所謂長老派にして、急派は獨立派たる宗教的色彩を帯び來れり。

自制法案の提出

哥倫は實に軍隊中より、不醇要素を一掃するの必要を認めたり。彼は其の方便として、議院をして一六四四年十二月に、自制法案を提出せしめたり。即ち上下兩院の議員をして、文武の官吏を兼任するを得ざらしむる案、是れ也。此案は一六四五年四月、愈々實施せられ、兩院議員中の兼任者は、四十日の期間内に、其の官職を抛たざるを得ざらしめたり。而して其の期間を俟たず、エッセキス、マシエスタア、其他微温派の大將は、皆な自ら辭職したり。乃ち彼れ哥倫も、亦た方に議員たるが故に、自から去る可き一人たりし也。然も彼は議院の希望によりて、解職の期を延長せられ、遂に新任の總司令官フェアファックスと、其の士官等の請願によりて、愈々騎兵總監として、副司令官に任せられたり。是れ恰

副司令官に就任

議院軍の兵權と新模範兵

もネズビーの大戦を隔つる、三日前の事のみ。

此れと相前後して、議院軍の兵權は、悉く總司令官の手に統一せられたり。而して所謂新模範兵は、此の時より創れり。其數二萬二千、内一萬四千四百は、歩兵にして、其他は騎兵及び歩騎兵也。而して其の高等士官の三十七人中、三十人迄は、名家の出にして、其の兵士の多數も亦た、恒産あり、恒心ある地主、及び地主の子也。哥倫がハムデンに語りし理想は、今や此の新模範兵に於て、全く實行せられたるに庶幾し。

總司令官の人品

若夫れ總司令官たるフェアファックスは、三十三歳の壯年なれども、父子與に議院軍に従ひ、其の重鎮たりし也。彼や一點政治的野望なく、滿腔武士的精神あり、而して文學的修養も淺からず。彼が人品は、議院軍の牛津を占領したるに際し、其の圖書館に、衛兵を附して、之を守護せしめたるを以て知る可し。彼や寔に武士の花とも云ふ可き好男兒也。然も軍隊の活ける精神は、固より哥倫其人たらざるを得ざる也。此の如くして軍隊と、哥倫とは、到底離る可らざる道連と

なれり。是れ彼に取りて好縁乎、惡縁乎は、彼と雖も豫測し能はざりし所ならむ。

四四 ネズビーの大勝

議院軍がフェアファックスの下に、新模範兵として、統一せらるゝ間もなく、哥倫が新たに其の次將に命せらるゝや否や、其の實力を試む可き機會は到來せり。一六四五年六月十三日、兩軍はノルサンプトン州に於て、互ひに七哩を隔てて相對峙せり。而して議院軍の斥候が、王軍の本營に近づき來る迄は、王軍はフェアファックスの進軍に氣附かざりしぞ笑止なる。蓋し王軍は、此の新模範兵なるものが、臨時に補充し來れる、生兵なることを知り、而して飽迄之を侮れり。彼等は上は查斯王より、下は鼓手に到る迄、驕氣充溢せり。騎士黨の面々は、木にて人形を拵へ、之を圓顛黨の神と稱し、戰鬪開始の前迄、之に向て、種々の侮慢を加へて、自から誇れり。彼等の眼中には、固より議院軍あらざりし也。

然も此れとて不思議にあらず、議院軍自身に於ても、其の士官と云ひ、其の兵士と云ひ、何れも人心恟々として、自から安ずる所を知らざるもの多かりし也。總

實力試驗
の機會到來

王軍は驕
氣充溢

議院軍自
身不安

全軍踴躍
哥倫本迎

勝利の確
信

司令官は哥倫が議院軍の主腦として、且つ彼の鐵騎が、其の核心として缺く可らざるを知れり。而して其の王軍の運動を偵知するや、彼は議院に請うて、哥倫を以て、其の次將となせり。是れ實に六月十日也。哥倫も亦た危機眼前に迫まるを知り、六百騎を率ゐて、息をも附かず、フェアファックスの本營に馳せ附けたるは、實に六月十三日の午前六時たりし也。全軍踴躍して之を迎へたり。而して議院軍の士氣は、之が爲めに一變せり。何となれば、神は恒に哥倫と與に在りて、勝利は恒に哥倫の手に在りと、信せられたれば也。彼は直ちに全軍の騎兵を指揮す可き任務を委せられたり。時は一刹那も失ふ可らず、何となれば、敵は既に正々堂々として、軍容を整へ、我に薄り來らんとすれば也。

哥倫曰く、此のネズビーの一戰に於けるや、敵は雄々敷も、陣列を作りて我に向ひ來れり。而して我が見すばらしき、無學なる兵士は、今更如何にして戰はんと、予の指揮を待ちつゝあり。予自から何事をも爲す能はず、然も勝利の確信は、予をして歡笑以て神を讚美せしめたりと。果然彼は神勅を奉ずると自信したり。

兩軍の對峙

兩軍の陣容

し也。兩軍の兵數は、分明ならず、或は議院軍一萬一千にして、王軍亦た此に同じと云ふ者あり。或は議院軍は一萬三千六百にして、王軍は七千五百と云ふ者あり。何れにしても、數は議院軍優るも、實は王軍勝れりと云ふ可きが如し。

兩軍平野を挟んで相對す。而して其間の支障は、真中に一條の草徑を通ずる、兩個の籬堤あるのみ。議院軍の陣地は、其の中間の平野よりも五十呎、王軍は三十呎の高地に過ぎず。而して其の斜面は、三度より、四度なれば、歩騎共に運動自由也。例の如く歩兵中央にあり、騎兵兩翼にあり、而して主將フェアファックスは、其の手兵を擁して、東方より西方に奔る岡上の出先にありしが、哥倫の勸告を容れ、此より百歩を退きて陣し、臨機に之を使用す可く、其兵士を伏藏したり。哥倫は議院軍の右翼たり、彼の他日の婿にして、議院軍中の録々たるアイルトンは左翼たり。其の中軍は、老兵スキブホンを率ゆ。而して王軍に於ては、ルベルト親王はアイルトンに當り、ラングデルは哥倫に當り、アストレーは中軍に將たり。

戦闘は王軍より開始せられたり。彼等は全線を擧げて、平野を推し進み、議院軍の據れる岡に攻め上り來れり。彼等は其の銃丸を放つ間もなく、銃を振り上げ、劔を揮うて、相接戦せり。流石のスキブホンも、其の第一線は、却走するを禁ずる能はざりし也。左翼のアイルトンは、其の騎兵を分ちて、之を救はんと欲したれども、ルベルトの騎兵は、銃丸雨飛の間を突過して、西方の斷崖に據れるアイルトンの他の一隊を掩殺し、之を追撃して、ネズビー村落の方に向へり。此の如くして中軍左翼與に、議院軍の不利となりぬ。但だ哥倫の率ゐたる右翼は、然らざる也。

彼は其の騎兵の一部を割いて、ハアルレーに與へ、正面よりラングデルに當らしめ、自から其の大部隊を率ゐて、敵の左翼を迂廻して、之を挾撃せんと企てたり。斯くてハアルレーは、雷奔電馳、以て高岡を駆け下り、敵騎の未だ上り來らざるに乗じて、之を攪亂し、而して更に哥倫の本部隊此に殺到し、計畫全く的中して、殆んど之を殄滅したり。

今や哥倫の、第二回の回轉を爲す可き大機に迫れり。彼は中軍、及び我が左翼の不利を見て、茲に其の隊伍を整へ、其の一小部隊を割きて、ラングデルの殘兵を追撃、若くは監視せしめ、更に自から敵の歩兵の左翼に向へり。而して彼等は鐵腕を擡げ、快劔を揮ひ、兩軍酣戰中に割りて入れり。然も王軍の精銳此處に在り、左右前後より、攻め立られたれども、少しも撓まず。但だフェアファックスが、伏せ措きたる新手の歩兵の參加し來るや、今や支ふる能はず、遂に退却せり。然も全勝には、尙ほ最後の一回轉を剩せり。王は敗軍を收拾し、而して餘りに長追して、却て味方の敗軍となりたるに、氣附かざりしルベルト親王の、氣息奄々として歸來せるに合し、茲に最後の抵抗を試みたり。然も議院軍の諸將は、電光石火も管ならず、其の戰機を逸せず、アイルトンの如きも、開戰の當初に手負うたるに拘らず、其の疲兵を糾合し、更らに新奇の攻撃に向へり。議院軍の歩兵も、一時は混亂したるに拘らず、瞬く間もなく、其の足並を揃へ、全速力を以て、騎兵と先を争うて、敵兵に向へり。而して哥倫は、其の騎兵を率ゐ、茲に第三回の回轉

を試みたり斯くて議院軍は、其の騎兵を兩翼に、其の歩兵を中間に、以て殆んど敵を包圍せんとせり。

王は討死
せんと思
召す乎

查斯王は自から陣頭に立て、其の殘兵を指揮せり。然るに王の側に馬を立てたるカフシウオス卿は、突然手を王の手輻カフにかけ、絶叫して曰く、王は只今討死せんと思召す乎と。王は其言の何故たるを解する間もなく、彼は王の馬首を廻らせり。而して衆皆な之を見て、一同に馬首を廻らして奔り去れり。

議院軍の
大勝利の
品と戦
宮

戦争は三時間繼續の後に終れり。殺傷捕虜合して五千人、其の戦利品無數。而して特に重なる一は、王の秘密文書及び皇后との往復の書翰を藏めたる手宮、是れ也。此の手宮一たび開かれて、查斯王は、戦敗よりも大なる痛手を負へり。蓋し彼が外兵を藉りて、若くは羅馬教徒に結びて、内亂を戡定せんとしたる陰謀、悉く暴露せられたれば也。

此一戦と
哥倫の位
地

惟ふに此の苦戦に就ては、主將フェアファックスの將材、最も能く證明せられたり。彼は元來運重の人なれども、其の戰場に立つや、別人となれり。即ち一種の

魂魄は、敵を見て入れ換り來る者の如かりし也。彼の精力、注意、忍耐は、此の勝利の重なる要素として計上す可し。然も哥倫コロンの將略に到りては、殆んど天授と云ふも、過言にあらず。而して彼の議院軍中に於ける位置は、此の一戦によりて、殆んど超群絶倫となれり。

四五 暗黒史の一頁

陰謀詭策の暗黒史

民黨の同志喧嘩

詭策の不成功より來れる必然の結果

吾人はネズビー戦争後の事を記するを好まず。何となれば、此の戦争——一六四五年六月——より以來、一六四九年一月、チャールズ查斯王の刑死に至る迄は、唯だ陰謀、詭策の交互、錯綜したる暗黒史に過ぎざれば也。

要するに王軍の強大なる間は、此の協同の危険に對して、民黨は同一の運動を取れり、されど王軍の一たび振はざるや、彼等は直ちに同志喧嘩を始めたり。一方に於ては、議院と、議院軍と也。他方に於ては、長老派と、プレステイアン獨立派と也。而して蘇格が、此間に於ける重大なる面倒の要素たるは、言ふ迄もなき也。

此の自他、衝突矛盾せる要素を、調停一致せしむる、決して容易の業にあらず。況んや此の軋轢を煽動し、之を奇貨として、其の奇利を博せんとする者あるに於てをや。查斯王の晩節は、實に如上の要素を、互ひに喧嘩せしめ、其の葛藤に乗じて、自から漁夫の利を占めんとするにありし也。而して彼の死や、實に其の詭策

第一の面倒は蘇格人

蘇格人とスウェーデン王との内密交渉

の不成功より來れる、必然の結果たりし也。吾人は彼の爲めに涙を揮ふと同時に、亦た彼の帝王として、餘りに小穢なき、小刀細工を事としたるを、痛嘆せずんばあらざる也。

第一の面倒は、蘇格人也。彼等は政治上には、王政主義と云ふ以外に、何等の意見あらず。唯だ彼等は長老教會を蘇格に樹立し、更らに之を英國に及ぼさんと欲したり。彼等の異教徒を迫害するや、寧ろロードに過ぎたり。彼等は自から義とする所を、他に押賣せずんば休せざる也。而して英國の民黨は、彼等と内通して、其の革命の端を啓けり。議院軍の當初に於て、ピムピムは彼等を招致するの、已む可らざるを察し、英國の教會制度を、蘇格の長老教會制度と同一ならしめ、若くは近似せしむるを條件として、其の援軍を借れり。而して蘇格兵の應援は、實にマアストン野の大勝を博するには、無視す可らざるの要素たりし也。

然も彼等は、英國の議院軍中には、信仰心の自由を主張して、長老制度に反對する輩あるを見、其の議院中には、政治制度に偏重して、宗教制度に偏輕なる者あ

議院の第一問題に軍隊解散は

軍隊と議院との衝突の勢は自然

るを見寧ろ此際查斯王と結び王をして彼等の要請する條件を、允容せしむるの得策なるを認めたりし也。是れ蘇格人と王との交渉の、内密に開始せられたる所以也。

若夫れ王軍の強大なる間こそ、軍隊は入用なれども、敵去りたる後の軍隊は、無用の長物たるのみならず、却て議院を反噬するの虞なしとせず。されば戦亂終かに戢むに際して、議院の第一問題は、軍隊解散にありし也。然も狡兎盡きて、獵狗烹らる。軍隊、豈に^{おめく}として之に叩頭せんや。況や彼等は單純なる兵士にあらず、宗教上、政治上、一定の主張ある志士たるに於てをや。

彼等は議院が一種の寡人政治を作して、自から國家の大權を私せんとするを好まざる也。彼等は議院が蘇格人と苟合して、長老教會制度を厲行し、良心の自由を抑束せんとするに與せざる也。彼等は議院が查斯王と妥協し、民黨の精神を滅却するを恕せざる也。彼等は軍隊と云はんよりも、武器を有する政治の結社也。されば彼等が議院と衝突するは、是れ自然の勢也。

巴字状の衝突の底

王に取手不幸の對

此の如く蘇格人と、議院と、軍隊とは、巴字状をなして、交々相争へり。而して此間に於て、彼に結び、此に合し、或は急に、或は緩に、或は同意するが如く、或は賛成するが如く、或は反對するが如く、或は讓歩せざるが如く、而して三者の總てを疲困せしめ、更らに外援を藉り來りて、再び王政の昔に復せんとするは、是れ查斯王胸底の秘策たらざんばあらざりし也。

此の如き策も、對手次第にて、随分行はれざるにあらず。されど彼は不幸にして、其の對手として、哥倫^{コロン}を見出せり。彼は徹頭徹尾實際家也。彼は實際家なるが故に、若し溫和手段にて行ひ得可くんば、幾許にても、溫和たるを得る也。然も亦た實際家なるが故に、一たび萬障を排しても、之を行はざる可らずと決心するや、彼は如何なる非常手段も、敢て辭せざる也。而して王や不幸にして、此の如き對手を見出せり。

四六 查斯と哥倫

兩者與に
時代の犠
牲に

若し查斯と哥倫とをして、泰平の時代に於て、郷黨の民たらしめば、互ひに好隣友として相交りたらんも、未だ知る可らざる也。但だ奇なる運命は、彼等兩人を翻弄し、轉々止むなく、遂に不本意ながら、一は其の刑死の主動者となり、他は其の刑死者となりしのみ。然も時代の犠牲となりたる者としては、兩者孰れを尤とす可きかは、猝かに判じ易からざる也。而して吾人は哥倫の爲めに、轉々其の心事を悲しまざるを得ざる也。

哥倫、王
に負く乎
王に負く乎
に負く乎

彼は決して、共和論者にあらずし也。彼は堅固なる政府は、王政に在りと信じたり。されば出来得る限りに於て、查斯王を推戴し、彼をして、民黨の意志を施行するの、機關たらしめんことを願へり。彼は王に對して、個人的惡感を有せざるのみならず、寧ろ其の慈父たり、愛夫たる家庭的の行狀に、隨喜したり。彼は查斯をして、其の子女と會見するを允容したるのみならず、之を傍觀して、自から同

去る能は
ざる所の
三者

情の涙を垂れたり。然も王の不信は、彼をして遂に此の如く絶叫せしめたり。曰く、王は實に聰明睿智の人也。但だ其の詐謀百出、信賴す可らざるを奈何と。哥倫、王に負く乎。王、哥倫に負く乎。公平の史家は、必ず判ずる所あらむ。

敵も味方
も信賴せ
ず

查斯王曾て曰く、朕が去る能はざる所三者あり、第一教會也、第二王冠也、第三友人也。然も王は其の友人を去れり、但だ教會と、王冠とに就ては、最後迄執念深くも之を固守せり。是れ王としては、當然の事也。但だ彼は自個の存在を以て、時局收拾の必然なる要件と信じたり。即ち自個を除却しては、英國の治平は、到底期す可らずと信じたり。而して此の自信は、實に彼の一命に値ひせり。何となれば、彼在る固より可也。然も時勢は、彼無きも亦た其の進む可き點迄、進まざる可らざりしを以て也。然も彼を禍したるは、此の自惚よりも、寧ろ一方には信仰の自由を條件として、軍隊及び獨立派と協商し、他方には長老的専制を識認して、長老派たる蘇格人、及び議院と妥協を試み、時に故意的に、時に隨意的に、反覆恒なく、表裏一ならず、敵も味方も、彼に信賴する能はざらしめたるに在りと云は

王蘇格兵に投ず

王は敗戦の餘、一六四六年五月身を以て蘇格兵に投せり。蘇格兵は意外にも、彼を捕虜として待遇せり。蘇格兵は、王と種々協議したるも、其の要領を得ざるを以て、一六四七年一月、王を英國側の委員に引渡し、英國議院より其の軍償を得て、歸國せり。人或は之を稱して、蘇兵は王を議院に賣渡したりと云ふも、そは聊か冤罪たるに似たり。

哥倫の斡旋

王は此れより、ノルサンプトン州に安置せられたり。此間に於て、議院と兵士との葛藤は、激甚となれり。而して哥倫は一身を挺して、兩者の間に斡旋し、其の仲裁を試みたり。議院は、一方蘇格と提携し、更らに查斯王と妥協し、以て軍隊を解散せんと試みたり。

兩者の軋然重大なる

兩者の軋然は、愈々重大となれり。哥倫の仲裁も、其効なく、彼自から其の一身の立場に、當惑する極所に擠されたり。而して彼は、寧ろ軍隊の無政府の情態に陥るよりも、自から其の渦中に投じて、之を鎮壓せんと試み、遂に兵士が、查斯王を

汝の命令書は馬くにある

ニューマアケットに奪ひ去ることを默許せり。王は彼を奪ひ去らんとする、騎兵下士に向て曰く、汝の命令書は馬くにあると。下士は其の背後の、一隊の兵士を指して曰く、此にありと。王曰く、寔に立派なる命令書かな。若し兵士が汝の約せし言の如く行はば、朕は喜んで往かむ。希くは朕の良心と、朕の體面とを、毀傷するが如き事を以て、朕に要むる勿れと。下士曰く、何人の良心をも牽掣せざるは、臣等の訓言也。況や帝王に對してをやと。

何處までも鎮靜力

議院は此事を以て、哥倫の指金と猜定し、其の攻撃は、擧げて彼に向へり。此に於て彼は、遂に其の一身を軍隊に投ずるの、已む可らざるに到れり。而して彼は、軍隊の迂りて、一擧して議院を壓倒せんとするを制し、彼等をして徐ろに、王と直接談判を開始せしむ可く、努力せり。彼は何處迄も煽動力たらずして、鎮靜力たりし也。

四七 情けなき命數

哥倫の婿
アイルト

若し哥倫をして南洲とせば彼の婿アイルトは桐野、篠原、村田の三人を合しても尙ほ餘りある人物たるが如し。彼は一六一〇年に生る。彼は牛津に學び、倫敦に於て法律を修む。彼は騎將として屢々哥倫の麾下に屬し、勇戰其の功多し。彼はネズビの戰に傷き、ルベルト親王の爲めに獲られ、纒かに哥倫の來援によりて免れたり。彼は此の大戦後、一六四六年、哥倫の婿となり、愈々彼の帷幄中、缺く可らざる一人となれり。

アイルト
の人物ト

彼は當時三十六歳、血氣方さに剛にして、活力充實す。然も彼の如き透明なる頭腦と、清澄なる心腸とを有する者としては、天下幾人もあらざりし也。或は曰く、彼は羅馬の古志士キキシアスの志趣、性情を有せりと。蓋し彼の議論の明快、直截なる、何人をも首肯せしめずんば止まず。彼は戰場に於ては勇敢に、評議に於ては賢慮あり。乃ち哥倫の如きも、恒に推服するを禁ずる能はざらしめたり。然も

哥倫に
精神を
大に
醒める

王と軍隊
との仲
裁

其の眼中公益ありて、私利あらず。彼は自から其食の何物たり、其衣の何物たり、其の乗用する馬の何物たり、其の睡眠の何物たるに頓著せず。唯だ一身を公共の爲めに献げたり。彼は文案に長せり。哥倫曾て曰く、予が彼に書を與へざるは、他なし、予の一行の文字は、乍ち彼の千言萬語を挑發し來るの虞、あればなりと。而して彼は今や、哥倫に次げる軍隊の精神也。否な哥倫と雖も、其の政治的問題に於ては、彼の指導を受くること、鮮少ならざりし也。彼は實に比類少き法理的、精神を有し、若し彼をして立法者たらしめば、彼は絶代の一人たりしならむ。而して今や彼は、軍隊を代表して、查斯王と折衝しつゝある也。

惟ふに其の提案は、戰勝者たる軍隊の立場より見れば、寧ろ穩當に過ぎたりし也。然も戰敗者たる查斯王は、頑として應せざる也。王は曰く、卿等は朕を見離す能はざる也。朕若し卿等を扶けずんば、卿等は萬事休せむと。アイルト、徐ろに答へて曰く、否な陛下は自から軍隊と、議院との仲裁者を以て任じ給ふも、然も臣等は陛下と、議院との仲裁者たらしむとする者也。此の如くして王と、軍隊と

の交渉は、中止せられたり、而して軍隊側に於ける、過激分子の所謂平準派レガリアムと稱する徒は、哥倫等を以て因循にして、私慾の爲めに妥協を計る者となし、進んで王政の廢止を主張する者あり、而して查斯王は、竊にワイト島に逃れ、兵士の一部は、方さに爆發せんとす、但だ哥倫が一命を賭して、幾かに之を鎮壓し、事なきを得せしめたり。

此に於て哥倫も、查斯王の與に謀る可らざるを認め、今は王をして讓位せしめ、皇太子を擁立せんと企てたり、彼の政治に於ける、猶ほ軍事に於けるが如し、彼は大膽なれども、慎重に、其の拳を擧ぐるや、遅々たるも、其の打つや迅速也、其の進撃には、猛火の如きも、自から其の手輻カブを控ふる所を知れり、彼は徹上徹下實務家也、是を以て彼は臨機應變黨也、共和論者の將軍ラッドローが、彼をして王政に與するか、民政に與するかを、斷言せしめんと欲して、遂に其の要領を得ず、二將互ひに惡童の如く、座蒲團を以て叩き合ひ、哥倫遂に通走し去れりと云ふの、一挿話は、偶々以て彼の政治家としての本色を窺ひ見るに足る也。

王を廢し
皇太子
を擁立
せんとす

政治家と
しての哥
倫

王の陰謀
と第二の
内亂

軍隊と議
院との勝
負

大逆罪の
刑決と死
の宣告

されば彼は最後迄も、王政を支持せんと欲し、せめて皇太子をして、查斯王に代らしめんとしたりし也、然も王の陰謀は、遂に國內を攪亂して、第二の内亂を勃興せしめたり、是れ實に一六四八年の春より、夏にかけての事也、而して王と議院との談判は、遷延して、何時解決す可き望なく、兵士の辛抱力も、今や絶頂に達し、アイルトンは、『レボリューション軍隊の抗議書』を起草し、速かに王を審判に附す可きを提議せり、而して同年十二月一日、王は再び軍隊の奪ふ所となり、其の翌日を以て、軍隊は倫敦に入り、而して同月六日、大佐ブライドは、兵士を率ゐ、庶民院の門前に待ち受け、軟派の議員一百四十名を放逐したり、軍隊と議院との勝負は、此の如くして定まれり、哥倫も亦た同日の晩景を以て、倫敦に還れり、而して彼は尙ほ若干の希望を屬して、王の審判を延期せんと企てたり、されど王は毅然として、軍隊の要求に應ぜざりし也。

斯くて一六四九年一月一日、庶民院は、王が議院に對して開戦したるを以て、大逆罪となし、其の法廷を設定するの案を、議決せり、アイルトンが所謂、人民は

死して復
讎を遂ぐ

王の刑死
は哥倫の
本意に非
ず

上帝の下に於て、一切の正しき力の根源なりとの旨義を、應用したる也。斯くて
 同月十九日、八年前彼の偉大なる宰相、ウエントウオースが彈劾せられたる、ウ
 エストミニスタア廳に於て、彼の裁判は開始せられたり。而して其の二十七日
 に死刑を宣告せられ、三十日には、白廳ホワイト、ホールの前に於て、其の宣告は、驚愕、痛嘆、太息せ
 る群衆の前に、實行せられたり。
 王は其の最期に對して、實に威儀と、靜肅とを以て臨みたり。彼の「一死と、其の死
 に處する態度とは、彼の總ての過を償うて、猶ほ餘りあるの感を、一般公衆に與
 へたり。彼や活きて其の勝利を得ざりしも、死して其の復讎を遂げたりしに似
 たり。

王の刑死の晩、サウザンプトン卿は、其の一友と與に、其の亡骸を、白廳ホワイト、ホールの饗宴室
 に措き、通夜し居たり。午前二時と覺ゆる頃、一人の外套にて其の面を覆ひたる
 者、入り來り、亡骸に近づき、其頭を震ひ、太息して曰く、嗟呼、情けなき命數哉、而
 して良久うして立ち去れり。卿は其の何人たるかを、詳にせざるも、其の步趨と、

聲音とによりて、哥倫其人たるを、猜定し得たりと云ふ。蓋し王をして、茲に到ら
 しめたるは、決して哥倫の本意には、あらざりし也。嗟呼、是れ實に彼に取りては、
 情けなき命數たりしならむ。豈に止だ、查斯王の爲めに、其の末路の不幸を嘆ず
 るのみと謂はん哉。

第五章 彌耳敦生涯の第二期

四八 私塾の村夫子

吾人は漸く本題に回轉し來れり。いざ此れより、伊太利より歸國後の彌耳敦の行動に立ち返らむ。

如何に彌耳敦を尊重する者も、彼が偉大なる希圖と、僅小なる實行に就ては、即ち其の同胞が、自由の爲めに奮闘するを、傍觀する能はずとして、急遽踵を回らして、歸國したる當人が、其の活劇場裡に著すれば、私塾の村夫子となりて、其の愛國心を蒸發し去らしめたる行徑に就ては、若干の失笑を禁ずる能はざる可しとは、博士ジョンソンの冷評也。彌耳敦に對して、政治的偏僻心を挿むジョンソン其人としては、さもある可き言也。

吾人とても、強ひて彌耳敦の爲めに、辯護を試みんとするにあらず。但だ彼は詩

私塾の村夫子と其の冷評

何よりも先づ詩人

不朽の大
作を心掛

彼の手記
と失樂園

人也、マコレーは彼を頌して、詩人也、經世家也、哲學者也、英國文學の光譽也、英國自由の率先者にして、亦た其の犠牲者也と云ひたれども、彼は何よりも先きに詩人也、彼の心理は、詩人的心理作用也、吾人は是の如く觀來りて、始めて彼が畢生の行動の、一切の管鍵を握り得たるものに、庶幾しと信ずる也。

彼は歸國間もなく、倫敦の近郊に於て、其の二姪を教育せり、漸次士人の子弟の、教を請ふものを加へ、恰も一個の寄宿的私塾を做せり、而して彼は此際に於て、既に其の不朽の大作を心掛けたり、彼は其の親友ディクタチの悼歌中に於ても、自から英國古代史の、アーサー王の武勇を題目としたる、作詩の意を諷示せり、然もやがて彼の心機は一轉して、各般の題目に涉れり、頼ひに今日尙ほ、劍橋大學に保存されつゝある、彼の手記を見るに、其の題目は、舊約書より五十三個、四福音より八個、ノルマン征伐以前の英國史より三十三個、蘇格史より五個あり、而して其中に於て、最も詳明に、最も屢々記載せられたるは、實に失樂園也、此の同一題目には、四個の艸案あり、其の二個は、僅かに劇中人物の役割に止ま

講學授徒
に餘念な

何事にも
全力を傾
倒せり

彼の教育
主義

るも、他の二個には、其の脚色、齣幕迄も、詳細に記入しあり、是れ實に一六四〇年の頃なれば、彼の失樂園の世に出づる、二十七年前の事に屬す、亦た以て彼が畢生の事業として、志の此に存したるを知る可きにあらずや。

彼は實に講學授徒に餘念なかりし也、『予は一身と書籍とを置く可き家を見出せり、少からざる愉快を以て、中絶したる勉強に取り掛れり、國家の大事は、欣然として先づ神に一任し、更らに國務擔當の人々に託して』とは、彼が自ら語りし所也。

彼は何事にも全力を傾倒せり、特に教育は、彼の最も好む所の一たりし也、されど彼は最善の教育家としては、餘りに專制的なりしが如し、餘りに己の欲する所を、兒童に強ひたりしが如し、而して彼は自個の教育主義の實驗物として、兒童を取扱へり、彼の教育主義は、其の小冊子に記載せられたるが如く、當時の教育主義に對する、一大反抗たりし也、彼は當時の教育が、勞多くして効少きを慨し、勞少くして効多からしめんが爲めに、同時に種々の智識を、兒童に詰込む主

義を取れり。彼は日曜さへも休業せず、希臘語の聖書や、拉典語の書取やを課せり。其の嚴峻なる、往々鞭撻をも加へたるが如し。而して其の結果は、唯だ不消化の智識と、淺薄なる生嚼りの學問を、贏ち得せしめたるに過ぎざりしは、事其の志と違ふものと云ふ可き歟。

但だ彼が教育の本旨を論じて、教育とは、人をして一身上にも、公共の上にも、平和にも、戦争にも、一切の任務を、正しく、精妙に、且つ裕達に遂行するに適する資格を、養成するにありと云ふの一義に於ては、百世と雖も、決して異議を唱ふる者なかる可し。然も時局は、到底彼をして、平和なる村夫子たらしむるを容さざりし也。

彼が教育の本旨

四九 小冊子戦争

革命の大風雨は、遂に倫敦近郊の、彌耳敦の閑居を襲へり。自ら天職の他に存するを、確信したる彼をも、今は之を傍觀、坐視する能はざらしめたり。彼は一六四〇年十一月、長期議院の召集と同時に、其の一身を挺して、此の渦中に投じ來れり。

『予は今や真正なる自由を、扶植する道の開かれ初めたるを見たり。予は幼少の時より宗教、及び世俗の権利の、異同如何を學習せり。予にして若し國家に貢獻せんと欲せば、今の時を捨て、復た何の日かあらむ。是に於てか予は、他に著手したる業務あるに拘らず、此の一大目的の爲めに、予の才能と、予の勉強との、全力を擧げて、竭さんと決心せり。』と。

彼は昂然として、政治界惡戰、苦闘的時期に入れり。彼は固より銃を負うて、陣頭に立つよりも、ペンを以て戦ふの、其の本領に適するを知れり。されば彼は一六

革命の渦中に投ず

一大目的の爲めに決心

ペンを以て戦ふ

四二年十一月、查斯王が倫敦を襲はんとする、警報に接したる際にも、猶ほ一片の短歌を作りて、其の書齋を出でざりし也。

此の如くして彼が、人間の精力の最も充實したる、三十二歳より五十二歳迄、即ち一六四〇年、長期議院召集より、一六六〇年、王政恢復に至る迄、凡そ二十年間は、僅かに若干の短詩を作りたる以外、全く詞源を閉塞し去れり。此の一事に就ては、彼の傳記の作者、マックバチソンの如きは、曠世の詩才を、政争の爲めに切賣にしたるを痛嘆したるも、そは其一を知りて、其二を知らざるものと云ふ可し。吾人より見れば、此の二十年間は、彼が失樂園の大作を爲す可き、一種の豫習作業として、天が特に彼の爲めに賦與したる、機會たりし也。彼にして此二十年間の偉大、沈痛、驚く可く、恐る可く、泣く可く、悲しむ可き、人生の大活劇に遭逢せずんば、焉んぞ其の類としては、世界無二の大史詩を、詠出するを得んや。所謂偉大なる清教的大史詩は、唯だ奮闘的なる清教徒にして、始めて之を作るを得可きのみ。

精力充實
間の二十年失樂園の
豫習作業彼の火箭
會と監督教

彼の火箭は、先づ監督教會に向て、發射せられたり。彼は其の幼時の家庭教師たりしヤング、其他清教徒の牧師等の合著たる、小冊子に手傳へり。然も彼は搔癢の憾に勝へず、自から打て出でたり。一六四一年の半には、匿名の下に、三冊の小冊子は出で來れり。而して其の翌年の始には、更らに二冊の小冊子は、公然彼の名乗を揚げて出で來れり。

彼の散文は、詩的散文にあらずして、詩人的散文也。所謂詩的散文とは、詩情を散文にて、暢叙したるものを稱するも、彼の散文は、無韻の詩にあらずして、詩人たる彼が、其の詩的坵場に陶鎔せられざる、其の素地の思想を、無遠慮に吐き出したるもの也。凡そ詩人として、彼程に其の技巧に、忠實なるものあらざる也。されば彼の詩は、其の著想の高遠にして、縹渺たるに拘らず、何人も之を追跡するに於て、決して至難を覺えざる也。何となれば、其の脈絡は、自然に貫通するものあれば也。

但だ彼の散文や、然らざる也。彼の散文は、宛も哥倫の演説の如し、順序なく、次第

哥倫の演
説と一般彼の散文
は詩人的

なく、胸中鬱勃の氣、口を衝て出づ。其の思緒縱横、亂れて麻の如く、其の感想、光彩陸離、砂中に金片を散ずるが如し。其の一氣奔注するに際してや、一句の長さ、二百餘言に互るあり。其の急言竭論するや、倏然として起り、突然として止むあり。彼が詩に於て、細心なる修辭家たるに反し、散文に於て、此の如く無頓著なるは、殆んど何人も奇異の感なくんばあらず。

彼曰く予若し報効を圖らざれば、何を苦んで其の天分の他に存するを知りつ、自から不長所たる散文をば、僅かに左手を以て綴るが如き事に従はんやと。然も彼の散文は、百孔千疵あるも、要するに彌耳敦の散文也。其の文章としては、字句の安排、章節の修整を缺き、其の議論としては、論理の精到、思想の一貫を失し。時に或は個人的罵詈に陥り、時に或は獨語的述懐に移り、或は詭激となり、或は暗澁となり、動もすれば讀者を困殺し、悶殺するも、然も詮じ來れば、是れ實に大豫言者の聲に他ならざる也。彼は神勅を奉じて、異端を折伏するの氣勢を以て、其の論壇に臨めり。彼のペンは、不動明王の劍の如し。乃ち彼が怒るも、其の怒

報効の爲
めの散文

彼のペン
は歐洲の
恐怖の

や雄崇也、偉大也、猛烈也、而して彼のペンは、哥倫の劍と與に、やがて歐洲の恐怖となれり。

五〇 詩人的結婚

自から得たる不幸

彌耳敦の不幸は意外なる邊より出で來れり。然も是れ自から求めて、自から得たるもの、將た誰をか怨み、誰をか咎めむ。彼は生れながらにして、父の秘藏息子たりし也。彼は其の父母より愛せられたるのみならず、寧ろ重せられたり。彼は確かに偉大なる運命を負うて、生れ落ちたるものとして、取り扱はれたり。彼は三十五歳に到る迄、未だ一滴も家庭的苦汁を、喫したることあらざりし也。彼は一日たりとも、生活の爲めに、その心ならざる働きに、従事せざりし也。彼は當時に到る迄、恐らくは父の高等食客として、自個の隨意なる生活に、満足したりしならむ。

新婦を娶る

然も自から作せる災は、避く可らざる也。其姪エドワード・フィリップの語る所によれば、彼は一六四三年五月の下旬に、何の用事とも云はず何處に行くとも告げず、田舎に立出せり。而して約一ヶ月後には、其の新婦を伴ひ、併せて新婦の

ボウエル家

姉妹、縁者數名をも伴ひ還れり。蓋し彼は牛津州なるボウエル家に赴き、リチャルド、ボウエルの長女メリを娶りし也。彼女は實に十一人の同胞にして、其の第三次の出也。

元來彌耳敦家と、ボウエル家とは、曾て互ひに近郷に住したりと云ふの外、一六二七年に、前者が後者に五千圓の貸金ありと云ふの外、何等の關係なき也。否なボウエル家は、元來王黨の名家也。當時其家には、牛津附近に屯營したる、王黨の年少士官等、恒に往來し。今や賓客、饗宴等に、其の家資を消費し、家道頗る困難に陥りつゝある、放縱なる家庭也。百事規律あり、勤儉なる彌耳敦の清教徒家庭とは、互ひに兩極を代表するものと云ふも可也。知らず彌耳敦は、何の見る所ありて、當時查斯王が大譴を置きつゝある、牛津の附近に、自ら危険を冒して旅行したる乎。彼は貸金の取立てに赴き、其金を得ずして、其妻を得て歸りたる乎。將た他に何等の理由ある乎。此の一事は、流石の彌耳敦通たるマッソンも、吾人に向て十分なる解説を與へざる也。

此の一分の解を十分の解を説を缺く

早くも新
家庭に覺

教養なき
鈍根の少
女

詩人的結
婚

杜市と彌耳敦

二二八

此の如く三十五歳の彌耳敦は、其の新婦たる十七歳のメリ及び其の姉妹、縁者等を伴ひ還り、新婚の饗宴漸く終り、随伴者皆な其里に去るや、蚤くも新家庭の魔障は出で來れり。彌耳敦は新婦に失望せり、新婦は彌耳敦に失望せり。彼等は本來夫婦たる可き、何等の要素をも有せざりし也。新婦は放縱なる家庭に成立したる、我儘娘也。唯だ面白く、可笑しく、遊び興じて、其日を送る以外には、何等の理想も、趣味も、教養もなき蓮葉にして、且つ鈍根の少女也。彼女が彌耳敦の清教徒家庭に入り來り、其の夫婦の鹿爪らしき顔をなしたつゝ、兀々として、讀書、思索に餘念なきを見、其の生徒が時に鞭撻せられて、悲號するを聞くや、荒寒、幽暗、龍宮より鬼が島に、入嫁したるの感を懷きたるも、偶然にあらざる也。抑々彌耳敦は何故に此の如く輕率なる結婚を斷行したる乎。是れ吾人が之を評して、詩人的結婚と云ふ所以也。常識を以てすれば、固より想像の及ぶ所にあらず。されど彼は詩人也。彼は物を有る通りの物として見ず、有らざる可らざる通りの物として見る也。惟ふに彼は此の少女を一見し、彼の詩人的眼孔は、直ち

美に酔ふ
の弱點

相互の失
望

第五章 五〇 詩人的結婚

二二九

に之を理想的天女化したるにはあらざるなき乎。然も恐らく亦た、彼女が普通の女子以上の好顔色を有したるが爲めにあらざるなき乎。何れにしても彼は、美に酔ふの弱點あり。殊に美人の美に酔ふの弱點に於て、最も甚だしかりしに似たり。吾人は彼の作りし短詩、小謠等によりて、斯く推定す可き、多くの理由を有する也。而して彼は當初に於て、此の少女の美、少くとも青春的美に酔ひ、直ちに其手を握りしにあらざるなき乎。そは兎も角も、彼の酔は乍ちに醒めたり。彼は新婦が理想の天女にあらずして、極めて世俗的なる泥塑女子たるを覺れり。文藝の嗜もなく、宗教の熱信もなく、高尚なる會話も出來ねば、婦人たる教養も乏しき。唯だ若き騎士黨の士官や、其類の相手となりて、世間的歡樂を追求する以外の事を解せざる、極めて無教育の平凡なる少女たることを發見せり。而して彼の少女も、其の夫婦が顔立の立派なる、好丈夫たる以外には、何等の愛著心を發見せざりしならむ。而して相互失望の結果や、問はずして知る可きのみ。

五一 破鏡覆水

彼女の歸寧

彼女は自から其友をして、暑中を其の里方に暮らさしむ可く、彼女に申し送らしめたり。之を理由として、歸寧を請へり。彌耳敦は九月下旬には、必らず還り來る可きを約して、其請を允せり。是れ實に七月の事也。然も彼女の歸寧後、間もなく里方より彌耳敦に向て、其の再還を期待するなからんことを通告せり。惟ふに是れ彼女の個人的意向のみならず、當時王軍の威勢再燃し、熱心なる王黨のポウエル家は、激烈なる民黨と親縁を結びたるを悔い、之を取り消さんと企てたるならむ。而して新婦の去りたる後、幾くもなく従前三年間、狀師たる二男の家に入りし彼の老父は、再び彼と同居せり。

新婦の離版論

彼は頻りに召喚狀を發し、最後には、其の新婦の還るを促がす爲めに、特使を派せり。然も特使は、何等の要領を得ず、唯だ侮辱を齎らして還れり。此に於てか彌耳敦の憤怒は、白熱となれり。彼は直ちに離婚論の小冊子を公にせり。是れ實に

蜜乳月の離婚論

一六四三年八月一日と爲す。而して其の議論の要旨は、結婚を不可分離的神聖と云ふが如きは、腥さ坊主共の附會の妄説のみ。苟も其の性格相反し、意氣相背くに於ては、離婚は是れ正當の事のみと云ふにあり。

讀者請ふ出版の日附に注意せよ。彼の新婦を携へて還りたるは、六月下旬也。新婦の歸寧は七月也。而して離婚論の出版は、八月一日也。如何に彌耳敦の立場に、都合善く計算するも、離婚論は、遅くとも彼女が家に在りし時に、脱稿せられたりし也。即ち彼は蜜乳月の際に、既に離婚論を起稿しつゝありし也。如何に非常識は、詩人の特權とは云へ、是れのみは餘りに甚だしくして、到底諒解の餘地なきに似たり。されど是れ恐らくは、彼女が彌耳敦に向て、同床を拒みたる結果ならんと猜定するものあり。而して其の猜定を確む可き文句、離婚論中に發見せらるゝと云ふ者あり。何れにしても、異常の出來事と云ふ可きのみ。

當時英國の民黨は、蘇格との同盟成り、長老派は、民黨を席捲しつゝあり。而して所謂長老派の、異端に對して峻嚴、激烈、苛酷なる、固より羅馬教以上にあり。彼

天下駭然
を告む

等はいかでか此の如き離婚を正認するが如き、怪説詭論を見脱がす可き、其の天下騒然として、之を咎めざるものなきは、是れ當然の勢のみ。而して其の敵や、監督教會中に於てせずして、却て民黨の本體、中堅たる長老派の諸高僧諸論客たりしこと、亦是れ必然の勢のみ。

輿論に容れられず
私憂を演
釋して天
下の公憂
とす

蓋し婦人を尊敬したるは、中古の武士的風尚也。是れ所謂羅馬舊教の遺風として、清教徒に於ては、之を排斥せり。彼等の無二の經典は、舊約聖書也。其の經文に従へば、男子は神體に形りて作られ、婦人は男體より分れて作られたるもの也。是を以て男子は神に事へ、婦人は男子に事ふ可きを以て、其の神の御心と做せり。但だ彌耳敦の離婚論や、婚姻其物に向て、大鐵槌を下したるもの也。其論旨は、殆んど我が女大學の七去説と、伯仲の間にあり。是れ男女の神聖なる關係を、根本的に破壊するものとして、其の當代の輿論に容れられざりし所以也。彌耳敦は詩人也。彼は自己一人の不幸を以て、人類的不幸と見做せり。彼は自個の不幸なる結婚を悔ゆるの餘、獨り竊かに愚痴を滾さず、之を人類の大厄難と

し、社會の大公憤として、之を天下に訴へたり。乃ち天下の爲めに、此の一大不幸を除かんと欲して、自から天下を敵とするを顧みず、此論を著したる也。彼は公事を以て、私事と混同せず、直ちに私憂を演釋して、天下の公憂となせり。是亦た以て彼が詩人的心理作用の揮揮として、觀察す可きのみ。然も天下は、此の如き寛大なる諒解を以て、彼の離婚論を迎へざりし也。

五二 離婚と自由出版

離婚論の
増補出版

彼に對す
絶頂の
非難

文房商協
會の制裁

文壇に於ける彼は獅子の如し、其の敵を見れば、猛氣百倍す。彼は世論の沸騰を見るや、一六四四年二月、更らに離婚論を増補して出版し、堂々自個の姓名を署し、之を公然議院と、當時會同しつゝありし、宗門大會とに寄進せり。此に於てか群謗衆難は、擧げて彼の一身に集まり來れり。彼は此間に於て、教育論の小冊子を出版せり。此事に就ては、既に前文に掲げたれば、今茲に複説する必要なし。而して同年七月、彼は専ら僧侶を相手として、更に新らたに、離婚に關する小冊子を發行せり。彼に對する非難は、今や其の絶頂に達せり。彼は小冊子に於て、攻撃せられたり。彼は倫敦の各説教壇上に於て、攻撃せられたり。八月十三日、バルマアは、上下兩院議員に對する説教に於て、彼の離婚論は、一炬に附す可き者と攻撃せり。而して議院より彼に制裁を加ふべき、種々の方便は講せられたり。特に文房商協會は、止だに彼の所説の風教に有害なるのみならず、彼の出版の

反撥の勢
を激揚す

検閲制度
の大打撃

方法の不正なるに就いて、其の制裁を加へんと企てたり。蓋し議院は、一六四三年六月、一切の出版物をして、検閲官の允可と、文房商協會の登録とを経ざるべからずと、規定したるに拘らず、同年八月發行の離婚論は、検閲なく、登録なくして、出版せられたれば也。

此に於てか彌耳敦の彈力は、猛烈なる反撥の勢を、激揚し來れり。之が爲めに彼の散文中、最も有名にして、最も雄辯なる「アレオバギチカ」の小冊子は、出で來れり。即ち「如温彌耳敦氏が、議院に對する無検閲出版の自由に就ての演説」と標題して出で來れり。是れ實に一六四四年十一月二十五日也。此書本來の性質よりして、故らに検閲を経ず、登録を爲さずして出版せられたり。其書既に挑戰的なれば、出版の方法も、亦た固より挑戰的たりし也。

小題大做は、彌耳敦の特色也。彼は議院と、文房商協會とが、自個の小冊子出版に就て、異議を唱へ、妨害を與へんとするを見て、奮然として起ち、更らに之を出版自由の大問題に轉開し、言論自由の大義名分を提げて、検閲制度に大打撃を加

平生所とせざる所

へ來れり。自から受身に立つて辯護するは、彼の平生決して屑とせざる所也。彼は恒に其の快劍、長槍を、敵の旗下に突き込まずんば、決して休せざる也。されば彼の小指を傷けたる者は、他日彼に向て一命を授くるの覺悟あるを要する也。

出版檢閱は羅馬舊法の迷法

彼は議院に向て、書籍を保護す可きを叫べり。曰く出版檢閱は、羅馬舊法の迷法也。善書を絶つは、猶ほ人の一命を絶つが如し。學者には善書をも、惡書をも、隨意に讀むの自由を與へよ。是れ彼等をして、善惡を差別せしめ、自から其の精神を鍊磨せしむる所以也。如何に檢閱を嚴にするも、決して惡書を絶つ能はざる也。且つ縱令其の檢閱の目的を達し得可しとするも、知らず何の邊に、聰明、正善なる檢閱官を見出し得可きと。

若干の除外例

然も彼は絶對的に、出版の自由を呼號せざる也。彼は若干の除外例を割引せり。彼は苟も眞に世道人心に、有害なる出版物は、出版の後に、之を停止するの方便を説けり。博士ジョンソンは之を評して、苟も彌耳敦の説の如くせん乎、泥坊を

論理上到底兩立せず

入牢せしむる法律あるが故に、何れの家も、戸締りせずして、安眠し得可しと云ふの類にあらずやと云へり。熱中せる彼は、斯る冷評家の生ずるを、顧慮するの遑あらざりし也。

彌耳敦を苛責せず

運命は實に奇也。思ひきや出版檢閱に反抗の聲を揚げたる彌耳敦が、一六五一年、總統政治の頃には、自から出版檢閱官たらんとは、マッソンは之を回護して、彼は唯だ政府の週刊雜誌を、監督したるに止まると云ひ、或者は又た、彼は檢閱官として、其の力を恒に出版自由の方便に、善用したりと云ふ者あれども、彼が原則として、出版檢閱に反對したると、彼が自から檢閱官となりたるとは、論理上到底兩立す可き地なし。

然も吾人は此の一事を以て、彌耳敦を苛責せんとするにあらず。但だ此を以て、如何なる先見者も、寸前暗黒、運命の爲めに翻弄せらるゝを免かるゝ能はざる、一の例證と爲すに過ぎざるのみ。吾人豈に敢て、高潔なる彌耳敦の心事を、累はさんとするものならん哉。但だ彼と雖も人間也、固より其の周圍の大勢に支配

せらるゝを、避くる能はざる可きのみ。

五三一 一波萬波

譏諷の集
點と一身
の無事

出版検閲は、彌耳敦の論文によりて、殆んど抵死の打撃を受けたり。彼は固より譏諷の焦點たりしも、其の一身は無事にして、老父と與に、生徒と與に、其の書齋的生活を送るを得たりし也。彼が最初に於て、監督教會と相争ふや、彼は自から長老派の教會政治を識認したり。然も離婚論の出版以來、長老派彼を容れず、彼も亦た長老派を容れず。彼は無検閲出版自由論中に於て、長老派を以て、學問を壓抑せんとする、再來の専制者と呼べり。彼は詮じ來れば、監督も、長老も、同名同實とすれば、別に葛藤の種子無かる可しと叫べり。即ち彼は速かに長老派が、假面を脱して、監督と其實を同うするものたることを、天下に暴露すれば、天下の論は定まるべしと、斷言せる也。彼が一六四六年、良心の抑制者と題したる短詩中に、新たなる長老は、舊き僧侶の大書せられたるものなりとの、一句の意、亦た此に同じと爲す。

派と長老

長老派
筆書中に特

二個の離
婚に關す
る小冊子

ネズビ
の大勝
の社會
的立場

杜甫と彌耳敦

二四〇

此の如く彼と長老派とは、全く茲に分離したり。若し當時に於て、哥倫及び、其の軍隊の獨立派が、信仰自由の説を主唱し、彌耳敦に聲援する微りせば、彼や固より長老派の迫害の犠牲者たりしならむ。然も彼や、一身の無事を保つを得たりしも、長老派よりは、怨敵視せられたり、外道視せられたり。彼の姓名は、長老派の「黒書」の中に特筆せられ、異端の錚々者中に、計上せられたり。長老派は彼の一派を稱して、彌耳敦派若くは離婚派と云へり。

彼は尙ほ、離婚論出版當初の氣分を失はざりし也。彼は一六四五年三月に、二個の離婚に關する小冊子を出版せり。其一は、聖書中より結婚問題を抽き來りて、自説を發揮したるものにして、其二は、前著離婚論に對する駁論を、反駁したるもの也。而して彼の反駁の慘刻、暴戾なるや、如何に彼に同情ある者も、卷を掩ふを以て、寧ろ彼に對する敬意を表する所以なりとせずんばあらず。

然も一六四五年六月、ネズビの大勝利は、哥倫及び獨立派の氣焰を揚げ來りたると同時に、彌耳敦の社會的立場をして、愈々安全ならしむるを得たり。彼が

實行に於
て更に大

輕率なる結婚は、彼の一身にも、英國にも、意外なる影響を來せり。離婚論も此れよりし、自由出版論も此れよりし、長老派との分離も此れよりし、哥倫及び獨立派との接近も此れよりす。一波實に萬波を生じ來りしぞ、不思議なる。

彼は其の議論に於て、傍若無人なるのみならず、其の實行に於ては、更らに大膽を加へたるものに似たり。彼は一六四三年の冬より、其の翌年にかけて、レィ夫人と交際を始めたり。彼女はマルボロ伯爵の娘にして、彼よりも年長に、且つ既婚者也。如何に彼が彼女に傾倒したるかは、其の短詩の示す所の如し。而して更らに或る年少にして未婚の婦人も、亦た彼の心頭に上り來れり。即ち彼の德馨しき少貴女に與ふと題したる短詩中に、現はれたる婦人は是れ也。惟ふに彼女は、一六四五年の交、彼が結婚せんと企てたるデヴィス嬢たりしならむ歟。何れにしても、彼は法律上何等の離婚の手續を経ずして、今や彼女と結婚せんとしつある也。議論は兎も角も、形式上に於ては、彼は正しく重婚の責任を負はんとしつゝある也。

ボウエル家の困窮
と復歸の
得策

杜甫と彌耳敦

二四二

牛^{オックスフォード}津州に於て、否運の重圍に陥れるボウエル家は、早や此事を耳にせり。王軍の命數は、日に蹙まれり、一家の困窮は、日に募れり。今や彌耳敦に叩頭して、破鏡を全からしむるの他に、一家保全の策はあらざる也。而して彌耳敦の友人等も、彼の一徹なる行動に就て、頗る疑惧する所あり。斯の如き新事件を出來して、更らに物論を蜂起せしめんよりも、寧ろ覆水をして、再び盆に復らしむるの、得策なるを思へり。

訪問の親戚
を先に
メ

同棲と轉居

此に於てか、彼等は相議して、彌耳敦が親戚を訪問するを先知し、其家にメリを匿し置き、彼が其室に入るを待ちて、突然に現はれ出でしめ、跪きて其罪を恕せんとを請はしめたり。彼が失樂園中に於ける、夏娃^{エバ}が亞當^{アダム}に向て謝罪し、亞當が之を容恕する光景の一節は、正しく此實驗の影寫たらずんばあらざる也。彼女は二年の後、十九歳にして、再び其の夫婦と同棲せり。而して彼等は、少くとも此よりして肉身上、完全なる夫婦となれり。彌耳敦は遂に、何等精神的要求に満足せず、又た満足せんことを求めざりし也。是れ實に一六四五年七月の末、若

詩集出版
の機會

くは八月の初め也。彼は之が爲めに其居を轉せり。是れ半は生徒の増加したるが爲め、半は妻の復歸したるが爲めならむ。而して彼の第一詩集は、實に此際に出版せられたり。是れ實に一六四六年一月二日也。彼は如何なる餘裕を以て、干戈滿眼、國論鼎沸の際に、其の詩集を出版するの機會を見出したる乎。是れ實にモズレ^{モズレ}なる、企業的の高等文學出版者の、懲憑にて出で來りし也。出版者たる彼は、自から此書に引して、スペンサー^{スペンサー}以來、英國詞壇の第一人を、天下後世に紹介するを以て、自から誇りとする所以を陳べたり。而して今や此の二百頁の眇乎たる詩集は、彌耳敦著作集中の珍書として、世界好書家の愛惜寶重する一となれり。

五四 高峰 墜石

の獨立派中

彌耳敦は、獨立派中の獨立派也。彼は敬虔なる信徒にして、聖書の愛讀者たり、敬讀者たり、常讀者たれども、未だ一の教會に屬せず、一の會堂に於て禮拜せず。彼は唯だ彼が心中に於て、禮拜し、祈禱し、冥想したり。彼は二十三歳の當時に於ける、短歌の一節たる所謂常住我が主君の前に立つの覺悟を以て、其の身を持したりし也。而して彼の立場は、哥倫一派の優勢と與に、愈々安寧と、堅固とを加へ來れり。

ボウエル一家の同居

初も一六四六年六月に於ける牛津オックスフォードの陥落は、ボウエル一家をして、倫敦に竄退せしめ、其の多數の家族は、彌耳敦と同居するに到れり。彌耳敦は固より此の如き、亂雜無秩序なる分子を、家庭中に混入せしむるを好まざりしも、彼は殊勝にも、門戸を開いて、其の精神、意氣、趣味に於て、何等共通點を見出さざる岳父及び其の眷類を迎へたり。而して彼の第一女アーンは、同年七月二十九日に生れ、

老父の永眠

父に負ふ所多大

私塾を罷む

岳父ボウエルは、其の過半破産したる家資を剩して、一六四七年一月一日に逝けり。而して其の三月には、彼の老父は、八十四歳を以て其の天年を終れり。惟ふに彼の老父は、其子が期待の半ば以上を、成就したるを見て、心竊に自から満足して逝きしならむ。由來彌耳敦は、餘りに多く他の美點に嘆服し、他の厚意に感謝するの、弱點を有せざりし也。然も彼は其の詩中にも、其の文中にも、父に對しては、一再ならず嘆美、謝恩の情を表せり。彼が『父の常住不斷の督勵と、注意とを以て臨みたる』を語り、且つ『神は必らず彼の功德に酬い給ふ可し』との字を挿みたるを見れば、如何に彼が其父に負ふ所の多大なりしかは、問はずして知る可し。彼は其の前半生に於て、總ての人よりも、其父に於て、其の知己を見出せり。

爾來二年間は、何等彼の傳記として、掲ぐ可き事なき也。彼は一六四七年十月に、従前よりも小屋に移れり。是れボウエル家の家累が去りたると、生徒を謝し遣りて、僅かに其の二姪のみを、教育したるが爲めならむ。蓋し彼が私塾を罷めた

三個の著作に著手

極端なる共和論者

るは、父の死後其の衣食に於て若干の餘裕を得たりしが爲めならむ歟。然も彼は未だ多年の計企たる詩の大作に立ち返らざる也。彼は其間に於て、同時に三個の著作に著手せり。第一は英國史也。第二は拉典語にて編纂せらる。即ち基督教理に對する系統的解剖と題する神學書也。第三は拉典字書也。而して此間に於て、彼が胸中の感想を吐きたるものは、唯だ數篇の短歌あるのみ。然も時局は、高峰墜石の勢を以て激下せり。第二の内亂は、フエアファックスと哥倫との力によりて、直ちに戡定せられたり。而して查斯王は、遂に到着す可き最後を遂げたり。天下の人心は、餘りに事の意外なるに驚倒して、自から其の居措を失しつゝあり。但だ彌耳敦や然らざる也。彼は宗教に於ては、教會制度を識認せざる、極端なる獨立派也。政治に於ては、立君政治を不是とする、極端なる共和論者也。彼は實に英國を舉げて、民黨の查斯王に對する非常處置を賛成したる、唯一人たらざるも、其の賛成を公然發表したる唯一人にして、亦た第一人たりし也。是れ則ち彼が第一回の政治的小冊子にして、其の出版は、王の刑死後、二

讀者に警告する所

一夫の紂を誅する論理的

週間以内に出で來れり。

吾人は今ま茲に其の論旨を摘載するに際して、讀者に警告する所あり。そは日本と外國とは、其の國體を同うせざることは是れ也。吾人は彌耳敦の論旨に賛同を表するにあらず、唯だ歴史的事實として、之を掲ぐるに止まることは是れ也。而して此の如き論旨は、日本の國體に於ては、根本的に排斥せざる可らざることは是れ也。

蓋し彼の論旨は、恰も孟子流の筆法を、今ま一層詳悉したるに他ならず。其書題して「王及び爲政者の職掌」と云ふ。而して其の旨義は、如何なる時代に於ても、苟も暴政者、若くは惡王あらば、彼等を審問し、其罪に服せしめ、而して後之を廢するにせよ、之を死刑に處するにせよ、是れ正當の措置也。若し通常の執權者、此事を執行するを怠るに於ては、他の力ある者、代りて之を執行するを以て、正當の措置と爲すの理由を、證明したるもの也。即ち孟子の、一夫の紂を誅するの論理を、滔々として演繹したるのみ。

五五 一 轉 機

外國語書記官の生涯の轉機

民黨は此の小冊子を以て、百萬の援軍を得たる心地せり。而して彼は其の出版より、一箇月以内に、國務評議所より、外國語書記官たる可く、招聘せられたり。當時の國政總理の大權は、國務評議所に屬し、評議所は、四十一人の議員を以て成立したり。此中には固より哥倫^{ゴロン}もあり。而して評議員中に、別に外交委員あり。此中にはヴェン^{ヴェン}あり、マルテン^{マルテン}あり。乃ち彼は外交委員より、三月十三日に内命を傳へられ、十五日に自應^{ホワイト、ホール}に出頭して、自から其の職務に就けり。是れ實に彼の生涯に於ける、一轉機と云はざるを得ず。蓋し查斯王^{チャース}の死は、一月三十日にして、彌耳敦の小冊子の出版は、二月十三日也。而して彼の就職は、三月十五日也。其の急遽匆忙の狀、知る可し。

彼の出身と奉公の丹誠

彼は何故に斯る職務に就きたる乎、或は之を以て、彼の一生の大失策と做す者あり。されど是れ彼を知らざる者の言のみ。彼は國家多難の時に際して、己れ獨り安逸を食ぼるを以て、不本意となしたるならむ。彼は本來節儉家也。彼の衣食は、如何なる場合にも、質素簡易にして、之れが爲めに彼を餘儀なくせしめたること、未だ是れあらざる也。さりとして彼は、名場に馳驅せんとの野心もあらざりし也。要するに彼の出身は、貧の爲めにあらず、祿の爲めにあらず、名の爲めにあらず。眞に唯だ奉公の丹誠^{ダンセツ}を抽^ひんが爲めたることは、半點だも之を疑ふの餘地なき也。

政府彼を求む

彼は自から云へり、『何人も予が外出を見たる者なし、何人も予が友人に請託し、若くは請願者顔して、應門に立ちたるを見たる者なし。予は唯だ家にあり、自力によりて、以て簡易生活を營めり。予は恰も吾國の歴史の編纂の業に取掛りつゝありき。然るに夢想だもせざるに、國務評議所は、予を聘して、外交用文書を司らんことを要めたり。』と、是れ固に事實ならむ。蓋し民黨政府側より見れば、彼は拉典語には熟練したり、歐洲諸國の語には精通したり、醇乎たる民黨主義者にして、英國に聞えたる文豪也。彼が政府に要めずして、政府が彼に要めたる

彼の表面の職掌と十年の草間文書の

は、寧ろ當然の順序たらずんばならず。彼が表面の職掌は、議院及び評議所の命を享けて、外交用文書を起艸すると、他より到來せる文書を檢閲、若くは翻譯すると、必要の場合には、外國の使節と、直接面談する等にあり、而して彼が在職十年間に起艸したる、拉典文書は、總計一百三十七通にして、之を年割にすれば、一年十四通に過ぎず、單に此れより見れば、彼は極めて閑職にありしが如きも、其實彼は種々の方面に働らけり。民黨政府は、今日の所謂御用記者として、彼を利用したり、而して彼は之が爲めに、其の半生の精力を消磨し、遂に其の双眼を犠牲としたり。

彼の視力と自己の愛惜

蓋し彼の職に就きたるは、宛も彼の四十歳の時にして、彼の視力は、漸く危険情態に近きつゝありし也。彼にして自から愛惜せば、決して斯る政争渦中に、飛び込まざりしならむ、されど彼は一生を通じて、自から愛惜するを解せざる、漢也。彼は自動的に事を求めず、自發的に問題を起さず、されど其一たび或物が彼を衝動し來るや、彼の渾身の熱血は、乍ち迸り出ずんば休まざる也。彼は自から火

詩人的高調と志士の氣意の化合

を放たず、されど人一たび彼に觸れん平、乍ち火星を飛ばさずんばならず。彼は一切の顧慮を除却して、慨然として其聘に應じたり。吾人は彼が爲めに、其の愛惜せざりしを憾みんよりは、寧ろ彼が詩人的高調と、志士の意氣の化合を、此に於て見得たることを欽せずんばならず。彼の年俸は、二千八百八十圓にして、今日に換算すれば、約一萬圓ならむ。然も彼の所得は、俸給にあらざる也。彼は四十歳にして、始めて現實の世界に入れり。彼は書齋的生涯より、人事的生涯に入れり。彼は實に日夕、當代の英雄、大人、謀士、猛將と接觸し、修和、宣戰の大事に參與し、茲に如何なる高價を以ても、容易に得可らざる經驗を購へり。而して此の經驗や、實に彼をして不朽の詩人たらしむる、豫行習作たらしめたるは、他日に於て、始めて實驗せられたり。與ふる者は、受くる者よりも幸也。彼は國家に一身を與へて、更により大なる物を得たり。

容易に得可らざる經驗

五六 文壇の奏勳

豫言者の如きペン

民黨政府は、現代語にて説明すれば、所謂御用記者として、彌耳敦を聘せり。されど彼は政府の使用人の如くならず、豫言者の如く、其のペンを揮へり。彼は自から信せざれば動かさず、彼は自から信せざれば言はず。されど一たび言ふ所あれば、必ず徹底せずんば止まず。人を殺さば、血を見る可し、敵に逢はば、塵にす可し、彼は決して生々殺しを以て、満足せざりし也。
人或は彼が論理の孟浪にして、論旨の旁徑に入るを咎めむ。彼が討論の個人的攻撃に陥るを咎めむ。彼が動もすれば悪趣味を逞うし、却て自から得々たるを咎めむ。然も何人も、彼が眞實を疑ふの權利を有せざる也。彼には偽善なく、彼は矯飾なく、彼には詭隨なく、彼には雷同なし。彼は直ちに其の心を、其紙に描けり。但だ彼が詩人なるが爲めに、動もすれば其の熱情に驅られて、詩人的誇張に逸するが如きは、是れ亦已むを得ざるのみ。

偽善なく矯飾なし

彼のペン是最も活動せり

彼のペンは、就職以來最も活動せり。一六四九年の五月には、民黨の愛蘭に於ける措置を辯護したる、小冊子出で來れり。此中に於て、最も目覺しきは、哥倫に對する頌讚の一節也。蓋し哥倫は、當時愛蘭に於ける王黨の陰謀、舊教徒の騷亂の裁定者なれば也。然も更らに重要なものあり、そは同年十月に出版せられたる、『肖像破砕者』と題する冊子是れ也。是れ實に查斯王刑死後直ちに出で來りたる、『王の肖像』と題する小冊子を、反駁したるもの也。

『王の肖像』の作者と『肖像破砕者』の作者

所謂『王の肖像』なる小冊子の作者は、其實監督ゴーデンなりしも、匿名にして世に出で、世間一般には、概ね查斯一世の親著として受取られたり。而して其書は、王黨の經典として、戸毎に讀まれつゝあり、是を以て民黨政府は、其の反駁の必要を感じ、之を法制學者たるセルデンに託したるも、固辭して應せず。遂に彌耳敦を煩はすに到りしと云ふ。然も是れ彼の所好にあらざりしとは、『高位より墜落して、其の最後の負債を辨償したる人の不幸を、今更々細説するが如きは、固より褒賞す可き事にあらず。復た本論の旨意にもあらず。』と、彼が

相手たるは
筆をふるは
彼の本色

該冊子中に於て、辯明したるを見て知る可し。如何に彼が其氣の進まざりしかは、彼が查斯王の刑死に就て、民黨の措置を辯護したる小冊子は、一週間以内に書き上げたれども、『王の肖像』は、二月に出版せられたるに拘らず、彼が反駁書は、漸く十月に出で來りたるを以て知る可し。然も一たびペンを揮ふや、相手を粉壺にせずんば止まざるは、彼の本色也。彼は逐條に涉りて、之を辯駁せり。されど彼の筆鋒も、猶ほ『王の肖像』の流行を禁ずる能はず。彼の反駁書は、其の翻譯を合して、一年中三版に過ぎざりしも、『王の肖像』は無慮五十版を超えたるを見て、知る可し。

然も彼のペンは、更らに此れよりも大なる、決闘の武器として、使用せらる可くなれり。當時歐洲一般の通用文字は、拉典語にして、苟も歐洲の輿論に訴へんと欲せば、拉典文に頼らざるを得ず。此を以て和蘭に流竄したる查斯二世は、其父の冤を雪ぐ爲め、民黨政府を彈劾せんが爲め、將た王黨の檄文として世に布く爲め、拉典學者として、歐洲に雷名を轟したる、ライデン大學の教授サルマシア

歐洲一般
の通用語
は拉典語

サルマシ
アスの文
筆

スに、其の編述を託したり。サルマシアスは佛國人にして、自から稱して、拉典語を以て文を艸するは、其の國語を以てするよりも、容易なりと云へり。彼は博覽なれども、世務に通曉せず。彼は公文書を利用して、其の論旨を證明する所以を知らず。彼は能文なれども、文藝的練達を缺き、又た世間の耳目を聳動せしむる方便を解せず。彼は唯だ委託せられたる儘、文筆上の辯護士として、其事に従ひしのみ。

サルマシアスの一書は、要するに帝王神權説を唱へ、查斯一世を辯護し、民黨政府の措置を非難したるもの也。此書は一六四九年の十月、十一月の交に出版せられ、其の年末には、英國に輸入せられたり。國務評議所は、猝かに之を禁止したり。而して一六五〇年一月八日、彌耳敦に向て、其の辯駁書を艸せんことを命ぜり。彌耳敦は、之が爲めに殆ど其の全力を竭したり。彼は漸く翌年の春、即ち一六五一年三月、『英國人民の辯護』と題して、之を公にせり。而して此著一たび世に出で、歐洲を震撼せり。彼は實に前後に其の匹罕なる文勳を奏したり。

サルマシ
アスの著
書と彌耳
敦の辯駁

五七 歐洲的高名

歐洲の文壇に於ける一段の壯觀たりし也。サ
ルマシアスの査ス王辯護は、是れ辯護士の法廷に於る演説のみ。然も彌耳敦の

彌耳敦とサルマシアスの討論は、歐洲の文壇に於ける一段の壯觀たりし也。サルマシアスの査ス王辯護は、是れ辯護士の法廷に於る演説のみ。然も彌耳敦の英國人民辯護は、是れ當人の衷心よりの告白也。其の何れか真、何れか假、何れか熱、何れか冷、何れか痛切、何れか輕浮、固より同日の論にあらず。況や彌耳敦は、人を射らば、先づ馬を射よの筆法に則り、サルマシアスの書を駁するよりも、寧ろ著者其人を、歐洲の環視中に怪殺し、侮殺し、熱罵殺し、冷笑殺し、一呼一吸の餘隙さへも與へざらしめんとしたるに於てをや。

學者社會の驚喜

從來清教徒的の英國は、無學者の巢窟として、大陸に解せられたり。然るに拉典文に於て、歐洲的の大家サルマシアスと、抗衡する人士を見出したるは、實に學者社會の驚喜したる所たらずんば、あらず。サルマシアスは、ライデンに於て、寧ろ不人望たりし也。或は彼の虛傲に對する、反感もありしならむ。或は彼の大名に

寧ろ論鋒の痛快とす

對する、嫉妬もありしならむ。然るに今や彼の鼻梁を挫くのみか、彼を拉典語の文典と單語以外には、何物をも解せざる大莫迦者、大棍徒と叱斥し、恒に其の驕婦に驚御せられつゝある、一生饒舌の驢馬と、笑倒する者出で來りぬ。世論が其の惡趣味を咎むるよりも、寧ろ其の論鋒の犀利を痛快としたる、亦た宜ならずや。且つサルマシアスは六十歳にして、彌耳敦に比すれば、約二十歳の年長者也。老少の相撲には、寧ろ少者に最負多きは、世間の人情也。彌耳敦が此の老大家を論倒したるを見て、其の論旨の可否は、姑らく措き、彼に向て團扇を揚げたるもの多かりしは、亦た是れ人情の常ならずんばあらず。

此の如くして此の問題は、王政と民政、帝王の神權説と、暴政抵抗正認説より、一轉して歐洲大陸の老大家と、英國の新文士と、一騎打の決闘と見做されたり。而して勝利は何れも彌耳敦にありとし、當時サルマシアスは、瑞典の首府ストックホルムに在りしが、皇后クリスチナさへも、尙ほ彌耳敦を以て、勝利者と認めたりしを以て、彼は懊惱に堪へず、再び和蘭に還れり。而して彼は、スバの温泉に

勝利は彌耳敦にあり、死はサルマシアス

閑居して、彌耳敦に對する答辯書を舛しつゝ、一六五三年九月に死せり。彼は恐らくは、彌耳敦の爲めに論殺せられたるならむ。

ホップスは、兩人の議論が、恰も討論術の演習として、同一人士の手によりて、製作せられたるものゝ如しと云ひ、所謂の孰か鳥の雌雄を知らんとの意味を以て、之を批判したれども、世論の大多數は、彌耳敦に與みしたるが如し、乃ち此の一書の爲めに、一千圓を遺産中より、彌耳敦に與ふ可き遺言書を草したる者、英國の紳士中に出で來りしを以ても、其の一斑を知る可し。

彌耳敦は、頗る歐洲的名譽の大文豪となれり。和蘭博言學の大家ヴォシアス曰く、予は未だ此の如き名文を、英人より期待せざりしなりと。是れ歐洲に於ける學者の公評を代表したる言也。即ち彌耳敦の名は、和蘭、佛蘭西、驢馬、瑞典、獨逸等に傳唱せられたり。彼の冊子は、其の五月には、既に五版を和蘭に印刷し、二種の翻譯書さへも出で來れり。而して倫敦在留の有名なる外人は、何れも彌耳敦に面會し、彼に對して讚辭を呈するを以て、其の光譽としたり。而して國務評議所

世論の大多數に彌耳敦のみ

歐洲の名譽の大文豪

哥倫の武勳と彌耳敦の文勳

崇上なる職分に於ては、視力を失へり

は、彼に向て感謝の決議を做せり。

此時に於て、哥倫は、愛蘭を平定し、蘇格を併合し、武勳赫々として凱旋し、今や統一せられたる大國の上長官として、白廳にあり、武に哥倫あり、文に彌耳敦あり、今や英國の共和政府は、歐洲列國の決して輕易す可らざる、一大勢力とはなりぬ。其の文勳や實に重しと云ふ可し。然も彼は其の名譽を、贏ち得たると同時に、全く視覺を失へり。是れ實に一六五二年の春にして、彼の冊子出版後約一個年也。乃ち彼は四十四歳にして、全く盲目となれり。

彼は刺撃の劍法に熟練したる程の、敏快なる眼孔を有したれども、其の視力は、本來強からず。然も其の視力の虐使は、遂に一六五〇年には、其の左眼を失はしめたり。されば彼が答辯書の起稿に就ては、彼は實に自から職分と、視覺との何れかを選まざる可らざる、極所に立ちし也。彼自から曰く、「撰擇は、予の前に措かれたり。崇上なる職分を回避せん乎、將た視覺を失はん乎。斯る場合に處しては、予は醫師の言を聞かず、即ち上天の言として出で來る、我が中心の聲に服従

勇士の剣
を取るが
如く取る
が如く
取るが
如く

せずんばあらず。是れ予が僅に剩留したる視力を役して、公益の爲めに、我が微力の最善を竭したる所以也。」と、彼のペンを取るや、勇士の剣を取るが如し、彼はその一命を賭して敵に臨めり、況や其の視力に於てをや、彼は固より其の視覚を失ふを豫期したりし也、彼は真に其の所信の爲めに、自から愛惜する所を知らざりし也。

五八 失明の厄難

失明は
人生の
一大
厄難

失明は、人生の一大厄難也、されど普通人に於ては、唯だ厄難のみ。然も學者に取りては、其の生命の泉源を、涸渴せしむる也、特に彌耳敦の如き、書籍を以て、殆んど生活の要素の、大部分としたる者に於ては、其の打撃の重大なるや、實に傍人の想像し得る所にあらず。

辛抱は
彼の
特色

然も辛抱は、彼の特色也、彼は如何なる痛苦にも反抗するの、鐵腸を有せり、彼が失明に關する短詩は、實に天地を貫く彼の大氣魄、大精神を表明したるものにして、却て長歌の哭よりも、百世の下、人を感動せしむるものなからず。『造化主に奉仕せんとすれば、却て其咎を享く。神は吾が勞作を要めて、却て光明を奪ひ給ふは何ぞや、然も忍耐は、徐ろに答へて曰く、小言を止めよ、神は人の勞作を要めず、又た其の献物を要めず、最も善く神の柔かなる枷を負ふ者、是れ最も善く神に奉仕するものなり。』と、而して彼は實に泰然として、其枷を負へり。然も彼

泰然とし
其枷を
負へり

予は斷念せり

眞の明は神の誘導に天命と存す

が失樂園中に於て、『季節は循環す、然も予には循環せず。』の一節を見よ、如何に痛楚なるよ。彼は苦杯を満喫して、然も其苦を辛抱したりし也。如何に彼が自から諦めたるかは、一六五四年九月、彼の友希臘人フィララスが、佛人の眼科名醫に其の治療を託するを勸説したるに、答へたる一書にて、明白也。彼は其の病症の、十年前より起りたる事情を叙し、『如何に名醫の手によりて、希望の光明を見るにせよ、將た見ざるにせよ。予は既に斷念せり、覺悟せり。予の暗黒界は、頼ひに神の恩寵により、安息と、勉強と、友人の談話と、訪問とによりて、他の難病よりも、寧ろ容易に堪へ得べしと思ふ。聖書に曰はずや、人は麴包のみにて活くるものにあらず、神の口より出で來る言葉によりて活くと、果して然らば眞の明は、止だに眼にのみ存せず、實に神の誘導と、天命とに存するを、復た奚ぞ疑はん哉。神既に予の一生を通じて、其手を以て、予を誨へ、予を導き給ふ。乃ち予が眼に、永き休暇を與ふも、亦た可ならずや。』と、彼の信仰は、實に彼に心眼を與へたり。彼は失明しつゝも、決して落膽失望せざりし也。

厄難は又た彼の家庭を襲へ

一家の荒寥凄

對工教に對する個人的攻撃

厄難は失明のみにて満足せず、又た彼の家庭を襲へり。一六四六年、彼の長女生れて以來、其の二女は、一六四八年十月に生る。而して其の長男は、一六五〇年三月に生れ、一六五二年に夭せり。第三女は、一六五二年三月に生れ、而して其母メリは、其の産褥に逝けり。不幸なる彼の妻は、九年間彼と同棲し、其の逝くや、唯だ其の三個の孤兒を、失明せる其夫に形見として殘せるのみ。彼は職掌上の便宜の爲め、曾て白廳内の官邸に住したりしが、今は、聖、セント、ジョージ、公園の一角に、其居をトしつゝあり。主人は盲目也、長女僅かに六歳、次女四歳に滿たず、三女は襁褓の中にあり。一家荒寥、慘凄の狀、想ふ可き也。然も彼は其の英氣を消磨せざる也。彼が當年一歳中に起草したる公文書は、彼が就任以來起草したる總計と相匹せり。然も更らに、病める獅子を起す可き刺衝は、出で來れり。著者は匿名にして、海牙にて出版せらる。其書題して『英國の主人殺害者に對する、王族の天に向ての絶叫』と云ふ。而して其書は、専ら彌耳敦に對する、個人的攻撃を以て充滿し、彼

此書の彌耳敦の著者

が伊太利に旅行したるに際し、南國淫蕩の罪惡を犯せし彌耳敦には夢にも幻にも覺えなき濡衣を被らしめたり。元來此書は、佛國の有名なるカルウイン派牧師の子、當時英國にあるムランの著作なりしも、彼は憚かる所ありて、之をモラス其人に託し、和蘭にて出版せしめ、モラスは、之が序文を加へ、卷頭には故らに、サルマシアスに献ぐとの文句を記して、發行せしめたり。されば其の著者の、匿名なるに拘らず、世間が之をモラスの著作として受取りたるも、偶然にあらず、乃ち彌耳敦も、彼を以て其の當面の對手として、方さに其の百雷を墜落し來らんとしつゝある也。然も彼は半ば其の病の爲め、半ば其の資料の爲め、徐々と其の反駁に従へり。彼は先づモラスに關する醜行の調査に取掛れり、而して之を以て攻撃の資料となせり。彼は實に目にて目を償ひ、齒にて齒を償ふの手段を取らんとしつゝあり。

五九 餓饑の饒吻

愈々片意地となる

左なきだに片意地なる彌耳敦が、失明と與に、愈々片意地となりたるは、不思議にあらず。但だサルマシアスならば、歐洲的高名の學者なれば、其の鋒を交ふるも、まだしもの事なれど、眇乎たるモラス輩を相手として、大喧嘩を打始むるは、聊か大人氣なしと云はん乎。

モラスは如何に男も評しはし

扱もモラスの兩親は、蘇格人にして、彼は佛國に生る。今はアムステルダムに於て、聖教史の教授たり。牧師として雄辯の名あり。彼は從來燒直しの漢オランダにして、特に婦人に關しては、如何はしき評判の男也。其の該書をサルマシアスに献げたる、インキの未だ乾かざるに、既にサルマシアス夫人と衝突し、遂に其の一家と絶交したり。而して其の理由は、彼がサルマシアス夫人の侍女に對して、特別の懇懃を拂うたりと云ふに、起因せり。夫人は侍女をして、彼に結婚せしめんと試みて得ず、其の復讐として、彼の教授、及び牧師の職を剥ぎ去らんと企て、彼は漸

心頗る之
を恐る

く其厄を避れたるも、之が爲めに避けて、佛國に還れり。當時彼は彌耳敦が、其の反駁書を草しつゝありと聞き、心頗る恐るゝ所あり、百方彼に向て、其の自から作者にあらざることを辯明したれども、いかで一徹に思ひ込みたる彌耳敦が、之を承知す可き。却て其の確信を固くし、遂に一六五四年五月に、其の反駁書を公にせり。

彌耳敦の
反駁書

元來彌耳敦と云へば、必らず崇大を聯想す。彼は散文に於ても崇大也。詩に於ても、最も崇大也。而して其の人物に於ては、更らに最も崇大也。然るに此の崇大なる人物が、典雅瑰麗の文字を以て、今日の新聞三面雜報の記事にさへも、顧慮す可き。例せばサルマシアス夫人の侍女が、其の不眞實を嘆り、モラスの面を爬き、劈く杯の描寫に到りては、笑止と云ふ可き乎、滑稽と云ふ可き乎。吾人は其の評言に苦まざるを得ず。然も彼の餘憤は、既に地下に眠れるサルマシアスの死屍を鞭ち、更らに該書の出版人ウレックに及べり。

モラスの
辯解

流石のモラスも、今は黙止す可きにあらずして、其の辯解を試みたり。其の一部

は一六五四年十月に、他の一部は一六五五年四月に出で來れり。然も如何に辯解したりとて、彼の社會上の位置は、全く彌耳敦の爲めに覆されたり。良家の母は、彼が牧師として、家庭を見舞ふことを警戒せり。彼は實に注意人物となれり。事此に到る、彌耳敦に於ては、凱歌を奏して引き上げて可也。然も彼は敵の息の音を止めずんば、休する能はざる也。

饑吻を送
うせり

彼は一六五五年八月に、其の再駁書を出せり。彼はモラスが、自から作者たらずと辯明したるを、承認せずして曰く、其の作者たると否とは、必ずしも深く問ふに及ばず。但だ既に其の序文を書き、其の出版を監督し、其書の非難の世に出で來る迄は、我物顔に濟まし居たる彼は、自から全書の責任を負擔せざる可らざる也。彼は實に餓ゑたる鱒の如く、其の餌に向て、一滴の血をも、一片の肉をも、剩まざらんとするの、饑吻を逞うせり。彼は舊事實を再録するに止らず、更らに新事實を蒐收して、其敵を脅かせり。

此小冊子
の價值

宏懷、雅量は、到底彼の長所にあらざる也。然も此等の小冊子は、半は彼の自傳と

哥倫に對する讚美

して、半は當代人物の肖像として、爭論以外の興趣なきにあらざり。ブラッドシウに向て、其の大丈夫的勇剛と、其の一貫したる節操とを許し、フェアファックズを比較するに、羅馬の大將シビオを以てし、其の同人が政治方面に輝かざりしは、自から哥倫の偉材大器を放つて、一頭地を出さしめたる所以と云ひ、而して其の哥倫に對するや、讚美を極めたり。博士ジョンソンは、該撒と雖も、未だ恐らくは此の如き、華麗なる諛辭を享けざりしならむと云へり。されど是れ諛辭にあらず。彌耳敦は實に哥倫を信じたれば也。當代に於て、缺く可らざる人物と信じたれば也。

兩人に對する外人の嘆美

兩人の關係

六〇 哥倫と彌耳敦 (一)

彌耳敦は佛蘭西及び伊太利に來る可く、切に請望せられたり。外人は轉々彼を嘆美せり、而して何れも重幣を以て、彼を招かんとしたり。彼等が英國に來るは、哥倫と彌耳敦とを見んが爲めなりし也。而して彌耳敦の出生したる家や、室を見んが爲めなりし也とは、オブレの語る所、固より多少の掛直はあるとしても、亦以て如何に當時に於ける、哥倫と彌耳敦とが、武と文とに於て、英國を歐洲に代表したるかを知る可し。

今や此の兩人は、一は其の長官として上にあり、他は其の屬僚として下にあり、而して彼等は、相互に如何なる關係を有したる乎。蓋し彌耳敦の哥倫に於けるは、本多正信の家康に於けるが如くならずして、寧ろ崇傳、道春の徒に庶幾かりしならむ。彼は哥倫帷帳の謀士としては、餘りに偏理的に、餘りに時務に迂遠に、而して恐らくは、餘りに硬骨たりしならむ。彼は唯だ典雅、鏗鏘の高格調、瑰奇、俊

事實に違
き假構

逸の大文章を以て其の記室の一員たるに止まりしならむ。後世の歴史書家往々哥倫起立して口授し、彌耳敦卓に據りて、之を筆記するの状を描く。是れ固より想像に過ぎずして、寧ろ事實に違き假構のみ。哥倫の長期議院を解散したるは、一六五三年四月にして、所謂の轉選議院の開會は、七月四日也。而して彼等が其の政權を、哥倫に返上したるは、十二月十二日にして、哥倫が大總統として、英蘇愛三國の大權を掌握す可く、其の就任式を、ウエストミニスター廳に擧げたるは、十二月十六日也。如上の壽日と、彌耳敦が一六五二年の初春に既に失明したる事實とを湊合すれば、斯る出來事の有り得可らざるや、明けし。

公務の必
要以外關
係を有せ
ず

彼等は互に公務上に於て、對面したることあらむ、或は官廳に於て、同席したることあらむ。然も其の個人的懇親の關柄たりしや、否やは、疑問也。元來彌耳敦は、自恃の特質を有す。彼は其の長官の門下に趨走するには、餘りに自尊にして、且つ餘りに孤獨性多かりしならむ。人の曾て彼に向て、在和蘭英國大使に紹

哥倫に向
て英雄崇
拜的高調

彼は一人
一黨者

介を依頼するや、彼之に答へて曰く、予は權勢者と交際尠し、予は出來得る丈多く吾家に在り、是れ予が自から欲する所なりと。彼が公務の必要以外には、何等の關係を、哥倫其他の有力者に有せざりしや、明けし。然も彼は哥倫に向ては、英雄崇拜の念を高調せしむるを、禁ずる能はざりし也。彼は一六四九年、民黨の愛蘭に於ける措置を、辯護したる小冊子に於て、既に哥倫に傾倒の情を表せり。彼は一六五二年五月、哥倫に與へたる短詩に於て、『吾人の首領』と呼べり。是れ實に彼の中心の聲にして、彼は哥倫の死に抵る迄、此心を渝へざりし也。彼に黨派なし、彼は彼一人を一天地となし、一宇宙となす。即ち彼は一人一黨者也。然も若し強ひて孰れの仲間かと問はば、彼は哥倫黨と云はざるを得ざる可し。彼も或る意味に於ては、一種の神權論者也。查斯王は、神權唯だ帝王にありとなし、彼や唯だ神權は、義にして且つ力ある者の上にと爲せり。乃ち彼は哥倫を以て、理想に庶幾きものとしたる也。

彼が哥倫
以黨なる所

彼は哥倫の長期議院解散を是認せり。何となれば議院は、唯だ自から權勢を固執するに汲々たるの外、他念あらざりしを以て也。而して彼は、哥倫の大總統政治を容認せり。何となれば彼は、哥倫を取らん乎、無政府を取らん乎の、十字街頭に立つを知れば也。彼は天命人心の哥倫に歸するを信じ、而して哥倫が其力を善用するを信じ、且自から哥倫をして、其力を善用せしめんと欲したり。是れ彼が哥倫黨たる所以也。然も彼は決して無制限なる、哥倫崇拜者にあらざりし也。

哥倫に向
忠告種々の

出位の言

六一 哥倫と彌耳敦 (二)

彼が一六五四年五月、出版の小冊子に於て、民黨諸名士、特に哥倫ゴロンを稱讃したることは、既に記したる所の如し。然も彼は該冊子中に、併せて哥倫に向て、種々の忠告を與へたり。(第一)善く選抜したる群賢の評定に信頼せよ。(第二)國家は宗教に向て、全然無干係となし、信仰及び禮拜には、絶對的自由を與へよ。(第三)干渉に過ぐる勿れ、苛察に陥る勿れ。(第四)大學及び學士的恩給は、學識、才藝に對する報酬として之を與へよ。(第五)出版は絶對的自由ならしめ、其の責任の一切は、出版者をして之に當らしめよ。(第六)恒に寛大の心を以て、仁政を施せよ。

是れ彼の位地よりすれば、出位の言たるやも、未だ知る可らず。然も彼は其の經綸を哥倫によりて行はんと欲し、敢て切々、懇々の言を、送うしたるのみ。而して其の多くの點に於ては、彼の理想は實行せられたり。然も彼は但だ一事の、哥倫に對して、頗る失望したるものあり。そは彼と哥倫とは、教會制度に於て、到底其

教會制度
に於て
見の不一
致

彌耳敦の
失明と職
掌の變化

哥倫の位
置と勢力

の意見を一にせざりしことは是れ也。哥倫は信仰自由の點に於ては、依然たる獨立派也。乃ち彌耳敦と何等の相違なき也。然も彼は經世家也。彼は政教の或る交叉點あるを知れり。彼は長老派、獨立派、浸禮派、若くは温和なる監督派、其他一切の福音主義の基督教徒を、國立教會の下に纏め、國家監督の下に、教會費を國庫支辨たらしむるを以て、彼の政綱の一となせり。而して是れ最も彌耳敦の、見るを欲せざる所也。況や哥倫は晩年に於て、上院を恢復するの意あり、是亦た彌耳敦の、甘心せざる所たるに於てをや。

彌耳敦の失明は、其の職掌に若干の變化を來せり。彼は助役を必要とせり。彼は當初はメドウズを得、次には自個の推薦したる、親友マアヅェルを得たり。而して彼の年俸も、一六五五年四月には、二千八百八十圓より、二千圓に減せられたり。然も之れと同時に、其の職掌の分量も減せられたり。されど彼が拉典文の大手筆たる面目は、此間に於て最も能く發揮せられたり。

當時哥倫は、内に於ては騒亂を平げ、外に向てはスチュアート朝の、宮廷本位の

彌耳敦執
筆各機
の文書

最も出色
の文字

外交政策を一變して、國民的外交政策を行ひ、所謂英國の海權を世界に扶植し、大いに世界的帝國の基礎を擴充したり。哥倫は單に大統領として、英蘇、愛の三國に臨むのみならず、歐洲中原に向て、新教國盟主の位置を占め、其の霸權を振へり。而して彌耳敦の外交用文書は、實に其の活動の機關たりし也。

マッソン曰く、其の文書の一様に、彌耳敦慣家の格調あるより見れば、彼が單に拉典語の翻譯者なりとの推定は、全く排除せらる可し。而して其中には、或は和蘭に對する宣戰の文あり。或は西班牙大使の、其の職務に怠慢なるを詰責するあり。或はタスカニの大公が、英國の船舶を保護したるを謝するあり。或は佛王に對して、英國の商人の貨物を押收したるを、辨償す可く忠告するあり。或は瑞士の新教徒的各郡カトに向て、其の宗教の爲めに、勇戰を獎勵するあり。或は瑞典の王に向て、其の世子の誕生を祝するあり。或は葡萄牙王に向て、英國使節暗殺の陰謀者を、嚴密に探索す可く催告するあり。或は佛國大宰相マザリンマザリンに向て、其のダンカークを攻略したるを賀するあり。而して最も出色の文字は、一六

英國輿論
の沸騰

五五年、サボイ公に向て、其の新教徒の臣民を虐殺したるの抗議書にあり。然も其の文字は、穩正謹嚴、實に公文書の典型たり。而して彼は却て、滿腔の熱血を其の短詩に吐けり。『復讐せよ、神よ、爾の虐殺せられたる聖徒の骨は、アルプス山の氷雪の裡に、散亂しつゝあり。』とは、實に其の劈頭の第一句也。英國の輿論は、沸騰せり。哥倫は、此の非人道行動に對し、我が最近最愛者の虐殺せられたるが如しと、麗言し、方さに堂々其罪を問はんとせり。機敏なる佛國の宰相マザリンは、是を歐洲の一大事と見て、猝かに仲裁して、漸く事なきを得せしめたり。此の如くして彌耳敦は、心中十二分の満足を得ざるも、哥倫の在世中は勿論、其の子リチャードの代に至る迄、大總統政治の繼續する間は、依然として其職に留まりし也。

六二 哥倫と彌耳敦 (三)

彌耳敦の
小廉的生涯

哥倫ゴロン總統の施政に就ては、彌耳敦も心竊かに、疑懼を懷きしが如し。然も彼は其の必須の前に、姑らく其の沈黙を守りたりし也。而して此間に於て、彼の生涯は、聊か小康を得たり。其の職掌としては、哥倫の自由主義、人道主義、而して所謂現今の帝國主義を、歐洲列強の朝廷、及び宰相、權臣に鼓吹する、外交文書の起草者となり。内にしては、幾多の外客、及び友人の彼と交遊するあり。彼が少ロウレンス、及びスキナア等に與へたる、短詩を見れば、淺く、葡萄酒を斟み、妙に風琴を弾じ、清談、閑興まゝ、乏しからず。彼も亦其の失明の不幸を諦め、自ら此中に樂地を見出しつゝ、ありしに、似たり。

彼は四年の孤棲の後、一六五六年十一月十二日に、其の繼妻を娶れり。彼女はカザリン・ウードコックと云ふ、同棲十五個月にして、産褥の爲めに逝けり。即ち一六五八年二月也。彼は短歌を作りて、彼女が愛と、甘美と、善良の耀きを讃し、其の

繼妻も亦
逝く

哥倫の逝
去とマイ
ブトンの
串文のイ

悲嘆と、其の愛著と、而して再び天國に於ける會合の希望を誂へり。然も人事意の如くならず、哥倫の偉大なる英靈は、一六五八年九月三日、即ち彼が生涯の吉辰たる、大勝利の記念日に逝けり。彼は實に其の愛女エリザベスの沈痾を看護し、彼女が八月六日に亡ぶるや、自から傷悼に禁へず、加ふるに其の心身は、内外の國務に消磨し去りて斃れたり。『彼は隻手を以て、議院の援助を藉らず、國歩の艱難と奮闘す可く、餘儀なくせられたり。彼の身體に豊富充溢せる精力も、悉く之が爲めに、枯燥せしめて、終に彼を墓に送れり。彼の埋葬は、彼の榮光と、國家の不幸との、播種期と云ふ可し。』とは、是れ彼の執事マイヅトンの記する所、惟ふに是れ公平なる識者の觀察を、代表したる言に庶幾し。

哥倫とマ
コレイの
英國史

マコレイは、其の英國史に特筆して曰く、彼が其の死期に於て、僥倖にも好機會を得たりとの説は、固より取るに足らず。然も彼は兵士によりて、最後迄崇拜せられたり。彼は、大英國の全國民を擧げて、恭順せられたり。彼は總ての外國より畏怖せられたり。其の遺骸は、倫敦に於て、未曾有の盛儀を以て、英國古代の帝王

英國史上
一種出色
の人豪

の間に葬られたり。而して其子リチャードは、皇太子同様に、何の造作もなく、其位を襲へりと。是れ良に素白なる事實也。

風雲の情
兒女の氣

哥倫は英國史上、一種出色の人豪也。彼は四十二歳にして、始めて軍に従ひ、乍ちにして當代無二の名將となれり。彼は運命の宛轉と、彼自身の舵取とによりて、遂に大總統に躋ぼれり。而して彼が假設的政策は、不幸にして彼と與に亡びたるに拘らず、其の遺業は、赫灼として歴史を照らせり。彼と共に軍陣に臨みし者、彼を評して曰く、『彼は實に大強漢也。戦争の最暗黒危機に於て、戦争の最も糾紛せる絶頂に於て、餘人は皆な氣死するに拘らず、其の希望は火柱の如く、單り彼に輝けり。』と、彼や蓋世の英雄、渾身皆な膽なる者に庶幾し。然も其の家庭に於ては、實に慈父たり、孝子たり、愛夫たり。彼の長子の死没するや、彼は自から短劍を、吾が腹に刺みたるよりも苦しと云へり。彼の老母に對する孝養は、時人をして嘆美せしめたり。彼は國家の大務を双肩に擔ひつゝ、其の愛女の爲めに、看護に勞瘁し、其跡を趁うて逝けり。風雲の氣、兒女の情、彼に於て兩ながら之を見

る也。

然も彼は更らに大なるものあり。彼は帝王よりも、有力なる高位に躋りつゝも、眞率なる紳士の生活を廢せざりし也。彼は其の無二の權力を握りつゝも、必要以外に、一切之を濫用せざりし也。彼は質素なりしも、公式に於ては、國家を代表する丈の威儀を失はざりし也。彼には何等の嫉妬心なく、復讐心なかりしも、國家の公安を保持するに於ては、何人をも、何物をも、用捨あらざりし也。彼や善人の擁護者にして、惡漢の恐怖たり。彼や自から學者ならざれども、學問を獎勵せり。彼は新教の總ての宗派に對して、一視同仁也。彼が舊教徒に向て、寛大を缺きしは、宗教上よりも、政治的理由の爲め也。彼は猶太人に、市民權を與へんとしたるに於て、其の同時代よりも、殆んど二百年超越したりし也。彼は自から偉大なる英人にして、亦た英國を偉大ならしめんとせり。彼が地中海に於て、海賊を蕩掃し、通商を安全ならしむるや、颺言して曰く、此の如くして始めて羅馬の盛時に於て、羅馬人の名を重からしめたるが如く、我が英人の名を重からしむるを

更に大なるものあり

善人の擁護者にして、惡漢の恐怖

得むと。

此の如き人物の前に於ては、縱令若干の異論あるも、之を沈黙する、亦た實に已むを得ざる也。彌耳敦曰く、此の如き偉大なる人物、此の如き我が國家の重務に適恰する人物に就て、予が力のあらん限りを盡して、總ての國民、總ての時代に向て、彼の人格の超絶せる優秀と、彼が賞讃の最高極位に値する所以とを、顯彰する能はず。唯だ聊か予自から彼と同醜たりとの非難の爲めに、彼の冤を雪ぎ、其の誣を辯ずるに止まらしめば、予や實に徒勞のみと。然も哥倫は、何人よりも自から能く知れり。彼曰く、神は惡評の上に超然たり、神は必ず其の適當の時に於て、予を辯明し給ふ可しと。今や世界の公論は、天言を待たず、彼の疵瑕あるに拘らず、眞英雄たることを承認せり。善哉ガヂナアの語や、彼は其の事功よりも、偉大なる人格也と。

若干の異論あるも沈黙

公論は眞英雄たることを承認す

六三 最後の奮闘

彼の故吾に返れり

巨星は地に隕ちたり、天下は暗黒となれり、哥倫の繼續者、其の子リチャードは固より危局統率の器にあらず、形勢は奔馬の如く、殆んど向ふ所を知らざらんとす、彌耳敦は、此に於て彼の故吾に返れり、彼は當初より哥倫の國立教會意見に、絶對的異見を挿めり、而して其の素志を行ふは、此の一時にありと信じ、矢繼ツギ早に小冊子を公にせり。

第一第二の小冊子

第一は、一六五九年の初に出で來れり、そは議院に向て、國立教會の不當を論じたるもの也、第二は、同年の八月に出で來れり、此は宗教費國庫支辨に反對したる也、彼曰く、神の教會と、信仰の進歩を沮害する敵二あり、其一は制限的暴力にして、其二は腐敗的雇役也、彼が所謂る前者は、國家の權力を以て、公認したる教會を設立するを意味し、後者は國費を以て、牧師の俸給等を支辨するを意味す、現代的言語に於て説明すれば、前者は國教廢止にして、後者は國給取上也。

彌耳敦の書

第三の小冊子

然も時局の混沌は、斯る教會問題の討議を容るゝの餘地なき也、一六五九年五月には、リチャードの總統政治は罷みぬ、而して彌耳敦の官職も、同月十五日、議長レントルの名によりて、瑞典王、及び唎馬王に與へたる、二通の拉典語書翰の起艸を以て、打切となれり、天下は再び鼎の如く沸き返れり。

第四の小冊子

此を以て彼は、第三に同年十月、議院と軍隊とを調和せんが爲めに、兩個の機關、相調停し、相戮協し、以て王政の恢復を豫防す可きを論せり、されど時勢の急潮は、彼の匆忙なるペンよりも、迅く奔れり、彼は寧ろ其跡より追掛け、喘ぎ、且つ僵れんとしつゝ、あり、臨機の軍隊政治も失敗せり、應急の議院政治も成功せず、將軍モンクは蘇格より堂々として、一六六〇年二月、倫敦に乗り込みぬ。

彼は其の三月三日に、『自由共和政府を建設す可き手早き、且つ容易なる方法』と題する小冊子を公にせり、其の主旨は、中央政府としては、永久解散せざる、中央大評議會を設け、重なる各地方に、地方議會を置き、地方の事務を處理せしむ可しと云ふにあり、英雄一去、國論は反動せり、群小跳梁、庶民皆な王政の舊を慕

へり。此時に於て、此の如き論を做すは、固より舟中大學を講ずるの類たるを免れず。

然も吾人は彼の迂遠を嗤はんよりも、彼の依然として、其の大膽不羈なる勇剛の精神を、賞嘆せずんばあらず。當時如何に、彼の精神の亢奮したるかは、其の小冊子の文章の平昔に比して、更らに支離滅裂なるを以て、其の一斑を知る可し。其中には、一句にて三十三行、三百三十六字を包容するあり。何人も彼が急遽狼狽の痕を、疑ふ能はざる也。

彼は此書を出版するを以て、足れりとせず、更らに之を摘要して書翰となし、將軍モンクに投せり。群衆は此の冊子を冷笑せり。モンクは此の書翰を閑却せり。而してモンクは、同年四月二十五日、上下兩院を召集し、王政恢復、查斯二世迎立を議せしめたり。彌耳敦は固より門外漢として、何等實務に干係あらざりし也。されど彼の奮闘力は、最後に瀕して、愈々猛烈となれり。

彼はグリュッフィスの非難に答へて、ステチュアート家を再興するよりも、寧ろモ

寧ろ勇剛の精神を賞嘆

彼の奮闘力愈々猛烈

查斯二世の凱旋

ンク將軍を王位に即かしむるを以て、忍ぶ可しと論せり。而して彼は、前の「自由共和政府建設論」を増補し、王政恢復の斷じて不可なる所以と、其の必ず國家に墮落と禍害とを齎らし來る可きを、豫言して再版せり。是れ皆四月の事也。而して其の五月一日には、上下兩院は、王政恢復を、全會一致にて可決せり。五月廿九日には、查斯第二世は、倫敦に凱旋せり。前政府の殘黨は、蜘蛛の子を散らすが如く逃竄せり。

乃ち彌耳敦の如きも、其の友人の家に隠匿せり。而して彼の從來の著述中、王政に尤も不利なるものは、悉く押收して焼かれたり。彼は一六六〇年八月廿九日、百人の罪徒を指名し、其他を赦免する賠償法案の議院に出現し、幸に彼の姓名は、其中に掲記せられざりしを以て、自由の身たるを得たり。然も彼の一身は、未だ安全と云ふ可らず。彼は尙ほ警視總監々視の下にありし也。而して彌耳敦は、斯る危急の場合に於ても、尙ほ警視總監が徵課したる罰金過多なりとして、議院に訴へ、之を軽減せしめたり。彼は到底反抗者也。彼は死に振る迄、其の反抗的

彼は到底反抗者

彼の保身
は不思議

精神を休止せざりし也。
抑々彼が如き、王政恢復に對して最後迄反對し、然も最後の唯一人として奮闘したる者が、遂に其身を保つを得たりしは、不思議と云へば、如何にも不思議也。或は曰く、彼は曾て王黨の詩人、即今查斯二世の勅選詩宗たる「デヅナント」を、民政の當時庇護したるが爲めに、同人は其恩に酬ん爲めに、彼を救解したるなりと、果して然る乎。或は曰く、彼は盲目にして、最早何等の危険なき一匹夫なれば、當局者は彼を追咎せざりし也。何れにしても、彼は其の一命を取留めたり。されど彼が二十年間、其の天職たる詞壇を去りて、政教の争渦中に没頭し、其の兩眼を喪ひつゝ、查斯二世入都の祝鐘の鳴る週間迄も、大聲疾呼して、王政に反抗し、縦令木や石の外、聽く者なきも、尙ほ黙止する能はずとして、奮闘したる主義主張は、悉く泡沫に歸せり。此の如くして、彼の生涯の第二の幕は、下されたり。

生涯の第
二の幕下

六四 意見の變遷

吾人は此の機會に於て、彼が政治及び宗教に關する意見の變遷の總勘定を爲さざる可らず。蓋し彼は、其周圍に無頓著に、只だ主觀的我見を固執して、一生を始終したるに似たるも、詳に其の足跡を辿れば、頗る周圍の影響を享けたるものあり。但だ哥倫は、水の流るゝが如く、其の行く可き所に行き、其の止まる可き所に止まりたれども、彌耳敦は其の變遷さへも、尙ほ偏理的傾向を脱する能はざりし也。然も偏理的ながらも、尙ほ全く其の影響を被らずしては、止む能はざりし也。

意見變遷
の總勘定

實に長足
の變化

彼は當初に於ては、監督教會に屬する清教徒也。ロード一派の舊教染みたる儀式的ならざるも、尙ほ英國々立教會の内に於て、其の安心立命の地を見出したる也。然も彼は長期議院の召集の頃より、監督教會反對論者となれり。彼は監督政治を廢し、之に代ふるに、長老教會制度を以てせんとしたり。而して彼は當時

に於ては、尙ほ王政を是認したり。然も彼の意見は、長足の變化を來せり。彼は長老派を以て、監督派と擇ぶ所なしと云ひ、遂に寧ろ此を以て、新たなる假面を被りて、舊き抑壓を繰り返さんとする者として、より多く長老派を排斥せり。而して之れと同時に、王政を以て、罪惡の根原となし、共和政治を以て、其の理想となせり。是れ實に長足の變化也。

然も問題は、如何にして此の共和政治を、處理するかにある。議院政治乎、寡頭政治乎、總統政治乎。此の場合に於て、或者は無政府黨に近き平準黨となれり。或者は空理に馳せて、實行を顧みざる議院政治派となれり。但だ彼は共和政府の、外交文書の書記官たりしが故に、抑々亦た哥倫と接近したる機會ありしが爲めに、一言すれば哥倫黨となりし也。彼は偏理論者なりしも、形式論者にはあらざりし也。

彼の宗教に對する徹底の意見は、絶對的自由にあり。政治と宗教とを、根本的に切斷するにあり。其の禮拜の形式の如きは、彼の問ふ所にあらず。又た關する所

問題は共和政治の處理

唯だ神と相對す

にあらず。彼は其の出身の當初は、自から教會の聖職に就かんと期したるに拘らず、中年以後、特に失明以後は、唯だ神と相對したるのみにて、一切の教會と沒交渉たりし也。

政治に於ても、他の偏理論者に反して、形式に拘泥せず。苟も一人の總統にして、自由を與へん乎、多數頭の議院政治が、不自由を與ふるよりも、寧ろ驩迎す可しと做せり。唯だ彼に拘泥ありとせば、強ひて形式を排斥したる點に於て、之を見る可し。

吾人は此點に於ては、哥倫の大解脫を見る也。彼は其果によりて、其木を擇めり。彼は各宗派一視同仁ならば、國立教會あるも妨げずとなせり。彼は出來得可んば、新たに共和政府を作らんよりも、從來の王政を保持せんと企てたり。然も彌耳敦は、王政と國立教會とは、其の結果の如何を吟味する迄もなく、絶對に之を排斥せり。唯だ彼が餘りに形式を排斥したる點は、彼も亦た一種の囚はれたる窠窟に陥れり。

寧ろ形式に拘泥す

哥倫の大解脫と彌耳敦

周圍の變遷と意見

彼の清節を疑はず

一貫せる自由愛好の熱情

彼は此の如く、周圍の變遷と與に、其の意見を變更せり。彼は共和論者なれども、寧ろ賢者の誘導の下に、自由を享有せしむるを理想としたり。暴民政治は、彼が中心より排斥したる所にして、彼は到底所謂多數の權力なるものを認めざりし也。彼の眼中には、多數の衆愚よりも、少數の賢者を以て、政治の中樞となせり。彼が最後の政治的小冊子に於ても、當時英國の輿論たる、王政恢復の如きは、全然其の正認す可き理由を、無視したりし也。一言すれば、彼の共和主義は、貴族的共和主義たりし也。

彼が如上の變説に對して、吾人は何等彼の清節を疑ふ可き理由なし。彌耳敦が進歩したるは、哥倫及び其他の人士が、進歩したるが爲めに、あらず、彼は唯だ哥倫及び其他の人士と與に進みたる也とは、マック・パチソンの評語にして、吾人は首肯せざらんとするも、能はざる也。

但だ此の變遷の中に於て、一貫したるは、彼が自由を愛好したる熱情也。自由は彼の一種のインスピレーション也。而して此點に於ては、哥倫も亦た彼と殊な

る所なし。但だ一人は經世的大眼孔と、大手腕とを有し、他の一人は、詩人的高遠の理想と、論壇的、大手筆を有したるの差あるのみ。

六五 反動時代

清教徒的
革命の最
後と結果

偉大なる精神と、狭小なる衣兜とを有する人士之を始め、狭小なる精神と、偉大なる衣兜とを有する人士之を終るとは、必ずしも無稽の惡口にあらず。清教徒的革命は、其の是非得失は、姑らく之を措き、其の活動者は、何れも献身的精神の結晶たりし也。然も其の最後に於て、之を王政に恢復したるモンク輩に於ては、榮爵、厚賞を食ぼるの外、殆んど餘念あらざりし也。而して其の結果として出て來りたる、王政恢復の時代は、實に英國史上に於て、沒理想、破廉耻、無精神の肉慾墮落時代たりし也。此を目して、單に王黨が、清教徒に對する勝利と云ふは、要するに皮相の見のみ。

鄙夫時代
の彌耳敦
境遇

英雄時代は去りて、鄙夫時代は來れり。聖徒なる語は、嘲弄の代名詞となれり。卑屈、柔佞、不信、放逸、あらゆる醜惡の状態の、勃興し來りたるは、一白皎瑩なる積雪の下に、埋没したる塵芥が、雪融と同時に現出し、其中より蛆蟲の涌き出づるが

精神的的
質的打撃
の大

如し、斯る時代に、前世の遺物として、一人取殘されたる彌耳敦の境遇は、如何に彼が傲骨淡なればとて、いかで同情せずして止む可き。彼は實に鬼界ヶ島の俊寛よりも、憐れむ可き境遇にある也。

大學生の
生涯と
希望

彼は本來節儉家也。彼が儲蓄の二萬圓、今日に於て約七萬圓は、共和政府の債券に投資し、政府の破壊と與に消失せり。而して之と同額の財産も、他の理由の爲めに損失せり。彼が共和政府時代に、公賣せられたる土地を、買収したる年額六百圓、現時に於て約二千圓收入の土地も、無償にて沒收せられたり。而して一六六六年には、彼が所有の家屋も、倫敦の大火にて灰燼となれり。彼は物質的にも、多大の打撃を被れり。然も精神的に於ては、更に之に倍蓰するものある也。然も彼は、最近二十年間、休止したる、畢生の大望を果す可く、茲に新たなる生涯に入れり。彼は當時五十二歳也。多くの詩人に於ては、婦人の出産期の閉塞する如く、詩源概ね涸竭するの時期也。青春の花は散れり、綠陰もなく、黃葉もなし、今は唯だ老幹、枯枝の槎枒たるを見るのみ。知らず彼は、何の特む所ありてか、此の

其志毫も
渝らざる

大作に取
掛る

大事業に取掛りたるぞ。吾人は茲に、彼が悲劇の第三齣に入るに際して、特に彼の落々たる雄心の窮して愈旺なるを嘆美せざらんとするも能はざる也。彼は一切の奮闘が、悉く皆な浮雲の如かりしを覺れり。彼は其詩句に謠ひし如く、悪日の中に陥り、悪口の中に陥り、危険と、幽寥とを以て取り捲く、暗黒の中に陥りしも、其志は毫も渝る所あらざりし也。彼は分に安んじ、命を樂しむが如き、平靜なる性情の持主にあらず。彼は決して死せる噴火山にあらず。彼は唯だ政治界に向て、宗教界に向て、現實界に向て、其の熱火を吐くを得ざりしのみ。然も彼は其の有する總てを壓窄し、總てを凝結し、總てを集注し、茲に彼の大作に取り掛れり。日暮れて途遠しと云ふは、まだしもの事也。彼は失明者也。彼は如何にして、其の詞源を涵養する、古今の名著を讀む可き。彼は如何にして、其の大作中に驅使する、諸資料を獵渉す可き。乃ち彼が口を衝て出で來る妙句は、誰の手を傳うて、之を筆記す可き。纔かに胸中の奇を吐く短片ならば、いざ知らず、彼が計企しつゝある大作に於ては、失明は百萬の怨敵よりも、恐る可き不幸也。然

失明は恐
る可き不
幸

も彼は其の不幸に、如何にして打克つ可き。盲人フオセットには、賢明なる夫人、恒に其の眼となるあり。馬琴の晩年は、其の貞順なる媳よめ、其の筆録者の任に當れり。然も彌耳敦は、誰と與にか此の大作を成就す可き。彼は實に彼が信賴す可き、何者をも有せざる也。

蹟、眞の敦耳彌

John Milton was born the 9th of December
1608 die Veneris half an hour after 6 in the
morning
Chushofer Milton was born on Friday about
a month before Christmas at 5 in the morning.
1615
Edward Phillips was 15 year old August 1645
John Phillips is a year younger about 1646.

My daughter Anne was born July the 29th
on the fast at evening about half an hour
after six 1646.
My daughter Mary was born on Wednesday
Octob. 25th on the fast in the morning about
6 a clock 1648
My son John was born on Sunday March the
16th about half an hour past nine at night 1650
My daughter Deborah was born the 2nd of May
being Sunday somewhat before 3 of the clock in the
morning 1652.
My wife's mother died about 3 days after. Had my
son about 6 weeks after his mother.
Katherine my daughter by Katherine my second wife, was
born the 12th of October between 5 and 6 in the morning
and died the 14th of March following 6 weeks after her
mother, who died the 3rd of Feb. 1673.

を月歳生出の等経双、弟、族家の其ひ及彼に中書聖持所敦耳彌れ是
らか自敦耳彌、年六四六一、は項五の初最。也寫復の蹟眞るたし入記
他、後の明失か彼、交の年八七五六一、は項二の後最、てしに記手
のりた蔵儲の館物博英大今書原、のもるためしせ補増てし彌に人

眼親
者近に
なし

友少の
期せず
して來
る諸

杜市と彌耳敦

六六 一片の暗黒史

二九六

不幸にして彌耳敦には、彼に親近して、其の双眼と爲る者あらざりし也。彼は其の書記を借へり、然も彼の引用する書は、概ね希伯來、希臘、拉典、然らざれば近世の大陸諸國語にして、單に英語に止まらざる也。而して此の如き語學の知識を、書記に求めんとするも、亦た難し。一六六六年、彼が大陸の友人に、拉典語の書翰を與へたる中に、其の書翰の語を、字毎に綴りて、口授筆録せしめたるの困難を、訴へたるを見れば、彼の當惑や知る可き也。然も桃李言はず、下自から蹊を成す。年少の諸友期せずして彼の許に來り、半は彼により、自から智見を求めんとし、半は彼と與に、其の樂を借にせんとする者、喜んで彼の代讀者となり、彼の代筆者となり、以て其用を辨ずるに到れり。或は父兄が、故らに其の子弟をして、如上の目的の爲めに、彼の爲めに役を取らしめたる者あり。現に劍橋大學に存する彼の草稿は、一卷の中に、六人の手跡の認む

一卷の中
に六人の
手跡

三個の女
兒

無教育に
て成長

可きあり。而して是等の中には、彼が幼少より教育したる、其の二姪中の弟たる
エドワード・フィリップあり、查斯二世の侍醫たるバルロウあり、判事總長コー
クの孫スキナアあり、醫師バゼットあり、教友派の教徒エルワードあり。又た
曾て彼の助役たりしマアウエルあり。彼等は何れも彼の寂寞を慰め、彼の不自
由を助け、彼の晩年の暗黒界に、若干の光明を投じたる者共として、彼が認識し
たる所ならむ。

然も彼をして、斷腸の思を做さしめたるは、彼の三個の女兒是れ也。記して此に
至れば、吾人は屢々筆を抛たんと欲したり。然も其の必要は、吾人をして彌耳敦
傳中の、極めて不愉快なる頁を満たすを、禁ずる能はざらしめたり。彼は其の初
妻によりて、三個の女子を得たり。一六六二年には、長女アーンは十七歳、次女メ
リは十五歳、三女デボラは十一歳。而して彼女等は、何れも孤女にして、其父は盲
者也。彼女等は殆んど無教育にて成長せり。長女は其名を記するさへ、困難なり
し也。彼女は美人なりしも、不具にて朗讀に適せず。次女は其母メリに似、末女は

其父彌耳敦に似たり。彼が餘儀なき必要は、二女及び三女をして、彼の代讀者たらしめたり。

抗勞と反

彼女等は、自から一字の了解するなき困難なる文字を、父の側に在りて、朗讀す可き任務に服せり。其の當座は辛抱したり、されど一日又た一日、遂に其の煩勞に堪へず、反抗するに到れり。彼の末女が、六十年後に法馬、オウイッドの章節を、無意義に朗々暗誦したるを見れば、其の回数頻繁なりしも、亦た想ふ可き也。然も其の反抗の張本は、實に長女アーンたりし也。末女は比較的柔順なりしも、次女は最も強項なる謀反人たりし也。人あり、次女に向て、其父の近く結婚せんとするを語る。次女答へて曰く、結婚の噂、吾に於て何かあらむ、若し父の死報に接せば、是れ聊か快聞たらんのみと、次女は其の姉と共に謀して、其の家婢をして、彼の買物の代價を胡魔化さしめたり。彼女等は父を欺きて、其の書籍の若干を、隱密に賣却せり、而して更らに其の全部さへも、賤しき婦人に、典賣せんと企てたり。

次女最も不良

父の愛と彼の末女

但だ彼の末女は、父の愛する所となり、聊か教育を享けたり。一七二五年、偶々人あり、其の何人の肖像と告げずして、墨墨にて描きし肖像畫を示す。彼女一見大呼して曰く、是れ吾父の肖像也。而して彼女自ら其の前髪を垂下して曰く、吾父の髪毛や此の如かりしなりと。彼女は此の如く、父の死後五十餘年、尙ほ其父を眷戀したりし也。

「不親切なる子供等」

惟ふに長女次女が、彼に反抗したるは、或は幼な心にも、其母の父に對する惡感の影響を、被りしにあらざるなき乎。彌耳敦は、其遺言書中に於て、特に「不親切なる子供等」と記せり。父は又た「彼女等が失明せる父に無頓著に、彼を遺棄すること、何とも思はぬ。」と云ひ、而して自から嘆じて曰く、予は葡萄畑より、葡萄を穫んと望めり。而して豈に料らんや、却て山葡萄を穫らんとはと。是れ實に人生痛恨の一事也。然も吾人は、徒らに無教育の彼女等のみを罪す可らず。若し其の責任を問はん乎、主として彌耳敦其人にありと云はざるを得ず。

失明に
加ふる
不幸
の家庭

杜市と彌耳敦

三〇〇

アゴニステス』の曲中に、『子や白日も猶ほ暗夜の如く、自から主とする所なく、他人の手に操縦せらるゝ、莫迦者の如く暮らせり。家の内となく、外となく、唯だ日毎に騙欺や、侮辱や、讒謗や、虐待を受けつゝあり。』との一句を讀まば、思ひ半ばに過ぎむ。

六七 家庭の小康

家庭の整
理と後妻

彼は其の家庭の整理上、其の友人醫士バゼットと詢り、其の周旋によりて、醫士の遠縁なるエリサベス・シンシュルを娶れり。是れ實に一六六三年二月二十四日にして、彼は五十五歳、彼女は二十五歳也。彼女は良家の出にして、彌耳敦の晩年の保護者としては、恐らくは最好の選擇たりしならむ。彼女は容色善く、金髪を被れり。『上品なる素生にして、温順なる、人好きのする性質なり。』とは、オブレの語る所。彼女を稱して悍婦なりと罵りしは、恐らくは、先妻の娘共の悪口ならむ。

彼女は固より彌耳敦の物質的慰安に資したる迄にして、其の文藝上若くは心靈上の幫助者としては、幾許もあらざりしならむ。然も彼女は、嘗て彌耳敦と同時代の文豪、ホップスに就て語り、又た彌耳敦が受取りたる、大陸諸名家の書翰を珍蔵したりと云へば、多少の教養ありしならむ。少くとも彼女は、彌耳敦の偉

晩年に於
ける一
點の
温光

二十年の
雪虐霜打
化と彼の
硬打

彼の身邊
と會心の
友生

大なる文豪たることを解し、彼に奉仕するを以て、其の快愉若くは光榮としたるが如し。是れ實に彼の晩年に於ける、一點の溫光と云ふ可し。彼は本來、人を愛することを解せざる、無腸漢にあらず。彼は最も他の愛を要求し、而して之に對して、利足を附けて、應酬するの愛を獻ぐることを、辭せざりし也。然も二十年の雪虐霜打は、彼を硬化し去れり。且つ彼や自から持する甚だ重く、自から居る甚だ高く、自から執る甚だ固きが爲めに、彼れ以上に、社會的地位を占めたる者若くは各種の方面に於て、彼と對等の地を占むる者とは、自然に其の交際疎遠なるを、免れざりしが如し。然も後進、友生若くは外國人等にして、彼の名聲を慕ひ、彼を訪問する者に對しては、彼は毎に其の門戸を開き、且つ寧ろ之を驩迎し、且つ彼の流儀に於て、之を厚待したるが如し。彼は自から孤獨、寂寞を嘆ぜり。されど彼の身邊には、恒に若干の崇拜者、親近者、相集りて、彼の歡笑を扶けたり。而して彼は、決して苦蟲を噛み潰したるが如き、態度なきのみならず、其の會心の友生に向ては、實に怡悅なる主人たりし也。彼

の末女デボラ曰く、彼は愉快なる伴侶也。其の話頭の混々として盡きず、而して其の眞率なる好機嫌と、殷勤とは、以て會話の生靈と云ふ可しと。彼は自國に於ける同時の名家若くは碩學の士に、親友あらざりしも、恒に其の友生に對して、快談し、其の佳興に入るや、機鋒往々諷刺となり、譏諍となり、以て彼等を欣然として、傾聽せしめたり。

彼は友生に對して、實に親切なりき。其の一人にして、一時彼の記室たりしエルクードは、如何に彼が舉止の恭敬にして、其の拉典語の發音を教ふるに、注意深かりしかを語り、且つ曰く、彼は實に不思議の耳を有せり。予の朗讀に際して、予自から之を了解したるや、否やは、直ちに之を分別せり。而して若し予が了解せざる點に到れば、乍ち朗讀を中止せしめて、詳審に之を講明したりと。彼は決して、一點の溫情なしと云ふ可らず。但だ敵に向ては、惡鬼羅刹も、未だ其の猛を專らにする能はざりしのみ。

音樂の嗜好は、其父よりの遺傳たりし也。彼は自から好んで、風琴、及び四絃琴を

友生に對
して親切

音樂の嗜
好と其の
趣

家庭其緒
に就く

彈じ、其の妻の歌に和せり。而して其姪エドワード・フィリップも、亦た歌者の一人たりし也。姪や其の叔父より、最も痛楚なる教育を受け、而して兄弟相率ゐて王黨に加はり、叔父の寒心す可き、鄙猥なる書籍の編纂者となり、彌耳敦的教育主義の失敗を、證明したる標本たりしに拘らず、恒に叔父に親近し、極て打解けたる、狎れ／＼しき會話をなせり。彼や恩に酬ゆるに、怨を以てせざりし也。彼の家庭も、漸くに其緒に就けり。而して彼の三人の女兒は、尙ほ家にありしも、其の晩年は、縫箔修業の爲めに、若くは其の名義を以て、其家を去れり。而して彼の大作は、此の以前に於て、徐ろに築き上げられたりし也。

第六章 彌耳敦と其の大作

六八 大 作 成 就

失業期の
著手期

彼の畢生の大作たる『失業園』^{ハワグアイノレスト}は、如何にして成就したる乎。其の姪の語る所によれば、彼は既に一六五八年哥倫總統治の末期に於て、其の小閑を偷んで、著手したりと云へり。然も其の進歩は、寧ろ遅々たりしならむ。而して其の總統政治より、王政恢復の際は、彼が最後の死物狂ひの奮闘期にして、固より其の餘裕ある可しと思はれず。

最後の思
出に其力
を注す

王政恢復し、天地一變。其の驚濤、駭浪に漂うて、纔かに一身の安全を贏ち得たるや、彼は愈々最後の思出に、此に向て其力を集注し來りたるが如し。或は二十行、或は三十行、興王すれば四十行も、一氣に吐き出し、其の手近に來る者をして、之を筆記せしめ、漸く累積して冊を成せり。然も其の長足の進足をなしたるは、蓋し一六六三年二月第三次結婚以後の事ならずんば、あらず。彼の姪エドワード・

Paradise lost.
A
POEM
Written in
TEN BOOKS
By JOHN MILTON.

Licensed and Entred according
to Order.

LONDON
Printed, and are to be sold by Peter Parker
under Creed Church near Aldgate; And by
Robert Butler at the Turks Head in Bishopgate-street;
And Matthias Walker, under St. Dunstons Church
in Fleet-street, 1667.

題標本卷十〔版初〕園樂失
〔版出教倫年七十六百六千〕

全篇の脱稿

大作出版の緒に就く

契約書と原稿料

杜市と彌耳敦

三〇六

ファイリッップは屢々來往して其の校定に任じたるが如し而して一六六五年七月以前には既に全篇脱稿したるものに似たり何となれば彼は同月倫敦の疫病を避けて二十三哩を隔てたるパツキンガム州の或る田舎に假寓したる際には既に一本以上の草稿を携帯したりと思はるれば也即ち彼が其の年少友生エルワードに其の一本を貸與して携へ去るを許容したるの事實存するを以て也。

然も彼が其の倫敦歸來後直ちに出版せざりし所以は何ぞや一は出版免許の面倒なりしが爲め他は一六六六年九月倫敦大火ありて一切の商業滯滞したるが爲めならずんばあらず而して此の曠世の大史詩は一六六七年我が寛文七年四月二十七日始めて其の發行者との契約を締結して出版の緒に就きたり。

今其の契約書を見れば彼は倫敦の印刷業者サミュエル・シムモンズに五十圓の即金を取り第一版一千三百部賣却の後更に五十圓を仕拂ひ而して爾後同

部数の二版及び三版に各五十圓宛仕拂ふことを約し、此にて版權其他一切の利益を賣却したる也。即ち現時の換算によれば、即金にて百七十五圓、而して初版より三版迄の利金五百二十五圓、即ち總計七百圓にて賣渡したる也。

斯くて一六六七年八月廿日、文房商の登録簿に記入せられ、間もなく出版せられたり。其書は小なる四折判にて、其の標題には「失樂園、十卷の詩、著者如温彌耳敦」と記せり。定價一圓五十錢、今日の換算にては五圓二十五錢也。而して此書の出版せられたるは、曾て温和民黨にして、後に王黨となりたる當年のハイド、即ち査斯二世の宰相、大謀反史の著者クラレンドン卿失脚と同時にしは、偶發の事實として、記憶す可き價値なしとせず。

彼は如何にして、其の大作を成就したる乎。彼の詩作は、秋の彼岸より春の彼岸迄なりしと云へば、全く冬籠中を以て、其の製作時となし、而して其他は寧ろ準備、用意の爲めに消過したるが如し。特に深夜人定まりたる節は、彼が詩思の尤も王したる時にして、往々半夜に其の女兒を呼起し、之れを筆記せしめたりと

併せて古
人をも凌
駕せり

死灰中
より火燭

五十八歳
にて大成

云ふ

此書一たび世に出づるや、天下の識者は、騒然として之を迎へたり。斯人や、吾人を凌駕したるのみならず、併せて古人をも凌駕せりと。是れ當時の詞豪ドライデンの讃辭として、傳ふる所也。而して彼の聲名は噴々として、天下に轟き、彼の幽棲は、彼の所好を超過したる多數の訪客を迎へざる可らざるに到れり。彼が當時の光景は、恰もサムソンがフィリスチン人に、打勝ちたる際の述懐に似たり。『彼や盲目にして、賤悪せられ、既に全く屏息したりと思はれたりしも、彼の心眼の閃耀は、彼の熱烈なる精神を、死灰中より、俄然として、火焰を騰げしめたり。』と、嗚呼是れ夫子自ら道ふ也。

古人曰く、四十歳にして詩人死すと。其の肉身死するにあらず、詩情の死する也。然も彼は五十歳にして、其の端緒を啓らき、五十二歳にして、其の大作に取り掛り、五十八歳にして、之を大成せり。而して反動の狂瀾は、彼の政治上、宗教上、一切の理想を蕩漾し去りたるも、彼は前代の遺物として、更らに一世に打勝てり。否、な彼は一世のみならず、百世に打勝てり。否、な英語の存在する限りは、彼の大作は不朽也。而して彼も亦不朽也。

朽彼も亦不

六九 何故に失樂園を作りたる乎

少年時代の
一貫の
志望

詩人たる
可く生存

初戀は他
にあり

彌耳敦の『失樂園』に於ける宛もハンニバルが幼時に於て國讐たる羅馬に報ゆ可く、神壇に誓ひたるが如く、少ビットが他日大宰相たる可く、發念したるが如く、賴朝が蛭小島に於て天下の霸權を夢みたるが如く、彼が少壯時代より一貫したる志望たりし也、彼は詩を藝術として見ず、技巧として見ず、之を以て人類を感化し、之を以て神人を調和し、之を以て國家を福利する、天來の寶物として、之を尊崇し、而して自から天の恩寵によりて、詩人たる清職に服すること、覺悟したり、乃ち彼は生存せんが爲めに、詩人たるにあらずして、詩人たるべく生存したる也、彼の言を假りて云へば、則ち偉大なる人民に向て、道義と公義の種子を播き、且つ之を育成せんが爲めに生存したる也、然らば則ち彼は何故に、『失樂園』を作りたる乎、惟ふに彼の初戀は、此にあらずして、寧ろア・サーア王の武勇傳にありしが如かりし也、然も彼が中年以後に於

疑雲怪霧
中のア
サア王
武勇傳

神の大道
證明と好
題目

て、之を放擲したる所以は、蓋し第一彼が政見の變遷に原くものなくんばあらず、彼は共和論者となれり、然もア・サーア王の武勇傳は、王公、侯伯の義俠、忠烈の物語にして、苟も之を歌はん乎、却て王政に謳歌するの結果を來たさずんばあらず、

(第二)彌耳敦は、極めて眞實なる詩人也、彼は自個の確信以外に、超越する能はざるのみならず、亦た無根の事實に馮據し、之を粉飾して、我が才力を馳騁するが如き、放れ業の出来る才人にあらず、彼が英史を研究するや、當初には其の骨組丈は、事實談と思ひし、ア・サーア王の武勇傳も、今や疑雲、怪霧の中に消え去れり、確乎不拔なる地盤の上に、千古不滅の大伽藍を造營せんとする彼は、到底斯る軟沙の上に、手を著くるを許さざりしならむ、

(第三)彼は何故に『失樂園』を擇みたる乎、彼が所謂の神の大道を、人間に證明するには、此れより好題目なしと認めれば也、彼の詩は、人を樂しましめんが爲めにあらずして、人を教へんが爲め也、今夫れ天地開闢し、神人相和す、惡魔一た

信認の記
録と信仰
の告白

史詩の體
は鬼に金
神

彼の天才
は歌行的

び來たりて、人間墮落す。然も神子の救贖によりて、再生復活を得。是れ彼の確信の大信條にして、亦た彼の眞實と認めたる大事實也。人或は『失樂園』の叙記の驚絶、奇絶、怪絶、駭絶、千態萬様、名狀す可らざるを以て、悉く彼の假構より出で來りたりと爲す。是れ作者を買被るにあらざれば、作者を誣ふる也。彼の叙記は、彼の信認の記録にあらざれば、彼の信仰の告白也。彼は全體に於て、正しく詩中の所説の如く信じたり。蓋然の事實として、確然の事實として信じたり。彼の詩人としての長所も此にあり、其の短所も此にあり。然も其の『失樂園』の題目を採取したる所以も、亦た固より此にあらざらばならず。

(第四) 彼が劇詩の體を取らずして、史詩の體を取りたるは何ぞや。吾人は彼が當初に於て、劇詩として腹稿したるのみならず、其の或る部分を劇詩として起草し、後に之を史詩中に挿入したりとの説を疑はず。然も吾人は、彼が自から知るの明を嘉みせずんばならず。何となれば、彼は主觀詩人也。マコレーが所謂る、彼の天才は歌行的にして、戲曲的にあらずとの評は、破的の名言也。彼は客觀的作

國語を以
て歌へり

長所を發
揮するに
好都合

者として、第三者の位地に立ち、幾許の舞臺を廻轉せしめ、幾許の役者を活躍せしむる能はず。彼は直ちに彼の中心の感激と、信念と、知識とを傾け來りて、彼の教訓を與へずんば止まず。史詩の體は、彼に取りては鬼に金棒也。

(第五) 彼は拉典語の達人也。彼にして歐洲的名譽に汲々たらしめば、拉典語を以て長篇を作ることは、固より容易の業也。彼は幾回か考慮せり、然も彼は幸に其の國語を以て歌へり。彼にして若し拉典語を取らば、一時の名聲は、大陸に轟きたらむ。然も後世に於ては、唯だ文學史上の異聞として、纔かに其の作名を留むるに過ぎざりしならむ。但だ彼が其の國語を以て、國民的の讀者に訴へたるが爲めに、其の當世に於ては、國外に流布せしむるに、若干の不便ありしに拘らず、遂に英語と與に不朽となりしのみ。

以上算し來れば、彼は殆んど總ての點に於て、彼の長所を發揮するに、最も好都合を得たり。而して其の製作の時機に於て、最も然りと爲す也。彼は決して其の時期の晚れたるを嘆ずるを要せざる也。蓋し政争壇上、百戦の老兵は、『失樂園』

を作るには、最好の資格なれば也。

七〇 彌耳敦と失樂園

一嘘にだ
ずも値ひせだ
類似の點

『失樂園』に就ては、幾許の粉本あり、種本あり。是れ固より當然のみ。彼が如き希伯來、希臘、羅馬の古文詞より、現代の伊太利、佛蘭西の諸國語に到る迄、博渉したる學者に於ては、前人若くは現代人の精華を咀ひ盡して、悉く吾用と爲すは、偶々彼の大を爲す所以にして、決して怪むに足らず。而して世間、人の美を成すを欲せざるもの、或は彼の踏襲を語り、或は彼の剽竊を説く者あり。是れ實に一嘘にだも値ひせざる、妄庸子の見のみ。

彼が同時のグロチウスの拉典語の悲劇、アダムス・エキスユル——一六〇一年——に負ふ所あり。又た伊太利詩人、アンドレイニ——一五七八年——一六五二年——のアダモに負ふ所あり。又た和蘭詩人、ファンデルの、一六五四年出版の戯曲、リッパシファに負ふ所あり。又た古代アングロ・サクソンの詩人、ケイトモンドの作に負ふ所あり。何れも其の類似の點を擧げ來れば、僕指に違あらず。

題目の結
構と建設

杜市と彌耳敦

三一六

借用して
善化

失樂園と
二大潮流の
合流

蓋し人間の樂園失墜は、苟も創世記の一頁を瞥見する者には、當然出で来る話頭にして、此を題目としたるは、決して珍奇にあらず。穿鑿は如何にして、其の題目を捉へ得たるかにあらずして、如何にして、其の題目を結構し、建設したるか
にあり。惟ふに踏襲は、史詩作家の特權也。後人は却て、前人の構想を己に利用するの技倆を以て、自から誇れりと傲す也。人ありヴァーヂルに向て、其の法馬ホースの作を剽竊したるを刺る。彼昂然として曰く、汝等自から剽竊を試み來れ、汝等は法馬の一句を盗むよりも、却てハッキョレスの棍棒を奪ふの容易なるを實驗せむと。ハッキョレスは希臘神話中の大力者也。彌耳敦嘗て曰く、借用可也、借用して、之を善化するは、剽竊にあらずと。至言に庶幾し。

果して然らば、吾人は此の『失樂園』の大作中に、如何なる要素を見出す可き乎。吾人は所謂る文藝復興と、宗教改革の二大潮流の合流を見出す也。聖書、希臘羅馬の古文詞、伊太利、及び英國文學の滙會を見出す也。蓋し彌耳敦によりて、古今文藝の精粹を代表し、『失樂園』によりて、彌耳敦自身を代表すと云ふも、必ず溢

教養と趣
味は前々
代の遺物

カルウイ
ン派牧師
の口吻

辭にあらず。

彌耳敦は王政復古の後に於て、其の大作を成したるも、彼は其の教養及び趣味に於ては、寧ろユリサベス時代の、文藝復興期に屬する也。彼は自からドライデDruidンに語りし如く、スベンサアを以て、其の祖師と傲せり。彼は此點に於ては、其の教友たり、若くは政友たる清教徒と、其の立場を殊にしたるのみならず、固より王政復古の俗惡時代とも、全く懸絶したり。精神的に之を見教養的に之を見れば、彼は全く前代、寧ろ前々代の遺物にして、時代の波に洶きざし殘されたる、舊世界の形見のみ。

然も彼は幼時より、カルウイン派の神學にて練り上げられたり。彼が宗教上の意見は、年と與に幾許の變動を來したるも、其の根柢は依然として、カルウイン派たらずんばあらず。一篇十二卷、其の教理を説く所、或は神の口よりし、或は神子の口よりし、或は天使の口よりし、或は亞當アダム或は夏娃エバの口よりするも、悉く是れ三家村裡、カルウイン派の牧師の口吻たらざるはなき也。

第六章 七〇 彌耳敦と失樂園

三一七

失樂園は
鏡也

彼の不幸
作と此の大

要するに『失樂園』は、彌耳教の鏡也。彌耳教の人格、信仰學問甚だしきは其の閱歴に到る迄、或は明示せられ、或は暗諷せらる。彌耳教を解せずして、『失樂園』を解せんと欲するは、鍵なくして庫を開かんとするの類也。清の趙翼曾て元遺山を詠じて曰く、『國家不幸詩人幸。賦到滄桑句便工。』と。吾人は彌耳教が戀に失敗し、宗教に失敗し、一切の世間、人事に失敗するのみならず、其の兩眼さへも喪失したるを見て、彼の不幸に多大の同情を表すると同時に、如上の不幸の爲めに、却て此の如き大作を贏ち得たるを、感謝するを禁ずる能はず。乃ち彼が百事順境に了るも、其の大作あるに於て、半點の疑なし。但だ吾人は此の如き境遇にして、始めて此の如き大作に接するを得ることを、感謝せずんばならず。彼の不幸は、彼を不朽ならしめたる所以也。

七一 失樂園の宇宙觀

彌耳教の
宇宙觀

宇宙は四
個を以て
成立

天は神の
御居

吾人は『失樂園』の概念を得んが爲めに、聊か此の史詩中に現はれたる、彌耳教の宇宙觀を一瞥するの必要を感ず。然も只だ一瞥のみ。惟ふに『失樂園』中に明記若くは諷示せられたる、各般の文句を照合して構造すれば、宇宙には天、地獄、混沌、及び世界の四個を以て成立するが如し。而して最初には、唯だ天と混沌の二個あり、次ぎに混沌の底に、地獄出で來り、更らに混沌の上邊の中部に、世界出で來りたるが如し。蓋し天は廣大無邊にして、混沌との境界には、水晶壁あり、其上には蛋白石の高塔あり、青玉の胸壁あり、壁中には混沌に通ずる大門あり。

天は神の御居にして、其の莊嚴、崇美、無量、無限、形容の盡くす可きにあらざる也。混沌を隔つる壁より大道ありて、神の聖壇に通ず。其の道には燦爛たる星を以て抹せられ、其の道塵は皆な黄金の屑也。而して聖壇は、天の中心、聖岡の上にあ

天使會同の所

り。光明赫灼、仰ぐ可くして見る可らず。岡上に洞あり、此れより光明と、陰翳と交互に出で来る。蓋し天使亦た眠りて休息し、起きて勞作すれば也。岡を繞りて大野あり、百花妍を競ひ、清泉木の間を流れ、禽鳥和鳴す。是れ天使會同の所也。岡に接して碧玉の海に似たる鋪床あり、之を隔て、又た廣き地あり、其中に嘉蔭、清泉に圍まれたる亭子あり。是れ天使の周旋、盤桓する所也。生命の泉は、生命の樹によりて蔽はれ、朝々の膏雨は、地を潤し、香露は、柯に滿つ。此れよりして廣袤無邊、是れ魔王の前身大天使等が、七寶莊嚴の座を設けて、神の御旨を受けて、統治したる所也。

混沌は萬有の子宮

混沌は、天に隣れる、底知れぬ奈落也。此處は萬有の子宮とも云ふ可く、又た其の墳墓とも云ふべし。熱、寒、濕、燥、各々其の霸たらんことを争ひ、特に天に接近したる方面に於て、喧號尤も甚だしきを極む。而して混沌は、其の配偶者夜と與に、此の所の主たり。地獄は、混沌の底にあり、天の門より、九日九夜の行程を隔てたる底にあり。其の真中に、底知れぬ火池あり。池を圍んで火地あり。此の地上に、惡魔

惡評定所と地獄街

の大評定所は設けられ、此の大評定所を繞りて、地獄街は建設せらる。其街の周圍は、危崑、怪澗、曠野、磽嶮あり。更に此れよりして沙漠あり、洞穴あり、死蔭の谷あり、而して死河之を圍めり。更に此れよりして寒冷帶となる。滿目の氷雪、其の寒殺の苦は、熱殺の苦の如し。此れより地獄の堺となりて、三重門を設く。其上には、何れも猛火の穹窿あり。

彌耳教の所謂る世界

彌耳教の所謂る世界とは、地球にあらず、一切の天體、及び星宿を總稱する也。彼は故らに尙ほ當時流行したるトレミーの地球中心説を採用したるが如し。是れ詩材としては、恰好なりしが爲めならむ歟。此の世界は、天と混沌との中間にあり、而して混沌を通じて、地獄と相接す。此の世界や、廣大なる圓球にして、黄金の鎖によりて、天の門より其の頂點を釣り下げらる。地獄とは、其の最下部に於て、世界の半徑の距離を隔つ。而して天の門より地獄に至るの距離は、世界半徑の三倍也。

地球を中心として

抑々此の世界や、地球を中心として、月、水星、金星、太陽、火星、木星、土星等循環する